30th Anniversary

梓友会30周年記念誌

目 次

理事長挨拶 …… 4
お祝いの言葉 …… 6
地図と拠点 …… 14
誰もが心を開く、開国のまち 下田市 …… 16
光と水と緑に輝くまち 南伊豆町 …… 18
「ふるさと」と言いたくなる夕陽のまち 西伊豆町 …… 20
梓友会の方針 …… 22
梓友会ロゴ …… 23
法人本部 …… 24
台湾交流～事前視察～ …… 26
日台福祉人材交流研修 …… 28
財務情報 …… 30
親睦会 …… 32
同好会の発展 …… 34
ボランティアとともに歩む …… 36

梓友会 30年の軌跡

誕生前夜 …… 42
創生期 …… 45
発展期 …… 48
成熟期 …… 52
年表 …… 58

施設紹介

梓の里 …… 64
みなとの園 …… 70
太陽の里 …… 78
みくらの里 …… 86
小規模多機能型居宅介護みくらの里 …… 96
みくら保育園 …… 100
エクレシア南伊豆 …… 104

事業展開

川島理事長×黄氏対談
課題解決に向けて学び合う台湾と日本 … 120
地域貢献 …… 129
ISO9001の継続 …… 134
教育・研修 …… 135
学習療法 …… 136
ミッケルアート …… 138

座談会

職員座談会
30年の想いとともにこれまでを振り返る … 140

資料編

寄贈 …… 152
表彰 …… 154
理事長・理事・監事・評議員・会計監査人任期一覧 …… 156
理事長・理事・監事・評議員・会計監査人名簿 …… 158

編集後記 …… 159

希望 工夫 感動

30周年 ご挨拶

社会福祉法人梓友会 理事長
川島　優幸

社会福祉法人梓友会は、医療法人社団祥和会伊豆下田病院初代病院長の永田雅夫氏が、高齢化社会の到来に際し、長年の地域医療実践の中で育んできた思いを具現化しようと特別養護老人ホーム梓の里を創設したのが始まりです。

その年、平成元年（1989年）は、消費税が導入され高齢者保健福祉推進十か年戦略（ゴールドプラン）が策定された年でもありました。少子高齢化による福祉の需要にどう応えるかが、既に大きな課題となっていたのです。

福祉のあり方の変遷を改めて辿ってみますと、地域社会や家族を中心としたかつての相互扶助の時代から、やがて国による制度の時代に入り、その制度も措置制度から契約制度へと変化し、それとともに障害を持つ方や高齢者の自立とノーマライゼーションという課題もクローズアップされるようになりました。

社会保障・税一体改革における2025年モデルの実現に一定のめどがたった今、高齢者人口がピークに達するとされる2040年を見据え、現役世代の人口減少に伴う医療・介護の担い手不足にどのように対応するかが次の課題となっています。また、医療需要はピークアウトを迎えることが予想され、今後も介護需要は増すばかりです。その解決に向けた動きは既に始まっており、例えば今年2019年に本格化する外国人材の活用は、そうした課題解決の重要な糸口として大きな期待を寄せられています。

さて、梓友会は、創立後30年に渡り、福祉及び介護の普遍的価値を見詰め、一事を成すことの素晴らしさを述べていた永田初代理事長の理念を実現すべく、賀茂圏域1市5町における高齢者ケア向上のため、ノーマライゼーションの実践に努力し、加えて国の福祉制度では賄えないところにも目を向けるようにしてまいりました。

現在では、地域の高齢者ケアの充実を図るドミナント的経営方針のもと、下田市に2か所、南伊豆町には全国初の自治体間連携特養を含む2か所、西伊豆町に1か所の特別養護老人ホーム、その他にも小規模多機能型居宅介護、企業主導型保育事業などその時代毎の福祉ニーズに合わせた事業を展開するまでになっております。

これもひとえに、静岡県・下田市・南伊豆町・西伊豆町、東京都杉並区をはじめとする各自治体関係行政の方々、地区社協、ご利用者・ご家族・地域住民の方々、そしてボランティアの皆さんなど、大勢の方々のご協力があったからこそ成し得たことに違いありません。心より深く感謝申し上げます。

これまでの私どもの運営を顧みますと、ご利用者の人権を常に考え、福祉・介護サービスの質の向上に寄与してまいりました。また、地域で発生する各種の生活課題には積極的に対応し、地域における公益的取り組みを推進し、支え合う地域の実現に努めてまいりました。

30周年は、当法人にとりまして未来への一つの通過点と言えます。先人が「花は野にあるように」という言葉を残しております。いたずらに整えようとせず、一人ひとりの職員が出来る限り自然体で生命の大切さを実感できるようなケアを実践していければと思います。

役職員一同、社会福祉法人として非営利法人にふさわしいガバナンスを備えた独自性のある法人経営に邁進したいと考えます。

社会福祉法人梓友会の職員は、絶えず現場感覚を大切にし、幸せと言える高齢者を地域に一人でも多くすることで、地域社会の福祉・介護の向上に貢献していくことが私たちの使命であると考えております。

これからも当法人への一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

結びに、この記念誌の発刊に際し、ご多忙にもかかわらず、ご寄稿いただきました各諸先生に深く感謝申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

社会福祉法人梓友会
創立30周年を祝う

静岡県議会議員
森　竹治郎

下田市加増野の丘に「梓友会」が創立され30年の月日が経ちました。初代理事長の永田先生と初代下田市長石井基さんが私の事務所を訪ねて来られました。

永田先生は、「日本も年々高齢者福祉の時代を迎える。特別養護老人ホームを静岡県内最初に創りお年寄りの悩みを解消したい。」と熱っぽく説明されました。石井さんは「加増野の所有地を提供したい」との話で、そこで、当時の斉藤滋与史静岡県知事にも支援を求めたいとの事でありました。知事室にお二人を案内すると、斉藤知事は、永田先生の熱心な説明を受け、直ちに担当部長を知事室に呼び、永田先生や石井さんに協力する様に指示してくれました。30年前の知事室のシーンが昨日の事の様に浮かんでまいります。

加増野の丘からスタートした梓友会は、お年寄りやご家族の立場に立ってこの30年間に下田市・南伊豆町・西伊豆町と広域に高齢者福祉事業を展開し、更に明るい地域社会を創るため、その事業に努めてまいりました。これにより下田市・賀茂郡の多勢の関係者からご理解やご支援を受けているところです。近年に至っては、川勝平太静岡県知事のご視察や天皇陛下からも御下賜金を賜ったりもしました。最近では、台湾から研修生が学びに訪れたり、全国に先駆けて東京都杉並区と広域に亘っての介護老人福祉施設「エクレシア南伊豆」の経営をスタートさせております。この様な事も、初代理事長永田先生の高齢者福祉に寄せる高い志を引き継いで川島優幸理事長をはじめ、職員の皆様が心を一つにして昼夜を分かたず事業に取り組んでいるからこそと思います。創立30周年を大きなステップとしてこれからも静岡県・下田市・賀茂郡・杉並区の皆様のご期待に応えて梓友会の皆様のご活躍とご発展を祈って止みません。頑張って下さい。

創立30周年を祝して

下田市長
福井　祐輔

社会福祉法人梓友会が創立30周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

貴法人におかれましては、平成元年、下田市に特別養護老人ホーム梓の里を開設されて以来、デイサービス事業、ホームヘルプ事業など、社会の変化や地域のニーズに即した事業を展開されてきました。平成11年には、南伊豆町に特別養護老人ホームみなとの園、平成13年には、西伊豆町に特別養護老人ホーム太陽の里、平成17年には、下田市に介護老人福祉施設みくらの里を開設され、賀茂地域の高齢者福祉の充実と向上に多大な貢献をされてこられましたことに、深く感謝申し上げます。

さらに、平成30年には、南伊豆町に全国初の静岡県、東京都杉並区、南伊豆町の自治体間連携による介護老人福祉施設エクレシア南伊豆を開設されるなど、常に時代の一歩先を見据えた取り組みは、全国的にも高く評価されているところでございます。

このような他のモデルとなる施設を築いてこられた関係者の皆様方のご努力とご労苦に対し、深く敬意を表す次第でございます。

本市といたしましても、関係者の皆様方と一体となって地域の実情やニーズに即した事業を推進し、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせる社会の実現を目指して取り組んでまいりたいと存じますので、今後ともご支援、ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

終わりに、貴法人のますますのご発展と、皆様方のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

社会福祉法人梓友会
30周年記念誌 お祝いの言葉

南伊豆町長
岡部　克仁

社会福祉法人梓友会が、昭和63年の法人創設以来、記念すべき30周年を迎えられましたことに対しまして、心からお慶びを申し上げます。

梓友会は賀茂地域における地域福祉の拠点として、特別養護老人ホーム、介護老人福祉施設、デイサービスセンター、小規模多機能型居宅介護など、さまざまな介護及び福祉サービスを総合的に提供され、入所者・ご家族の方に対してはもちろん、賀茂地域全体の福祉向上にご尽力されてこられましたこと、深く敬意を表しますとともに、厚くお礼申し上げます。

とりわけ、昨年3月には南伊豆町と東京都杉並区の自治体間連携による、全国初の共同設置となる「介護老人福祉施設エクレシア南伊豆」も開設され、自治体の垣根を越えた取り組みが実現いたしました。

現在、当町の高齢化率は44.9％と高齢化が進んでおり、当町に暮らす高齢者や移住してくる高齢者がすこやかに生涯現役の暮らしを全うできるように「高齢者が自分らしく自立した暮らしを送れる生涯活躍のまち」を掲げ、地域が一体となって、高齢者等の暮らしを支える地域包括ケアシステムの構築を目指しております。

その実現のためには、行政、住民、福祉事業者等の協働と参画が不可欠であると考えております。

梓友会におかれましては、今後とも地域福祉の充実のため、ご協力いただけますようご期待申し上げる次第であります。

最後になりましたが、梓友会の今後ますますのご発展を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

社会福祉法人梓友会
創立30周年に寄せて

杉並区長
田中　良

梓友会創立30周年に際し、誠に喜ばしく、一言、お祝いの言葉を申し上げます。

貴法人には、本年3月に南伊豆町に開設した介護老人福祉施設「エクレシア南伊豆」の運営に携わっていただいています。

南伊豆町と杉並区は、区が昭和49年に健康学園を開設して以来、友好関係を築いてきました。その中で、双方の自治体の特養待機者ニーズに応えるとともに、杉並区にとっては要介護高齢者に新たな生活の場の選択肢を提供でき、南伊豆町にとっては雇用が創出できるなど、それぞれにメリットがある施策として、全国初の自治体間連携により実現したのが、「エクレシア南伊豆」です。

開設以来、区民の入居が進んでいますが、「エクレシア南伊豆」では、豊かな自然環境や、ゆったりとした生活空間の中、貴法人が長年に亘り培ってきたノウハウに基づく手厚いサービスや行き届いたサポートにより、質の高いケアが提供され、入居者やご家族から大変喜ばれています。また、スタッフの方たちによる、喫茶コーナー、かき氷会、レトロな居酒屋などの企画は、施設での生活に彩を添える催しとして、大変好評であると聞いています。

ほかにも、入居者に杉並を感じていただけるよう、高円寺阿波おどりの演舞や日本フィルハーモニー交響楽団による演奏会なども、町と連携して行っていただき、地域の方々にも喜んでいただいています。

今後も「エクレシア南伊豆」が、入居者やそのご家族、そして地域の住民にとって愛され続ける施設となるよう、杉並区としても、南伊豆町と連携して尽力してまいりますので、貴法人におかれましても、引き続きよろしくお願いいたします。

結びにあたり、梓友会の益々のご発展を心から祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

創立30周年誠におめでとうございます。

社会福祉法人梓友会
創立30周年に寄せて

静岡県社会福祉法人
経営者協議会 会長
山本　敏博

社会福祉法人梓友会が創立30周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

貴会におかれましては、1988年の創立以来、最高のケア、個人の選択権、QOL(生活の質)を最大限にする総括的な高齢者の福祉サービスを提供することを理念に掲げ、賀茂地域のみならず静岡県東部の福祉の充実に多大な貢献をされてきました。きめ細やかなサービスの提供に努力を重ねられ、特別養護老人ホーム、デイサービス等をご利用される方々とそのご家族様の信頼をあつめるばかりでなく、静岡県東部で生活されているすべての方が安心して生活し続けるための中核的な拠点として、地元の皆様から絶大な信頼を得ていらっしゃいます。さらに、大都市において個人と地域との「絆」や「縁」が薄れつつある中、東京都杉並区との絆と縁を結ぶ先進的な取り組みに果敢に挑戦されました。我が国が直面する課題に対して一つの解を示したことで、梓友会は今や日本で最も注目される社会福祉法人と言っていいでしょう。

このような取組ができる実力を持った法人として成長されてこられましたのは、法人理念に沿って日々真摯に利用者に向き合いながら、同時に、ISO取得など近代的な経営手法を積極的に取り入れる姿勢があったからであると存じます。ひとえに、揺るがぬ信念の元、幾多の困難を乗り越えられ、30年の月日を歩んでこられた川島理事長をはじめ、歴代の理事、職員の皆様が一丸となり、並々ならぬ努力と情熱、そして愛情を注がれた賜物であると、心から敬意を表します。

殊に川島理事長におかれましては静岡県社会福祉法人経営者協議会の副会長の役割にとどまらず、全国社会福祉法人経営者協議会協議員・高齢者事業委員として我が国全体の社会福祉法人をけん引されております。高いご見識をもったリーダーとして私も大いにご信頼申し上げており、日本、静岡県、賀茂地域がより暮らしやすい社会となるように手腕を振るっていただきたいと存じます。

今後の人口動態や経済の動向等を鑑みますと私たち社会福祉法人に求められる役割・使命はますます重要となってまいります。とりわけ貴会の豊富な知識と経験がこれまで以上に社会から求められることとなるでしょう。社会福祉法人梓友会は30年間の実績と信頼を基に今後も地域の期待を上回る活躍、貢献をされることを確信するとともに、日本全体の福祉的な課題に対し先頭に立って取り組んでいただけることを大いに期待いたしております。

末筆ではございますが、梓友会の役職員の皆様および、梓友会をお支えいただいているすべての皆様の今後のご活躍、ご多幸を心から祈念申し上げ、30周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

梓友会30周年に寄せて

駐リトアニア特命全権大使
山崎　史郎

法人創立30周年、本当におめでとうございます。

梓友会が創立以来掲げられてこられた「最高のケア、個人の選択権、QOLの最大化」という基本理念は、30年を経て下田の地で実現をみることができました。これは、ひとえに川島優幸理事長をはじめ、法人の皆様の絶え間ないご努力によるものであり、深く敬意を表します。

川島理事長とは、札幌市のノテ福祉会の対馬徳昭理事長から紹介していただいて以来親しくさせていただいていますが、現状に満足せず、常にケアの充実に心を砕き、そして、新たな取り組みに挑戦していこうとする姿勢に感銘を受けております。最近では、静岡県、南伊豆町及び東京都杉並区の「自治体間連携」の取組みとして、「エクレシア南伊豆」が開設されましたが、これは、都心の高齢者に対して特養による質の高いケアを提供するとともに、南伊豆の地方創生推進にもつながる画期的な取り組みです。これからも梓友会の積極的な取り組みに、心から期待申し上げております。

私は、現在、リトアニアの日本国大使を務めております。リトアニアをはじめとするバルト3国は、100年前に独立宣言をしたものの、1940年以降、ソ連、ナチス、そして再びソ連と、大国の支配を受け続け、その間に独立国家は消滅し、多くの知識人が殺害され、数十万人の人々がシベリアへ送られるなど、悲劇を経験してきました。それにもかかわらず、バルトの人々は自らの国家の回復を決してあきらめず、独立への想いを代々つないできました。そのことがはっきりと表れたのが、1989年にエストニアのタリンからリトアニアのビリュニスまでの600キロを200万人のバルトの人々が、独立を求めて手をつないだ『人間の鎖』です。その結果、1990年についに独立を回復します。

これは、ちょうど梓友会が創立されて間もない頃のことです。その後、バルト3国は社会主義経済から脱却し、EUに加盟。現在ではIT技術などで世界をリードする先端産業地域に大きく変身しつつあります。今、この地で私がお会いする政府や経済界のリーダーも、若い人が多く、過去を乗り越え、新たな国造りに取り組む意欲に溢れています。そうした場面に接すると、梓友会の皆様のエネルギッシュなお姿と重なって見えてきます。

梓友会の皆様には、これからも、日本の高齢者ケアのリーダーとして、常に将来を見据えた取り組みに邁進していただきたいと思います。ますますのご活躍を心からお祈り申し上げています。

梓友会30周年に寄せて

公益社団法人地域医療振興協会
伊豆今井浜病院 病院長
小田　和弘

梓友会関係者の皆様、創立30周年、誠におめでとうございます。

梓友会の30年の歴史は下田・賀茂地区福祉の歴史でもあります。現在、南伊豆町・下田市・西伊豆町に5か所の特養を構え、良質なケアを提供し、多くの人々のQOL（生活の質）を向上させ、ノーマライゼイションの実現に邁進する姿は、まさに梓友会の理念の実践に他ならないと思います。少し畑は違うものの、住民の健康に関わる仕事をしている一員として、この地区に梓友会が無かったら、と思うとぞっとする気持ちを抑えきれません。

日本医師会のデータによりましても、下田･賀茂地区の医療需要のピークは既に過ぎ、2025年に向けて、介護の需要が増していく事は明らかです。まさに時宜を得た30年間の事業であり、地域住民が求めるところでもあります。

平成30年3月には東京杉並区との間で、新しい形の自治体間連携特養「エクレシア南伊豆」もオープンされました。川島理事長の発想の豊かさと職員の真摯な態度が梓友会をここまでにしたことは疑いようもありません。どうか今後も地域福祉の牽引役としてますます発展されることをお祈り申し上げます。

また、医療と福祉という健康に関する問題の両輪として我々とも末永くお付き合いいただければ大変嬉しく思います。どうか宜しくお願い申し上げます。

30年を祝い、次の30年の活躍を期待して

埼玉県立大学理事長
慶應義塾大学名誉教授
田中　滋

梓友会の30周年を心よりお祝い申し上げます。措置時代から介護保険制度設立へ、さらに地域包括ケアシステム構築による共生社会へと時代環境が急速に変化していく中で、社会に貢献する姿勢を崩さぬご努力の賜物と存じます。

社会福祉法人経営も、他の事業体と同様、時代環境に適応しなくてはなりません。取り分け、わが国高齢者ケアにとって、現時点での主たる目標は地域包括ケアシステムの構築です。地域包括ケアシステムは、2008年に「医療ニーズを併せ持つ要介護者が、施設・在宅・居住系のどのサービスを利用するかを問わず、日常生活圏域において切れ目のない連続的かつ包括的な医療介護による支援を受けるにはどうしたらよいか」から検討が始まりました。

一方、2019年の地域包括ケアシステム概念はもっと広く、予防はもとより、多世代共生を上位目的として、多様な人々が地域で暮らしていくための仕掛けも視野に含まれています。つまり、法人施設内だけにとどまらず、地域全体を視野に入れ、高齢者・障がい者・児童、その家族の自己肯定感を強める支援が欠かせません。

特に、地域づくりを展開する上では社会福祉機能の位置づけをもっと重視すべきとの意見が強くなりました。医療・介護にかかわる課題の底に、生活困窮や家庭内の複合問題が存在する場合には、社会福祉技法の修練を積んだ従事者を抱える社会福祉法人の力は不可欠です。

社会福祉法人も医療機関も、民間介護事業者も、一人ひとりの患者・利用者に適切なサービスを提供するだけでは十分条件を充たしたことにはならない時代と言えます。患者･利用者がくらす地域の課題に目を向け、住民や自治体と構想を共にし、新たな地域づくりに協力するあり方が求められています。梓友会の次の30年に向けての進展を大いに期待します。

地域に5拠点

梓友会は創立以来、沢山のスタッフ、
地域の方々に支えられながら、事業を拡大し、
成長してきました。

太陽の里
〒410-3514
静岡県賀茂郡西伊豆町仁科 1134

デイサービスセンター太陽の里
〒410-3514
静岡県賀茂郡西伊豆町仁科 393

梓の里
〒413-0713
静岡県下田市加増野 181-1

エクレシア南伊豆
〒415-0304
静岡県賀茂郡南伊豆町加納 792

法人本部・みくらの里
〒415-0028
静岡県下田市吉佐美 1086

小規模みくらの里
〒415-0028
静岡県下田市吉佐美 1077-16

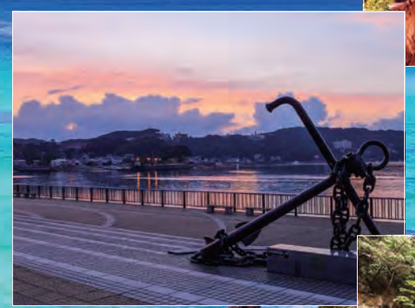
みくら保育園
〒415-0028
静岡県下田市吉佐美 1077-16

みなとの園
〒415-0152
静岡県賀茂郡南伊豆町湊 638-1

下田市

誰もが心を開く、開国のまち。

伊豆半島の南東に位置し、
天城山系の南端から太平洋に至る
豊かな自然に恵まれた都市です。
開港の歴史に彩られ、
近代日本に黎明をもたらした港と海と山に囲まれた、
温泉の町としても有名です。



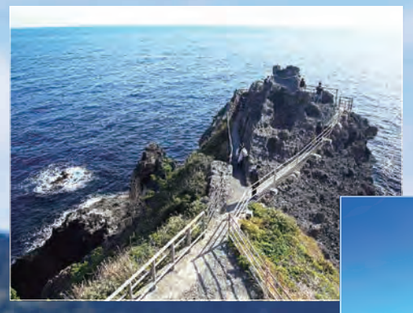
静岡県下田市

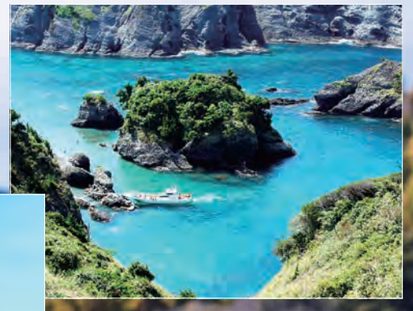
人口：21,937人
面積：104.38㎢
2018年4月1日現在

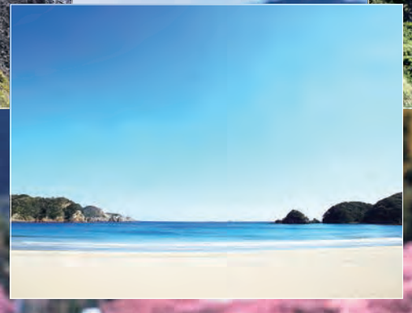
南伊豆町

光と水と緑に輝くまち。

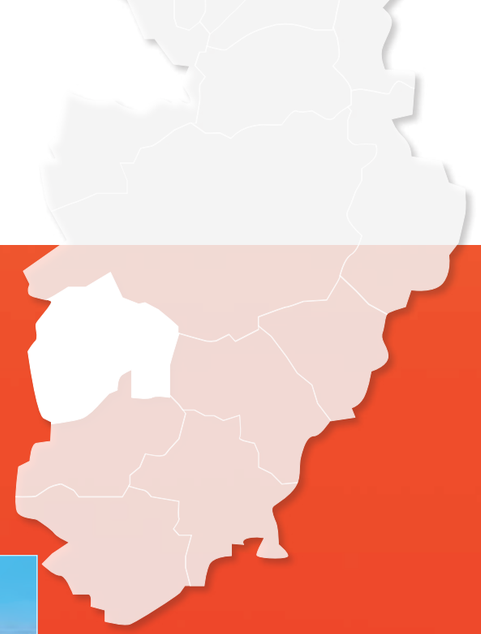
伊豆半島最南端、日当たりの良い「日本の縁側」に位置する町です。
「光と水と緑の町」として、富士箱根伊豆国立公園に属する一大景勝地でもあります。







静岡県賀茂郡南伊豆町
人口：8,456 人
面積：109.94㎢
2018 年 4 月 1 日現在



西伊豆町

「ふるさと」と言いたくなる夕陽のまち。

伊豆半島西海岸の中央に位置し、駿河湾と天城山に挟まれ、
年間を通じて温暖な気候であるとともに、景観にも恵まれており、
水平線に沈む美しい夕陽が自慢のまちです。

静岡県賀茂郡西伊豆町
人口：8,083 人
面積：105.54㎢
2018 年 4 月 1 日現在

梓友会の方針

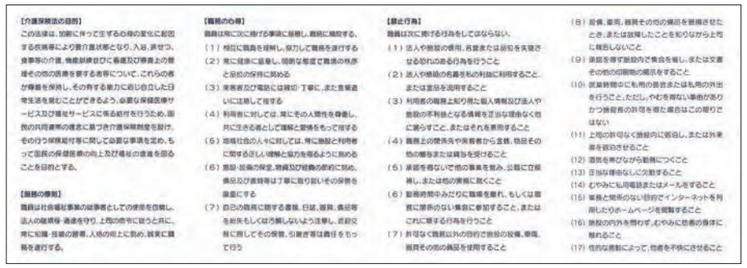
下田市と賀茂地域に最高のケア、個人の選択権、ＱＯＬ（生活の質）を
最大限にする総括的な高齢者の福祉サービスを提供する。

1 選ばれる施設を目指して
顧客満足度の向上に努力する

2 自立支援とＱＯＬ（生活の質）を重視した
良質なサービスを提供する

3 ノーマライゼーションの実現を通して
地域福祉の増進に貢献する

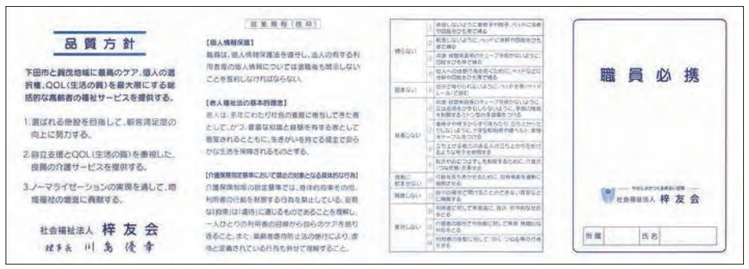
社会福祉法人 梓友会
理事長 川島　優幸


【介護保険法の目的】
この法律は、加齢に伴って生ずる心身の変化に起因する疾病等により要介護状態となり、入浴、排せつ、食事等の介護、機能訓練並びに看護及び療養上の管理その他の医療を要する者等について、これらの者が尊厳を保持し、その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、必要な保健医療サービス及び福祉サービスに係る給付を行うため、国民の共同連帯の理念に基づき介護保険制度を設け、その行う保険給付等に関して必要な事項を定めもって国民の保健医療の向上及び福祉の増進を図ることを目的とする。

【職務の準則】
職員は社会福祉事業の従事者としての使命を自覚し、法人の綱領等・倫理を守り、上司の指示に従うと共に、常に知識・技術の習得、人格の向上に努め、誠実に職務を遂行する。

【職務の心得】
職員は常に次に掲げる事項に留意し、職務に精励する。
（1）相互に職員を理解し、協力して職務を遂行する
（2）常に健康に留意し、明朗な態度で職務の秩序と規律の保持に努める
（3）来客者及び電話には積極丁寧に、また言葉遣いに注意して接する
（4）利用者に対しては、常にその人格を尊重し、共に生きる者として理解と愛情をもって接する
（5）地域社会の人々に対しては、常に施設と利用者に関する正しい理解と協力を得るように努める
（6）施設・設備の保全、物資及び経費の節約に努め、備品及び書類等は丁寧に取り扱いその保管を厳重にする
（7）自己の職務に関する書類、印鑑、通帳、重要物を紛失もしくは汚損しないよう注意し、直ちに上司に報告してその保管、引渡者等は責任をもって行う

【禁止行為】
職員は次に掲げる行為をしてはならない。
（1）法人や施設の信用、名誉または品位を失墜させる恐れのある行為を行うこと
（2）法人や施設の名義をもの利益に利用すること、または私用をすること
（3）利用者の職務上知り得た個人情報及び法人や施設の不利益となる情報を正当な理由なく他に漏らすこと、またはそれを悪用すること
（4）職務上の関係先や来訪者から金銭、物品その他の贈与または饗応を受けること
（5）承認を得ないで他の事業を営み、公職に立候補し、または他の業務に就くこと
（6）勤務時間中みだりに職場を離れ、もしくは無断に集会への集会に参加すること、またはこれに類する行為を行うこと
（7）許可なく職務以外の目的で施設の設備、車両、器具その他の備品を使用すること
（8）設備、車両、器具その他の備品を破損させたとき、または故障したことを知りながら上司に報告しないこと
（9）承認を得ず施設内で集会を催し、または文書その他の印刷物の頒布をすること
（10）就業時間中にも用の者および私用の外出を行うこと。ただし、やむを得ない事由があり かつ施設長の許可を得た場合はこの限りではない
（11）上司の許可なく施設内に宿泊し、または外来者を宿泊させること
（12）酒気を帯びながら勤務につくこと
（13）正当な理由なしに欠勤すること
（14）むやみに私用電話またはメールをすること
（15）業務と関係のない目的でインターネットを利用したりホームページを閲覧すること
（16）施設の内外を問わず、むやみに他者の身体に触れること
（17）性的な言動によって、他者を不快にさせること


品質方針

下田市と賀茂地域に最高のケア、個人の選択権、QOL（生活の質）を最大限にする総括的な高齢者の福祉サービスを提供する。

1.選ばれる施設を目指して、顧客満足度の向上に努力する。
2.自立支援とQOL（生活の質）を重視した、良質の介護サービスを提供する。
3.ノーマライゼーションの実現を通して、地域福祉の増進に貢献する。

社会福祉法人 梓友会
理事長 川島 優幸

従業務程（抜粋）

【個人情報保護】
職員は、個人情報保護法を遵守し、法人の有する利用者等の個人情報については業務上知り得たことを漏らしてはならない。

【老人福祉法の基本的理念】
老人は、多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として、かつ、豊富な知識と経験を有する者として尊重されるとともに、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障されるものとする。

【介護保険指定基準において禁止の対象となる具体的な行為】
介護保険制度の指定基準では、身体的拘束その他、利用者の行動を制限する行為を禁止している。安易な自由奪い連絡に連なるものであることを理解し、一人ひとりの利用者の尊厳から目からのケアを心がけるとともに、また、高齢者虐待防止法の施行により、虐待と定義されている行為を許せて理解すること。

拘らない	1	本当にしないようご身体または特に、ベッドに注意や危険性などを見つける。
	2	転倒しないように、ベッドに体重の危険をかけて頂く。
窓塞ない	3	点滴、経管栄養中のチューブ等が抜けないように固定などを常で頂く。
	4	他人への迷惑行為をさせるために、ベッドからどこに行くのか目的などを聞く。
抑制しない	5	自分で降りられないようにベッドを低くサイドレールなどお願い。
	6	点滴、経管栄養中のチューブ等が抜けないように又は患者をかきむしらないように、手袋の着用を指導するなどの処置を行う。
	7	徘徊や不穏さらずで落ちたり、立ちよったりしないように、ご家族や病棟や廊下など、適宜ナースコールをつける。
	8	立ちよりお着の方の名前と入れ立ちよりや引き止めるような発言を控える。
道具に 拘束させない	9	転倒や転落につながる危険性があるために、抑制帯を適宜に使用させる。
拘束しない	10	自分自身で取り出すことのできない場所などに物を置く。
身体しない	11	利用者に対して身体拘束に、自分 自分自らおこなる。
	12	介護者の都合で利用者に対して安易な身体拘束をする。
	13	利用者の指導に対して、ご対しつ仕る等の行為をする。

職員必携

社会福祉法人 梓友会

所属　氏名

梓友会ロゴ

社会福祉法人
梓友会
（しゆうかい）

社会福祉法人梓友会ロゴ

法人創立30周年記念作成　社会福祉法人梓友会ロゴ

作成：イラストレーター　なかむらるみ
梓友会シンボルマーク由来である"手"をモチーフに作成

法人創立30周年記念作成　社会福祉法人梓友会ロゴ

作成：イラストレーター　なかむらるみ
みくらの里見学を通して、人と人の繋がりを感じ作成

法人本部

2005年（平成17年）2月16日に法人本部を下田市加増野181-1から下田市吉佐美1086へ移転しました。事務局長を中心とし、各施設におけるコンプライアンスの徹底と規程・規則に基づく組織運営や、危機管理機能、情報公開機能を担っております。さらに、地域のニーズに応え、安心と安全の良質なサービスを提供するため、利用者の処遇向上施策、また、職員の人事運営施策を企画立案し、各施設の運営の支援をしています。

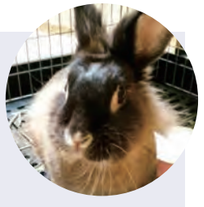
法人創立30周年を迎えるにあたり

法人本部 事務局長
江渡　隆

社会福祉法人梓友会は、1988年（昭和63年）の社会福祉法人の設置認可から法人創立30周年という大きな節目を迎えることとなりました。当時、賀茂地区で最初の特別養護老人ホームの開設には、多くの苦労があったと思いますが、地域の声に応えるべく、初代理事長の永田雅夫氏をはじめとした先人たちの尽力により、成し遂げられました。

我々、社会福祉法人の使命は福祉サービスの提供はもとより、地域や社会で必要とされている様々なニーズに対応していくことであり、昨年は地域の枠を超えた多様なサービス提供の新たな形の一つとして、全国初となる自治体間連携による特別養護老人ホームとして、エクレシア南伊豆を開設することが出来ました。

これまでの30年にわたり、当法人を支えていただいた地域住民の方々、ご利用者とご家族、各種ボランティア団体の方々、静岡県をはじめ各行政関係者の皆様には深く感謝申し上げます。これからも、当法人は社会福祉法人としての役割と責任を自覚し、様々なニーズに応えるべく、法人役職員一同、力を尽くして参る所存であります。今後とも一層のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

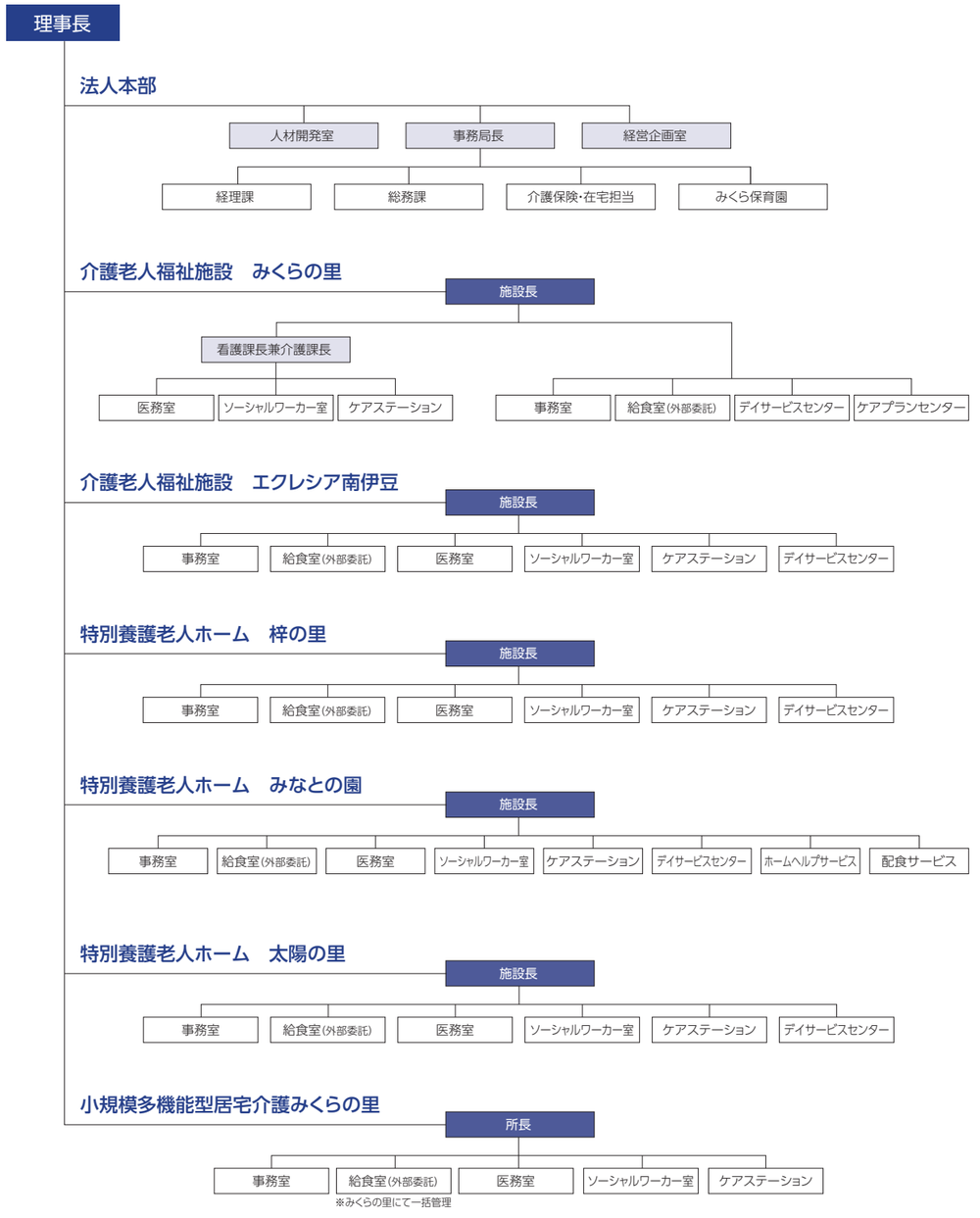


広報課長
もくちゃん

性別：メス
種類：雑種
勤続：7年
好物：ブロッコリー
特技：皿回し、皿投げ

社会福祉法人 梓友会　組織図

2019年（平成31年）1月時点



梓友会30周年記念事業

台湾交流 ～事前視察～

梓友会30周年記念事業の一環として『日台福祉人材交流研修』を開催するにあたり、本研修への参加候補者を公募することといたしました。それに先立ち、2018年（平成30年）4月に政策研究大学院大学（GRIPS）ポストドクトラルフェロー黄俊揚先生（当時）のコーディネートにより台湾・台中市政府をはじめ台南市、および高雄市の医療系大学等を訪問し、社会福祉法人梓友会の紹介と当法人が企画している交流研修のプレゼンテーションを実施させていただきました。

参加メンバー

黄　俊揚（当時）
政策研究大学院大学
科学技術イノベーション政策研究センター
ポストドクトラルフェロー

岩城　洋子（当時）
国立研究開発法人国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター 研究員

川島　優幸
社会福祉法人梓友会
理事長

江渡　隆
社会福祉法人梓友会
事務局長

研修日程

4月25日（水）
・台中市政府懇談会
・有本工坊視察

4月26日（木）
・国立成功大学医学院　老年学研究所　訪問
・台南成大RC　訪問

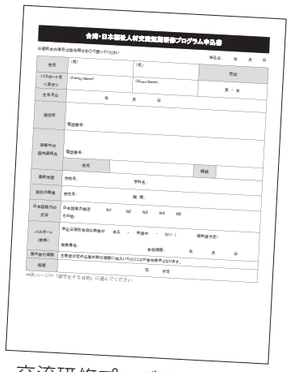
4月27日（金）
・高雄医学大学護理学院　訪問

提案の概要

台湾の学生や福祉従事者を対象とし、梓友会が運営する伊豆地域の施設へ招き、見学・講義を通じて地方過疎地域の高齢者福祉の現状、および、医療機関との連携などを視察していただく。また、伊豆地域や日本の文化に触れていただくことや、地元自治体への表敬訪問などを行うことにより、今後の日本と台湾の継続的な交流のきっかけとなるような機会を提供する。

募集要項

項目	概要
目的	日本の介護技術の取得および将来的な台湾もしくは日本での福祉活動
期間	2018年（平成30年）7~9月の内2週間程度
日本語技能検定	N2 ～ 3レベル
資格	福祉系学科、福祉系企業で就労する社会人大学院生 特に、看護師等のライセンス保持者を優先
宿泊先	下田市内のホテルを手配予定
食事の提供数	平日3食・土日2食
最少催行人数	3名


交流研修プログラム申込書

訪問記念タペストリー

梓友会30周年記念事業

日台福祉人材交流研修

実施項目

9月4日（火）
- 研修生日本到着

9月5日（水）
- みくらの里見学＆眠りスキャン紹介
- **『日本における国際保健に関わる医療政策形成』**
  講師 公衆衛生専門家　岩城 洋子 氏（当時）
- **『日本における脳卒中リハビリテーション～現状と未来』**
  講師 株式会社スターパートナーズ　理学療法士　松尾 厚 氏
- 南伊豆町表敬訪問
- 研修生歓迎会

9月6日（木）
- 小規模＆みくら保育園 見学
- **『日本の介護保険制度について』**
  講師 社会福祉法人梓友会 みなとの園施設長　原田 昌志
- **『ユニットケアの理解』**
  『体系的なご利用者へのご支援について』
  担当 社会福祉法人梓友会 みくらの里
  看護課長兼介護課長　鈴木 雅世
  介護係長兼介護支援専門員係長　黒田 秀宗
  SW室副主任生活相談員　柏木 育美
- 茶道体験

9月7日（金）
- 協力医療機関　伊豆今井浜病院見学
- エクレシア南伊豆見学
- **『CCRCについて』**
  講師 南伊豆町企画課地方創生室　主幹 山口 一実 氏
- 修了式（修了証授与）＆記念品贈呈

9月8日（土）
- 下田市内観光

9月9日（日）
- 東京観光

9月10日（月）
- 研修生お見送り

研修の目的

当法人創立30周年記念事業の一環として、台湾の医療・介護・福祉の人材（学生も含む）を対象として日本の高齢者ケアの実態、とりわけ当法人自治体間連携特養『エクレシア南伊豆』や協力医療機関『伊豆今井浜病院』の視察や各専門家による講義等を通じ、日本の介護保険制度、人口減少社会の中での地域包括ケアの在り方等を学び、また、ICTやロボットなどの導入状況について正しい理解を深めアジアの医療介護・福祉の進展に資することを目的とする。

そのほか、伊豆の文化や観光資源の魅力を伝えるため、本研修滞在期間中においては、下田市を中心とした伊豆の風光明媚な地域を訪問していただきたい。

実施要綱

■研修期間
2018年（平成30年）9月4日（火）～9月10日（月）

■研修人員
台湾より合計3名
応募者数14名
（國立成功大學、高雄医学大学、台中市私立真愛社會福利慈善事業基金會、台中仁愛の家）
4名Skype面談実施
以下、3名を選定
●高雄医学大学 学生 王群博:オウ チュンポ（男性）
●真愛社會福利慈善事業基金會
ホームヘルパー 高志齊：カオ チキ（男性）
●奇美医療センター 看護課長 呉美珍：ゴ ミコ（女性）

■使用言語：日本語＆中国語
＜中国語通訳案内士 呉小美：ゴ ショウビ＞
※講義により英語使用

研修生の言葉

高雄医学大学 学生　王群博（オウ チュンポ）

研修の日々はとても素晴らしく、充実した日々を過ごせました。梓友会のお蔭でたくさん勉強ができましたこと、非常に感謝しております。

とても良い経験でした。

本当に熱心に説明をしてくださったお蔭で分からないことは一つもありませんでした。

ありがとうございました。

真愛社會福利慈善事業基金會 ホームヘルパー　高志齊（カオ チキ）

今回、台湾日本福祉人材交流短期研修の機会をくださり本当にありがとうございました。 梓友会で学ばせていただいた様々なことを利用者の方のために活用していきたいと思っております。

また、今回習った技術、知識や理念を持ち、将来小規模福祉施設を設立する夢へと繋げていきたいと思います。梓友会の皆様に心より感謝致します。

奇美医療センター 看護課長　呉美珍（ゴ ミコ）

今年から高齢者介護とその関連カリキュラムの授業に参加することを通してこの素晴らしいチャンスがあることを知り、研修へ応募しました。日本で高齢者介護現場研修をする機会を得ました。最高の宝物を手に入れたような気分でした。

目下、高齢者介護は、すべての国が直面しなければならない課題の一つです。「梓友会」の川島理事長が用意なさった今回の交流研修を通して日本の高齢者介護の現場を目の当たりにすることができました。様々の思いで胸がいっぱいになりました。

ありがとうございました。

※翻訳：呉　小美

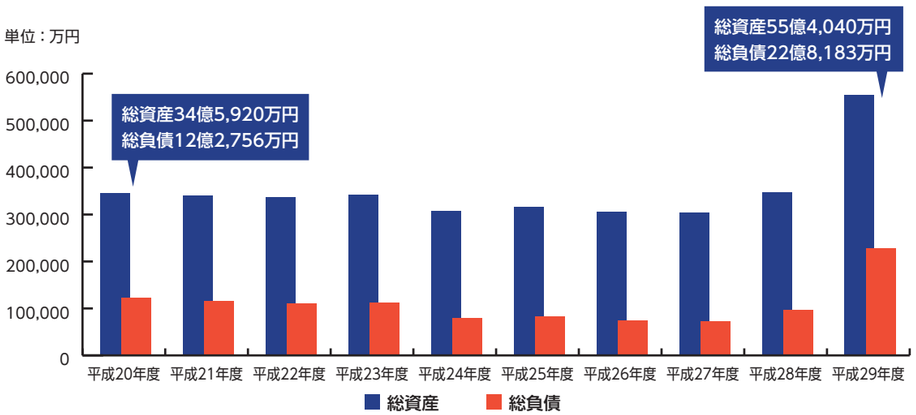
財務情報

近年における多様化する福祉ニーズや、介護保険報酬の改定、社会福祉法の改正など、経営環境が急速に変化し続ける中で、その時代にあわせた福祉・介護サービスの質の向上をおこない、財務体質の強化を図ってきました。
今後も、事業運営の透明性の向上や財務規律の強化をおこない、地域における公益的な取り組みを推進していきます。

サービス活動収益と職員数

既存施設の福祉サービスの充実及び平成26年度における小規模多機能型居宅介護みくらの里の開設、平成29年度における介護老人福祉施設エクレシア南伊豆の開設、企業主導型保育事業みくら保育園の開設による継続的な事業拡大でサービス活動収益は増加をたどり、それに伴い職員数も増加している。

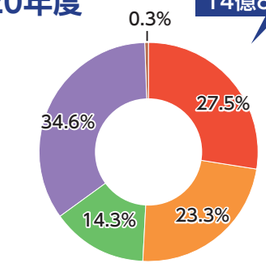
総資産合計／総負債合計



平成29年度は自治体間連携特養のエクレシア南伊豆の施設建設により、総資産および総負債はともに増加している。

サービス活動収益

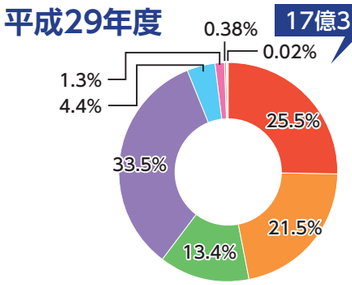
平成20年度　14億8,138万円



単位：万円

拠点別	金額
梓の里	40,720
みなとの園	34,590
太陽の里	21,157
みくらの里	51,179
法人本部／人材開発室	492
合計	148,138

平成29年度　17億3,216万円



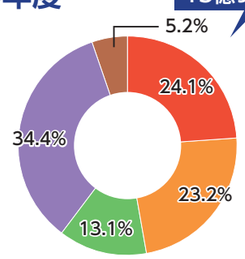
単位：万円

拠点別	金額
梓の里	44,110
みなとの園	37,330
太陽の里	23,191
みくらの里	58,024
小規模多機能型居宅介護みくらの里	7,597
みくら保育園	2,229
エクレシア南伊豆	692
法人本部／人材開発室	43
合計	173,216

ユニットケアの推進など、その時代のニーズに合わせた福祉・介護サービスの提供により収益構造や規模が変化している。

サービス活動費用

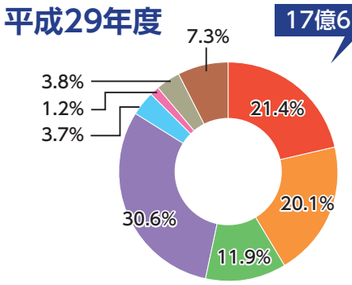
平成20年度　13億9,509万円



単位：万円

拠点別	金額
梓の里	33,641
みなとの園	32,428
太陽の里	18,209
みくらの里	47,926
法人本部／人材開発室	7,305
合計	139,509

平成29年度　17億6,563万円



単位：万円

拠点別	金額
梓の里	37,854
みなとの園	35,492
太陽の里	20,966
みくらの里	53,919
小規模多機能型居宅介護みくらの里	6,558
みくら保育園	2,093
エクレシア南伊豆	6,758
法人本部／人材開発室	12,923
合計	176,563

平成29年度は自治体間連携特養のエクレシア南伊豆の開設準備費用の計上により、増加している。

親睦会

UA ゼンセン梓友会ユニオン

「社会福祉法人梓友会」の繁栄を通じ、豊かな生活の実現と明るく元気よく楽しい職場の確立を目指し、UAゼンセン梓友会ユニオンは活動しています。

当時の執行委員長であった藤沢利次氏が中心となり、事業規模の拡大に伴い2002年（平成14年）7月23日、大会宣言を行い『UIゼンセン同盟梓友会ユニオン』（後の『UAゼンセン梓友会ユニオン』）が結成されました。

2003年（平成15年）10月15日開催の第1回定期大会を皮切りに今年で16回目を迎えました。

ユニオンは、結成された意義を常に確認し、多様化される働き方の中で職員の明るく、働きやすい職場環境の創出に努め、一歩一歩着実に前進していきます。

※ユニオンの活動の様子は『ユニオンニュース』を発行し周知しています。

労使協議会

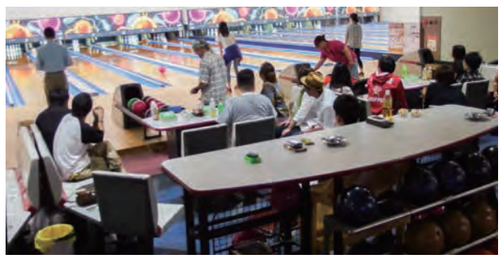
ユニオンが結成され、現在まで、毎年3回以上の労使協議会を開催しており、毎月各施設の執行委員が集まり、現状報告・課題の検討を実施しています。職員の一人ひとりが希望する働き方を選択することができ、個人の能力を遺憾なく発揮できるような雇用を目指し、常に職員の待遇改善に努めております。

役員一覧（2019年（平成31年）1月31日現在）

執行委員長	鈴木　寛	執行委員	長島　知美
執行副委員長	井上みゆき	執行委員	稲葉　美佳
執行書記長	平澤智奈美	執行委員	土屋　正江
執行書記長	山田　浩	執行委員	松本　結花
執行委員	長嶋　達也	執行委員（ろうきん）	鈴木　康弘
執行委員（伊豆地協）	海老沢宏平	執行委員（全労済）	山田　博幸
執行委員	水野奈美枝	執行委員	藤久保里奈
執行委員	村松みちる		

主な行事

定期大会の様子



ボーリング大会

ぶどう狩り

スカイツリー散策

職員忘年会

社会福祉法人梓友会職員忘年会の主催は、『UAゼンセン梓友会ユニオン』が担っています。職員の団結と親睦を深めるため、目玉企画である『抽選会』を中心に運営を行い、毎年職員を楽しませてくれます。

鈴木寛委員長あいさつ

忘年会の様子

職員表彰式

平成30年度 社会福祉法人梓友会職員表彰式の様子

元気な職員たち

エクレシアの集い

法人内で幸せな家族が誕生しました！

同好会の発展

法人内同好会活動により、年齢、性別、職種、施設等の垣根を越えた新たなコミュニティを創出することで、職員間の交流を密にし、風通しの良い職場づくりを目指しています。

チーム梓友会紹介

チーム梓友会は、2010年（平成22年）の1月に開催された下田・河津間駅伝競走大会への出場を機に梓友会の職員有志で結成されました。その後、アクアスロンチーム等へ発展しており、梓友会の職員を中心に活動を行っています。施設の垣根を越え、職員同士の絆を深めていけるチームを目指しています。
※チーム人数はその年により変動します。

2016年チーム梓友会駅伝報告

梓友会駅伝チームは、2010年（平成22年）1月の下田・河津間駅伝競走大会への出場を機に梓友会4施設の職員有志で結成されました。地域のマラソン大会出場を中心に梓友会4施設（当時）の職員で活動を行っています。

年によっては、メンバーの最年少が19歳、最高齢は42歳と親子ほどの年齢差のあるバラエティーに富んだメンバーでチームを作って参加しました。

これまでの成績は2013年（平成25年）1月の駅伝で一般の部11位（47チーム出場）が最高成績でした。今年は強風の為タイムこそよくありませんでしたが、過去最高の成績（10位）を残すことが出来ました。順位やタイムを追い求めるチームではありませんが、いい成績が出る事は素直にうれしいものです。

又、早い順位で襷を受けるのは駅伝特有の緊張感があります。

年々増加する沿道の応援から、地域の方や職場での認知度も少しずつですが、高まってきているように感じています。

これからも、出るからには『遅くても全力で走る事』をモットーに参加して行きたいと思っています。

今後も、施設の垣根を越えて交流を深め発展できるようにがんばっていきますので、来年も沿道で見かけましたら「しっかり走れ！」とお声をかけて下さい。皆様の声援に精一杯応えさせていただきます！

駅伝部　部長　本村

成績

2010年1月	21／36	1時間39分25秒
2011年1月	出場無	
2012年1月	13／47	1時間33分22秒
2013年1月	11／46	1時間30分37秒
2014年1月	12／42	1時間31分15秒
2015年1月	14／43	1時間35分39秒
2016年1月	10／42	1時間33分8秒
2017年1月	14／46	1時間36分8秒
2018年1月	14／45	1時間36分22秒

2012年（平成24年）

総合 13位(47チーム中)

応援･ご協力していただきありがとうございました。

1位	ナチュラルフーズ	5位	バルセロナ
2位	下田調理師会		⋮
3位	オール河津	13位	チーム梓友会
4位	東伊豆ＴＦＣ		

2014年（平成26年）

健闘 12位（昨年11位）

昨年には、及びませんでしたがまずまずの成績でした。沿道で多くの方に、応援して頂きありがとうございました。
1区みなとの園山本選手区間5位、2区高橋選手区間8位の好走！

1位	オール河津	5位	下田消防署
2位	ナチュラルフーズ		⋮
3位	東伊豆ＴＦＣ	12位	チーム梓友会
4位	ウインデイ		⋮

2015年（平成27年）

寂寥 14位（昨年12位）

昨年には、及びませんでしたがまずまずの成績でした。沿道で多くの方に、応援して頂きありがとうございました。
激戦区の1、2区で好走！みなとの園山本選手区間5位、2区高橋選手区間7位の好走！

1位	下田OA	5位	下田消防署
2位	オール河津		⋮
3位	ナチュラルフーズ	14位	チーム梓友会
4位	東伊豆ＴＦＣ		⋮

2016年（平成28年）

健闘 10位 過去最高順位
（昨年14位）

2010年(21位)の初参加から6回目にてようやく一桁順位が見えてきました。沿道で多くの方に、応援して頂きありがとうございました。
激戦区の1、2区で好走！みなとの園山本選手区間4位、2区高橋選手区間7位の好走！その後も大崩なく走り切りました！

1位	下田OA	5位	東伊豆TFC
2位	オール河津		⋮
3位	ナチュラルフーズ	10位	チーム梓友会
4位	下田消防署		

2017年（平成29年）

奮戦 14位（昨年10位）

2010年(21位)の初参加から7回目となりました。一桁順位を目指しましたが届きませんでした。
多くの方に、応援して頂きありがとうございました。
激戦区の1、2区で好走！みなとの園山本選手区間2位、5区急遽区間変更で梓の里 長島選手 力走！

1位	下田OA	5位	下田消防署
2位	オール河津		⋮
3位	東伊豆TFC	14位	チーム梓友会
4位	ナチュラルフーズ		

2018年（平成30年）

奮戦 14位（昨年14位）

2010年(21位)の初参加から8回目となりました。一桁順位を目指しましたが届きませんでした。沿道で多くの方に、応援して頂きありがとうございました。
激戦区の1、2区で好走！3区へ5位でタスキリレー、みなとの園山本選手区間3位、6区初の女性選手みなとの園 十川選手 力走！

1位	下田OA	5位	いなずさ
2位	オール河津		⋮
3位	下田消防署	14位	チーム梓友会
4位	ナチュラルフーズ		

ボランティアとともに歩む

梓友会の原点は、「地域とともにある」ことです。
平成元年よりともに歩んで頂いた地域のボランティアグループの方々には多くのご協力・ご支援を頂き感謝の念に耐えません。
皆さまが培ってきた経験や技術が、更なるサービスの向上へ繋がっております。
今後も互いに手を取り合っていけたなら幸いです。
ここに一部ですがご紹介をさせて頂きます。（※以下、敬称略）

梓の里 ボランティア

団 体 名：我楽路の会
活動内容：清拭布裁断

団 体 名：女性の会
活動内容：衣類補修、清拭布裁断

みなとの園 ボランティア

団 体 名：我楽路の会・下田市女性の会
活動内容：パンの日イベントサポート

団 体 名：ゆうすげの会
活動内容：リネン交換

団 体 名：つどいの和
活動内容：利用者との会話

氏　　名：山田明美
活動内容：スポーツの日 健康体操教室

太陽の里 ボランティア

団 体 名：ひばりクラブ
活動内容：歌、イベントサポート

団 体 名：西伊豆町ラフターズクラブ
活動内容：笑いヨガ、イベントサポート

団 体 名：西伊豆中学校サマーボランティア
活動内容：レクリエーション、ドライヤーかけ、体操など

団 体 名：仁科更生保護女性会
活動内容：衣類補修、清拭布裁断、イベントサポート

団 体 名：海堂流
活動内容：舞踊

団 体 名：しおさい
活動内容：コーラス

みくらの里 ボランティア

氏　　名：鈴木智英子
活動内容：書初めイベント

団 体 名：南伊豆歌謡サークル
活動内容：歌謡イベント

エクレシア南伊豆 ボランティア

団 体 名：ラパン
活動内容：カフェイベントサポート

ボランティア団体様より　30周年に寄せて

喜ばれることを笑顔で

仁科更生保護女性会　西島洋子

10数年前のこと、会員のお母さんが「太陽の里」に入所し、とてもお世話になっているという関わりの中で、ボランティア活動が始まりました。仁科女性会は、地域から集められたタオル、Tシャツ、浴衣などを使い、入居者の清拭布作りをしております。1ヶ月に2回の活動ですが、作りながら「このタオルで体を拭いてもらったら気持ちいいだろうねぇ」と喜ぶ表情を想像し、自然と手が進みます。野菜作りのこと、老後の話、悩み相談など、90分のボランティア活動はとても楽しく、会員の交流の場にもなっており、尊いひとときです。帰り際の「ありがとう」の言葉は、人を前向きにさせてくれます。人の喜ぶことを笑顔で行うという更生保護の心で、これからも頑張っていきます。地域にとって無くてはならない「太陽の里」。
梓友会30周年おめでとうございます。

カフェボランティアを通じて

ラパン

ここで出会えたご利用者の皆様との関わりが、いつの間にか私たちボランティアの心に小さな火を灯し、あたたかい気持ちで満たしてくださるようになりました。素敵な笑顔を返してくださることが、いつも私たちに活力を与えてくださいます。「今日のお菓子はおいしいね」と微笑みケーキを口いっぱいに頬張る方、「昔はいろいろな国でコーヒーを飲んだんだよ」と懐かしむように大切な人生の一部に触れさせてくださる方、ボランティアで施設を訪れるたびに新たな出会いがあり、それら一つひとつが私たちの心を豊かにしてくださいます。これからも微力ながら皆さまと交流を深め、カフェイベントのお手伝いさせていただければと思います。梓友会法人30周年、誠におめでとうございます。

梓友会

30年の軌跡

梓友会創立から30年、
地域の皆さまの支えがあり
今の「梓友会」があります。
これまでの軌跡を振り返ってみましょう。

誕生前夜

～1988

30年前、梓友会が誕生する前にも、地域の方々の様々なドラマがありました。

急速な高齢化

梓友会が創立された頃は、急速な高齢化に伴う後期高齢者の増加、核家族化と介護力の低下など、諸問題に対する長期的な展望が切望されるなか、厚生労働省内では長寿社会対策本部が設けられ、また在宅福祉三本柱整備目標が明示されるなど、静岡県のみならず全国の自治体が大きな変化の時代に突入しようとしていました。

そのような社会情勢でしたが、賀茂地域の1市6町村（下田市、河津町、西伊豆町、東伊豆町、松崎町、南伊豆町、賀茂村）には公的補助により高齢者が入所できる施設はなく、それぞれの家庭で生活していました。様々な事情がある中、施設での介護を希望した場合は伊東、沼津、静岡等へ入所しなければなりませんでした。

地元の有志と二人のキーパーソン

地域住民の間から、自然発生的に「地元に介護施設を」という声がおこりました。その声に応えたのが、永田雅夫（元伊豆下田病院病院長）と石井基氏（元下田市長）を始めとする下田市の有志のメンバーでした。ここから特別養護老人ホームの建設計画が始まりました。

梓友会創設者となる永田雅夫は熊本出身で、九州帝国大学（現九州大学）医学部を1950年（昭和25年）に卒業後、熊本県内の公立病院勤務を経て1977年（昭和52年）、医療法人社団祥和会伊豆下田病院理事長・病院長に就任以来、地域医療の中心的役割を担っていました。

石井基氏は地元の名士であり、地元住民からも絶大な社会的信頼を有していたので、この計画の推進には欠かせない存在でした。

有志らは、特別養護老人ホームの建設には、寄付行為によって最低3,000㎡（約1,000坪）の土地が必要であるとの結論に達し、土地探しをはじめました。忙しいスケジュールの合間を縫って、多くの土地を見て回りましたが、どの土地も車がかろうじて通れるほどの道しかなく、方向転換に苦労したり、逆に道の広いところは集落から離れすぎていて水の便が悪かったりと、なかなか条件に合う土地を見つけることはかないませんでした。

そんな折、石井基氏の義兄に当たる村山恭之助氏より、市内加増野の土地を寄付するとの申し出を受けることができました。

行政からの条件

必要な土地を確保したスタッフは、建設準備室を設置する代わりに、有志の一人である石井重信氏（元伊豆下田病院事務長）の住宅の一室を借り受け、そこを拠点に活動を開始しました。順調なスタートかと思われましたが、行政と接触して間もなく、大きな条件を提示されることになります。

特別養護老人ホームの開設には最低50床、すなわち50名の入所希望者がいることが当時の行政からの必須条件とされており、それをクリアすることが疑問視されていたのです。そこで民生事務所と市町村に潜在人数を問い合わせしたところ、30名程度と知らされました。さらに「50名以上の入所が予想されなければ、補助金の交付申請をしても受理されないでしょう」と言われ、厚い壁に行く手を阻まれる形となりました。

しかし、地域社会の福祉推進のためにと決めた計画を放棄する気は、毛頭ありませんでした。「決して好ましいことではないけれど、核家族化と少子高齢化の進行ぶりを見れば、2～3年中に入所希望者は50名に達する」と予測し、下田市および賀茂郡内の町村当局に陳情して、その支援を仰ぎつつ諸申請（法人設立許可・補助金交付・公的借入金の申込み・建築設計書等）の事務処理を始めました。

法人名の決定

無事に法人創立の目処が立ち、法人名の協議となりました。その結果、この地方に多く自生し馴染みの深い『梓』にちなんで、法人名を「梓友会」と定めました。梓は、昔から歌などに詠まれた落葉高木で、弓や版木をつくるのに用いられてきました。『万葉集』の第十巻春の相聞1930番には、作者不詳の次の詩が収録されています。

梓弓　引津辺にある　莫告藻の
花咲くまでに　逢はぬ君かも

（引津の辺の「なのりそ」さえも花を咲かすまで、ずっと長い間、逢ってくださらないあなたですね）

また、法人名にある『梓』には、将来的には弓のようにしなやかで強い法人に育ってほしいという願いも込めました。

そして1988年（昭和63年）10月4日、永田雅夫を創立代表者とした、社会福祉法人設立認可申請書を静岡県知事に提出し、同月24日に認可されたのです。

在宅福祉三本柱とは

居宅介護等事業（ホームヘルプサービス）、デイサービス事業、短期入所事業（ショートステイ）の在宅福祉の中心事業のこと。

下田市の人口

1988年30,432人から2018年には21,937人と減少傾向にあり、総人口のうち33.1%が65歳以上の高齢者となっている。

万葉集

7世紀後半から8世紀後半にかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集。さまざまな身分の人間が詠んだ歌を4500首以上も集めたもの。

新聞　平成元年6月29日（木曜日）（2）

お年寄りの〝憩いの園〟

下田市加増野

特養ホーム「梓の里」

市町村長や福祉関係者 きのう完成を祝う

下田版

下田支社
下田市東本郷2-1-14
郵便番号415
電話05582(2)2555
FAX05582(2)2556

完成した特養老人ホーム「梓の里」

下田市加増野に建設されていた賀茂地区初めての特別養護老人ホーム「梓の里」が完成、二十八日、賀茂七市町村長や福祉関係者ら百二十人が出席して落成式が行われた。オープンは七月一日。定員五十人に対し、約三十人の入所が決まっている。この完全看護の施設で、賀茂地区の六十五歳以上の寝たきりや老人性痴ほうなどの人が老後の新しい人生をスタートさせる。

梓の里は、伊豆下田病院の永田雅夫委員長や石井基元市長が中心となって設立した社会福祉法人「梓友会」（永田雅夫理事長）の経営。敷地面積三千三百平方㍍。施設は鉄筋コンクリート二階建て、延べ千九百平方㍍。四人部屋十二室、一人部屋二室、ショートステイ用の四人部屋一室ほか、寝たまま入れる特殊浴室や機能訓練室など諸設備が備えられている。職員は専属の医師を含め、入所者二人に対して一人の二十五人。国・県補助、賀茂七市町村の後援を受け、総事業費約四億一千四百万円で建設した。

落成式では、完成を祝って施設関係者や賀茂七市町一村長らが玉串を奉てん。このあと会場を下田セントラルホテルに移して行われた祝賀パーティーの席上、永田理事長は「県や賀茂七市町村、福祉関係者のご理解とご協力によって、計画より一年半も早く完成できた。地域の期待にこたえ、今後の老齢化社会に少しでも役立つことができればという気持ちでいっぱい」とあいさつ。賀茂民生事務所の山田達男所長が「これで、伊豆つくし学園、賀茂老人ホーム、さしだ希望の里に続いて賀茂地区に必要最小限の施設がやっと揃ったことになる。お年寄りの安らぎの場として、明るく楽しい施設になるよう職員には精いっぱい努力してもらい、我々行政としてもできる限りの協力をしていきたい」と述べた。続いて、下田市の池谷淳市長、賀茂郡町村会長の菊池利郎南伊豆町長も祝辞を披露した。

高齢化社会のなか、定員に満たぬ状態でのオープンについて、福祉事務所では「県東部の他の特別養護老人ホームに入っているお年寄りなど、入所希望者は多いが、職員が慣れていないので、スタート時点では三十人ぐらいがベストと思う。九月か十月には満員になる見込み」としている。

伊豆新聞　1989年（平成元年）6月29日掲載

本文より　下田市加増野に建設されていた賀茂地区初めての特別養護老人ホーム「梓の里」が完成、28日、賀茂7市町村長や福祉関係者ら120人が出席して落成式が行われた。オープンは7月1日。定員50人に対し、約30人の入所が決まっている。この完全看護の施設で、賀茂地区の65歳以上の寝たきりや老人性痴ほうなどの人が老後の新しい人生をスタートさせる。

創生期

1989 ～ 1998

法人創立後、地域に根付く礎となる「梓の里」がオープンします。

賀茂地区初の特別養護老人ホーム

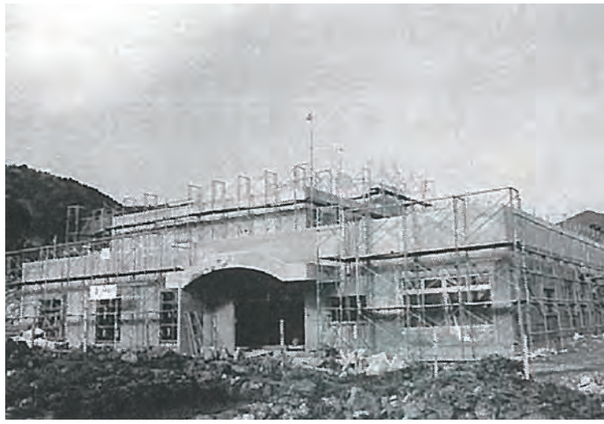
社会福祉法人梓友会が創立され、最初の施設である特別養護老人ホーム「梓の里」（下田市加増野181番地の1）の建設に着手しました。山間地での工事には多くの困難が伴いましたが、無事に竣工を向かえることができました。

「梓の里」の開設5ヶ月後の1989年（平成元年）12月、政府は将来の福祉政策を視野に「高齢者保健福祉推進十か年戦略（ゴールドプラン）」を策定し、いよいよ本格的な高齢化社会を迎えました。その後も核家族化と少子高齢化の進行に歯止めはかからず、「梓の里」への入所希望者は増え続けました。

親睦会の結成で職員の連携が強固に

「梓の里」が開設されたときの職員は25名でした。開設前、伊東市の特別養護老人ホーム「いこいの園」にて、一週間の実習に励んでいましたが、介護技術はまだまだ発展途上であったため、問題が起こる度に、その解決・打開策を話し合うことを繰り返しながら、手づくりのケアを積み上げてきました。

その過程で、自然発生的に「親睦会」を結成することが決まり、1989年（平成元年）11月7日、「親睦会会則」が定められました。月額1,500円の会費を積み立てるうちに、管理職も特別会員となり月



額2,500円の会費を出すようになりました。

こうして、親睦会は「梓友会職員の福利厚生の増進と親睦を図ること」を目的として、毎年歓送迎会やボウリング大会、忘年会などを開催するようになり、会員に慶弔金や病気・災害見舞金などを贈呈したり、時には法人との共同企画で職員研修旅行を実施するまでになります。

後に「梓の里」の増床（定員80名）で職員が増えることにより、親睦会は更に発展していくことになるのです。

「梓の里」増床

増え続ける入居希望者に対応するため、梓友会は、「梓の里」の上部を増築して、1995年（平成7年）11月1日、定員を50名（50床）から80名（80床）に、ショートステイ定員を4名から14名に、それぞれ増

高齢者保健福祉推進十か年戦略

通称ゴールドプランと呼ばれる、長期的に高齢者介護の基盤整備を進めようと、当時の大蔵省・厚生省・自治の3大臣の合意により発表されたもの。

床しました。

同年12月には下田市の事業委託を受けて、施設の南側庭に定員15名のデイサービスセンター「梓の里」B型を開設しました。それ以降も地域からの強い要請に応えて1998年（平成10年）3月、施設の隣接地に在宅介護支援センター「梓の里」を開設しました。

この在宅介護支援センターは、「高齢者保健福祉推進十か年戦略」に基づき各市町村の老人保健福祉計画で設置が義務づけられており、実施主体は市町村ですが、その運営は地方公共団体や社会福祉法人、医療法人に委託できることになっています。これにより、梓友会は下田市からの委託で運営することになりました。続いて同年10月、「梓の里」ホームヘルプサービス事業が開始されました。

なお、この年、政府が発表した統計によれば、65歳以上の在宅の「要介護老人」は100万4,000人（人口1,000対48.7）と初めて100万人を突破しました。そのうち「全くの寝たきり高齢者」と「ほとんど寝たきり」を合わせた「寝たきり高齢者」は31万6,000人（人口1,000対15.3）となりました。梓友会は1999年（平成11年）9月、2000年（平成12年）4月に施行される介護保険法に向けて、指定介護事業者の認定を受けると、居宅介護支援事業（ケアプラン作成）を開始しました。

その他多くの素敵な応募をいただきました

創立10周年とシンボルマーク作成

1998年（平成10年）7月6日（月）、特別養護老人ホーム「梓の里」の創立10周年記念式典・祝賀会を下田東急ホテルにて開催しました。

永田雅夫理事長（当時）の挨拶に続いて、小室豊允氏（姫路獨協大学経済学部長兼大学院研究科長）（当時）による講演「老人ホーム新時代」が行われました。

関係者らに感謝状を贈呈し、来賓の祝辞が相次ぎました。なお、創立10周年の節目に当たり、梓友会のシンボルマークを公募し席上、当選者の静岡市の杉山浩氏（養護学校教諭）（当時）に賞品が贈られました。

梓友会シンボルマーク

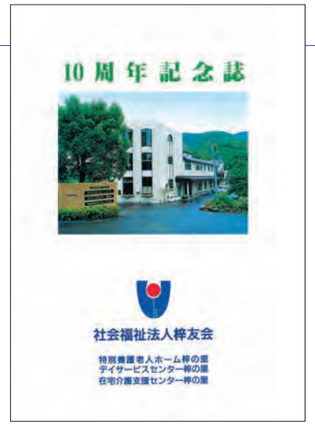
全体の形は伊豆半島、青い部分は「手」を表し、大切なものを優しく包んでいる様子とし、「福祉」を抽象的に表現しています。

ショートステイ
短期入所生活介護ともいわれ、要介護の高齢者が数日～1週間くらいの短期で施設に入所できるサービスのことです。

ホームヘルプサービス
訪問介護といわれ、介護を必要とされる方のご自宅に、ホームヘルパーが訪問して生活のお手伝いをするサービスのことです。

10周年記念誌

社会福祉法人梓友会の創立10周年を記念して、『10周年記念誌』を発刊しました。創立するまでの経緯と、創立後の歩みを記述した内容で、永田雅夫理事長（当時）は「10周年記念誌発刊にあたって」と題する一文を寄せています。



10周年記念誌発刊にあたって

月日が経つのは早いもので、梓友会が昭和63年に社会福祉法人の認可を得てから、今年で10周年になろうとしております。

これも偏えに関係官庁をはじめ、賀茂地区市町村等いろいろな方面のご理解ご支援の賜であったことを深く感謝いたしております。

私は医者として、九州から下田に来まして賀茂地区の地域医療並びに特別養護老人ホームの運営と、一貫して地域住民の皆様との人間関係、そして信頼関係を大切に病院人として如何にあるべきかを見つづけてきた思いがあります。「人々の痛みを本当に理解してあげること」を医療・福祉の両面からの実践を通して行い、職員にそうしたことの出来る人間形成の場の提供に邁進してまいりました。特別養護老人ホーム「梓の里」はご利用者に対して「安心と安らぎ」を与えるように、全職員が一生懸命努力した結果が、ある一定の社会的認知を促したのではないかと考えております。

施設運営関係では、平成7年にデイサービスセンター梓の里創設、平成10年に在宅介護支援センター梓の里創設と、絶えず地域の福祉ニーズに即した形で各要望に応えてきた感があります。これも、国・静岡県・関係市町村等行政機関はじめ、各種の団体、ご家族、地元加増野地区、職員、多くの方々の支えがあってこそ実現できたと考えております。

私共は来るべき少子高齢化社会に向けて、単に施設拡充整備のみではなく社会福祉情報の提供啓発活動にも力を傾注し、賀茂地区の高齢者福祉の向上に資するよう努力してまいりたいと存じます。最後に、この記念誌の発刊に際し、ご多忙にも拘わらず、ご寄稿をいただきました各諸先生に深く感謝申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成10年6月吉日

福祉の心や伊豆半島を模したシンボルマークがお披露目され、作製者の杉山さんが創作の意図を語った

創立10周年の記念式典であいさつする永田理事長＝下田市の下田東急ホテルで

発展期

1999 ～ 2008

梓友会は新たに3つの施設をオープンさせ、大きく発展していきます。

特別養護老人ホーム「みなとの園」開設

1999年（平成11年）12月20日、2番目の施設として、特別養護老人ホーム「みなとの園」を賀茂郡南伊豆町湊638番地の1に設立しました。介護保険制度開始の約3カ月前のことでした。

「みなとの園」は、ゴールドプランが色濃く反映されたものでした。当時、ゴールドプランの主旨は「高齢者の保健福祉の分野における公共サービスの基盤整備を進めることとし、在宅福祉、施設福祉等の事業について、今世紀中に実現を図るべき10ヵ年の目標を掲げ、これらの事業の強力な推進を図る事とする」というものでした。その目標を達成すべく、2000年（平成12年）4月の介護保険施行に向けて、多くの地域で介護インフラの整備が急ピッチで進められました。

予想以上のスピードで進む高齢化に対応するため、ゴールドプラン策定の5年後には計画の見直しが行われ、各種サービスの新たな整備目標として、「新・高齢者保健福祉推進十ヵ年戦略」（新ゴールドプラン）が1994年（平成6年）に発表されました。この修正計画によって、ホームヘルパーの必要数が10万人から17万人に、特別養護老人ホームの整備目標が24万床から29万床に引き上げられました。

また、旧厚生省はこの戦略を推進するため、1990年（平成2年）6月に「老人福祉法等の一部を改正する法律」を国会で成立させ、1993年（平成5年）4月に施行しました。この法律の改正により、ゴールドプランの実施主体は市町村と定められ、都道府県が広域的な観点から市町村の取組みをバックアップする体制が整いました。

各市町村は、高齢者の需要を把握するとともに新規調査や既存のデータに基づき、要介護老人数の将来推計や各種サービスに対する需要の把握を行いました。これらのデータに基づいて、ホームヘルパーを何人確保するか、あるいは特別養護老人ホームの入所定員を何人分確保するかといった事業量の目標が定まりました。

当然、1市6町村を広域とする賀茂圏域においても保健・福祉サービス計画が立案され、賀茂地区の施設整備が進展することになりました。

このような背景により、南伊豆町と松崎町から同時に梓友会に対して施設整備のオファーが来ることになりました。

しかし、当時の梓友会の資金力では同時に2箇所の施設整備は難しく、結果的には当時の下田市長であった池谷氏のご尽力などにより南伊豆町が選択されました。

その結果、国立湊病院の遊休地3,400㎡が南伊豆町に払い下げられ、その土地が梓友会に無償貸与され、静岡県単独の補助金と南伊豆町単独の補助金を受け、南伊豆町に「みなとの園」が実現化しました。

新ゴールドプラン

1994年に全面的に改定され、ホームヘルパー17万人確保、訪問看護ステーション5000箇所設置などを掲げた。

介護保険制度

2000年（平成12年）4月1日、介護保険制度が施行されました。この制度の目的は、寝たきりや認知障害（認知症）に苦しむ高齢者の介護を家族だけでなく、社会全体で担うことであり、各市町村が事業主体となります。この制度の施行に備えて、梓友会は準備と研修を進めてきたので戸惑うことはありませんでした。

デイサービスセンター「太陽の里」

2001年（平成13年）4月16日、梓友会は西伊豆町福祉センター内にデイサービスセンター「太陽の里」を開設しました。この日、同センターに「西伊豆町生きがいデイサービスセンター」を開設した西伊豆町から、その運営を委託されました。当時、2事業の定員は60歳以上の15名で、介護保険対象者の場合、1日700円で昼食や入浴、生活指導、リハビリを兼ねたレクリエーションなどを行っていました。また、同時に開始された配食サービスは65歳以上の1人暮らしと高齢者世帯などが対象で、料金は1食300円です。

デイサービスと配食サービスは西伊豆町福祉センター内の一角を借りて始めることになったため、「太陽の里」開設に先んじて、開始されています。

開始に際しての目玉として、デイサービスと配食の厨房職員としてプロの板前を雇ったことで、地域のご利用者に好評を博することができ、良いスタートが切ることができました。

特別養護老人ホーム「太陽の里」

2001年（平成13年）11月、西伊豆町仁科1134番地に3番目の高齢者施設・特別養護老人ホーム「太陽の里」を開設しました。

そのきっかけは、2000年（平成12年）の年始挨拶の際、西伊豆町長・窪田一郎氏（当時）から梓友会理事長・川島優幸への相談に端を発します。

その相談内容とは、「西伊豆町施設整備計画に盛り込まれた特別養護老人ホームの建設に対し、実績のある梓友会に施設を建ててほしい」というものでした。

補助金の削減は、厚生労働省の介護に関する方向性が初期投資のかからない在宅介護や小規模施設へシフトしたことが影響しており、西伊豆町からの土地の無償貸与があっても、「みなとの園」を創設したばかりの梓友会にとって、資金的には

大変厳しい条件でした。

しかし、施設整備の条件は今後さらに厳しくなることが予測されており、今引き受けなければ次はないという状況であったため、前向きに協議を続けました。その結果、将来的には50床まで増床することを視野に入れ、運営的には厳しいが、初期投資の少ない30床の施設を建てることで折り合いをつけ、「太陽の里」が創設されたのです。「太陽の里」は、その圏域では初の女性施設長が就任したことでも注目を集めました。また、自然の美しい地域に立地され、小規模ながらアットホームな雰囲気で入居者の受け入れが始まりました。

創立15周年記念シンポジウム

梓友会は2003年（平成15年）9月20日（土）、創立15周年記念事業の一環として、下田市白浜のホテル伊豆急にて、シンポジウムを開催しました。出席者は行政機関や福祉関係者ら330名に及びました。

厚生労働省老健局総務課長・山崎史郎氏は、「ユニットケアのあり方」と題する基調講演の中で、「特別養護老人ホームの施設は、病院の大部屋を参考に造られた。病院は治療を受け、1日でも早く退院することが目的だが、ホームは長期的な生活の場という違いがある。施設の介護は、ハードの点から大部屋をカーテンで仕切るなどして行ってきたが、ソフト面で職員は長い間、苦労してきた。個室と共有の空間を設けることによって、閉じ込められることなく、家庭にいるのと同じようなサービスを受けられる。日本の介護の仕事は、忙しさもあって機械的になりがちだが、1対1でふれあうことが必要である。ユニットケアは介護する人の性格や考え方が出てくるので、合わないケースもあり得る」と述べ、施設の拡大から本当のケアを、原点に戻りながら進めていく必要性を強調しました。

シンポジウムは、財団法人老齢健康科学研究財団理事長・対馬輝美氏（現 一般財団法人つしま医療福祉研究財団）をコーディネーターに、総務課長山崎氏、梓友会理事長・川島優幸、社会福祉法人新生会サンビレッジ新生苑理事長・石原美智子氏、静岡県健康福祉部介護サービス室長・岡本博夫氏、民間事業の質を高める研究会副代表世話人・対馬徳昭氏がパネリストとして参加し、活発な意見交換を行いました。

介護サービス室長岡本氏によれば、県内の特別養護老人ホームは134施設、ベッド数は9,235床、待機者が多いため、年間700 ～ 800床提供しても間に合わないのが実情で、ユニットケアの施設はコストが増えることから参入に慎重な意見もあるといいます。

当時3施設を運営していた梓友会にとって、地域社会の要請に応える責任の重要性を再認識するシンポジウムでした。

伊豆新聞　2003年（平成15年）9月22日掲載

平成15年（2003）9月22日（月曜日）　(2)

社会福祉法人

梓友会が創立15周年記念シンポ

老人ホームの大変革

ユニットケアのあり方など提言

厚労省課長らの話に330人

介護老人福祉施設「みくらの里」

2005年（平成17年）2月、下田市吉佐美1086番地に4番目の高齢者施設である介護老人福祉施設「みくらの里」を開設しました。

「みくらの里」は全個室・ユニットケアという新しいタイプの特別養護老人ホームであり、梓友会の既存3施設の従来型施設（多床室）とは、そのコンセプトにおいて大きな違いがあります。

ユニットケアとは、一人ひとりの個性を尊重するため、施設の居室（個室）を10人程度のグループに分け、それぞれを一つのユニット（生活単位）とし、このユニットごとに食事や入浴、施設内の行事などの日常生活を送り、少人数の家庭的な雰囲気の中で入居者と職員が生活を共にしながら個別にケア（介護）をすることです。

「みくらの里」が開設された時期と相まって、プライベートを重視する風潮が強くなり、その象徴的な出来事として「個人情報保護法」が2003年（平成15年）5月に成立し、2005年（平成17年）4月に施行されました。

このような流れの中で、厚生労働省の福祉施設に対する考え方も「個人の尊厳」や「プライバシー」を重視する方向に変わっていきました。その結果、「特別養護老人ホームはユニットケアを推進すべきであり、たとえ介護が必要になってもプライベートに配慮した個室に住まうべきである」という考え方が主流になり、この時期に整備された特別養護老人ホームの圧倒的多数が全個室・ユニットケアとなったのです。

法人本部の移転

「みくらの里」開設に合わせて、法人本部も「梓の里」から「みくらの里」に移転することになり、その移転登記を2005年（平成7年）3月22日に完了しました。

個人情報保護法

個人のプライバシー情報を守るための条例であり、個人情報を取り扱う機関は全て、その情報を外部へ漏洩してはならないという法律。2003年成立。

成熟期

2009 ～ 2018

地域福祉の更なる発展と、未来への礎として、大きなチャレンジを開始します。

EPA介護福祉士候補者の受け入れ

2009年（平成21年）11月11日「介護の日」にフィリピン人介護福祉士候補生が入職しました。少子高齢化が進む日本が、将来の新たな労働力として期待する経済連携協定（EPA）に基づく受入であり、４年間の特定活動ビザが与えられます。この期間内にみくらの里で働きながら日本語を学び、介護福祉士の資格取得を目指していました。

明るく勤勉な性格で働きながら国家試験の勉強に努めており、施設関係者も資格取得に向け全面的に支援させていただきました。そして2012年度、介護福祉士国家試験に合格されました。EPA候補者の受験者数は、その年、静岡県内で15名。内、合計合格者数は5名。梓友会にとってこの結果が、新たな外国人労働者との未来に向けた大きな一歩となりました。

伊豆新聞　2010年（平成22年）6月13日掲載

梓の里が20周年 みなとの園10周年

下田・梓友会

稲生沢中生徒会など表彰

記念式典と講演会

梓の里開設20周年･みなとの園開設10周年合同記念式典、記念講演会

2010年（平成22年）6月12日（土）、ホテル伊豆急にて特別養護老人ホーム梓の里開設20周年･特別養護老人ホームみなとの園開設10周年合同記念式典、記念講演会を開催いたしました。

第一部の式典では、川島優幸理事長の挨拶に続き、各ボランティア団体、協力医療機関へ感謝状の贈呈。第二部は、スポーツジャーナリストの佐藤安弘氏による講演「把手共行　騎虎の勢い。攻めに攻めよ！梓友会」をテーマに、スポーツから社会問題、世界情勢を鋭い視点から簡潔に解説し、地域、ボランティア団体、福祉関係者を始め200名の方にご出席いただきました。

経済連携協定

関税の撤廃や貿易の自由化などを定めた自由貿易協定（FTA）をもとに、投資、看護師など人の移動の自由化、知的財産の保護や経済協力のあり方など広い分野での地域間協力に関する協定。EPA（economic partnership agreement）。

把手共行

「無門関」に登場する無門禅師のことばの一節。文脈では、悟りを開けば誰でもお釈迦さまとおなじレベルで同志として共に手をとって歩むことができるという意味。

太陽の里開設10周年記念講演

2011年（平成23年）6月11日（土）、下田東急ホテルにて特別養護老人ホーム太陽の里開設10周年記念式典、記念講演会を開催いたしました。

記念講演会では時事通信社静岡総局長（当時）の加藤清隆氏は、講演「「平成宰相論」～総理大臣の「資格」とは何か～」をテーマに、①洞察力②大局観③歴史観と国家観④長期ビジョンの４つの観点から求められる総理大臣の資格・資質について説かれました。

伊豆新聞下田　2011年（平成23年）6月12日掲載

特養ホーム太陽の里

「地域に支えられ10周年」

時事通信解説委員長講演

首相の資格語る

太陽の里ショートステイ増床竣工式

2012年（平成24年）5月、特別養護老人ホーム太陽の里が個室５部屋と談話室１室を増築し、同月22日には竣工式を執り行いました。

2001年（平成13年）の開設から早いもので11年。ショートステイの利用希望者数が増加し、そのニーズに応えようと増床に向け、町と協議を進めてきました。1階の10部屋をショートステイに利用し、定員は5名から10名に増やし、社会では着実に高齢化が進む中で、在宅分野の地域福祉基礎強化となりました。

社会福祉法人梓友会 創立25周年記念講演開催

2013年（平成25年）5月25日（土）、法人創立25周年の節目に際し、少子高齢化社会における社会福祉法人の役割について、地域の方々と一緒に考える機会を設けるべく、25周年記念講演会を下田東急ホテルにて開催しました。行政、福祉関係者らおよそ200名が参加し、来賓の勝俣孝明衆議院議員、森竹治郎静岡県議会議員、下田市の楠

山俊介市長（当時）があいさつに立ち、25周年の祝辞を頂戴いたしました。その後、上智大学人間総合科学部准教授の藤井賢一郎氏による、「今後の社会福祉法人のあり方と課題」をテーマに、講演を行い、少子高齢社会における社会福祉法人の役割、そして在り方について講義いただきました。

小規模多機能型居宅介護みくらの里

2014年（平成26年）3月22日（土）小規模多機能型居宅介護みくらの里竣工式が執り行われました。来賓には、森竹治郎静岡県議会議員、楠山俊介下田市長（当時）、静岡県賀茂健康福祉センター福島和幸所長（当時）他、静岡県、下田市、地元関係業者など56名にご出席いただき、賀茂圏域初めての小規模多機能型居宅介護施設の完成を祝しました。事業開始は、2014年（平成26年）4月1日からとなり、敷地面積1990平方㍍、木造平屋で建築面積507平方㍍、居室は5部屋あり、食堂、浴室なども備えています。

認知症啓発講演会

2014年（平成26年）3月、介護老人福祉施設みくらの里にて、市町村認知症推進事業の一環として、下田市から委託され、認知症啓発講演会を開催いたしました。

新潟市の櫻クリニック院長鈴木康弘氏による「認知症の理解と対策～疾患についての知識と周囲を取り巻く環境」と題し、認知症の定義、原因、症状、認知失調のサイン、診断症状などについてをわかりやすく解説いただきました。介護や、医療関係者、在宅介護者の家族ら120名が参加され、有意義な時間を過ごされました。

小規模多機能型居宅介護

介護が必要となった高齢者が住み慣れた家、地域で生活を継続できるように「通い」を中心に「泊まり」「訪問」の三つのサービスを組み合わせて提供する在宅介護サービス。どのサービスを受けても顔なじみの職員によるケアを受けられることも特徴の一つ。

日本検査キューエイ株式会社様より10年表彰授与

日本検査キューエイ株式会社様より『マネジメントシステム継続記念』の盾を頂きました。

梓友会がISO9001を取得してから10年が経過したことに気付かされ、改めて法人の組織運営を思い返し、ようやくISOの仕組みが法人に定着したということを実感いたしました。

ご利用者、そしてご家族との信頼関係を築き、快適で安心できる生活をお過ごしいただけるよう、組織マネジメントシステムの維持・向上に努めるという決意を新たにしました。

梓の里　天皇陛下より御下賜金拝受

2014年（平成26年）12月24日、天皇陛下より特別養護老人ホーム梓の里へ御下賜金を賜りました。

御下賜金は、優良な民間社会福祉団体・施設に贈られるものであり、梓の里開設より25年に渡る高齢者福祉向上への貢献が認められました。職員に法人の理念が浸透し、その対応や施設の雰囲気も良く良質な介護サービスを提供していると評価されました。伝達式は静岡県庁にて執り行われ、宮内庁長官からの伝達書が川勝平太県知事より川島理事長に手渡されました。今後も地域福祉と介護充実に向け邁進し、安心・安全の施設運営に努めるため、法人職員一同心を一つにできた素晴らしい機会となりました。

平成26年12月24日 御下賜金伝達式について

この度、天皇陛下より社会福祉法人梓友会 梓の里に対して御下賜金を賜りました。これは、天皇陛下より12月23日の天皇誕生日に際して、優良な民間社会福祉団体や施設に対して金一封を下賜されるものです。

伝達式は、12月24日に静岡県庁にて行われ、宮内庁長官からの伝達書が川勝平太知事より川島理事長に手渡されました。

当法人 梓友会は、昭和63年に伊豆（賀茂圏域）に初めて特別養護老人ホーム50床を運営するため静岡県から認可を受けました。それ以後、賀茂圏域において様々な高齢者事業を推進し各種の地域課題に対応してまいりました。また、諸先輩の皆様のご支援により安定的な運営を続けてくることができました。そのような中、静岡県内施設として御下賜金を拝受することとなりました。

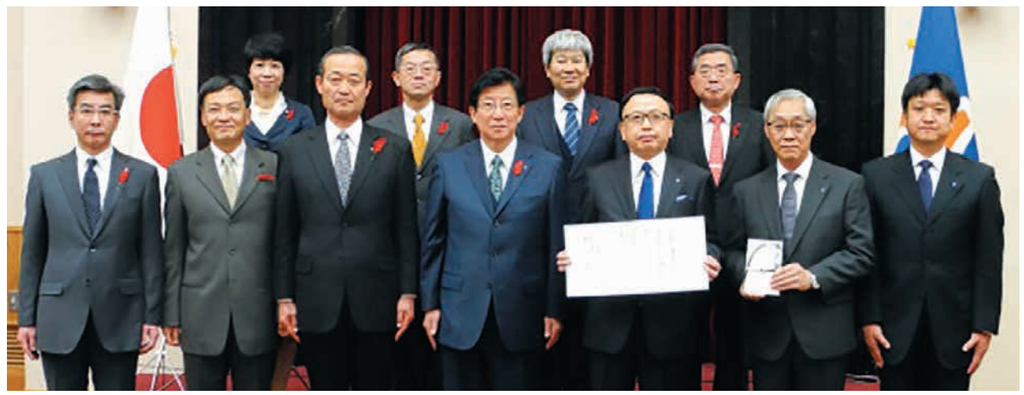
川勝知事から、天皇陛下から賜ります金員を下賜されました時は、素晴らしい名誉に恐縮すると同時に身の引き締まる思いでありました。

過去の県内の社会事業史を見てみますと社会福祉の先達として昭和14年に聖隷保養農園が御下賜金により幾多の経営危機を乗り越えた歴史がございます。全国的には、石井十次氏の岡山孤児院、済生会病院など素晴らしい先達の社会事業家の方々が拝受されております。

これからも地域の福祉と介護充実のために社会福祉を必要とする方、全ての幸せを願い法人・施設の役職員一同、こころを一つに地域貢献と公共性を推進し、安心と安全の施設運営に努力したいと思います。

今後とも地域の皆様の期待に応えられますように精進してまいりたいと考えますので、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

社会福祉法人梓友会　理事長 川島優幸



みくらの里開設10周年記念講演会

2015年（平成27年）10月31日（土）、下田東急ホテルにて介護老人福祉施設みくらの里開設10周年記念講演会を開催いたしました。

記念講演会ではスポーツジャーナリストの佐藤安弘氏による講演「人生ＮＯＷ今だ！」をテーマとし、ユーモラスに人生やプロ野球について語られ、訪れた利用者の家族、地域住民、福祉関係者らおよそ100名は、活気と笑いに包まれました。

「移動知事室」開催

2015年（平成27年）6月11日～12日に移動知事室が開かれました。実施テーマは県が重点的に取り組む「健康寿命日本一の延伸」「新成長産業の育成と雇用創造」「人口減社会への挑戦」「多彩な人材を生む学びの場づくり」です。

12日には川勝平太知事による知事公聴「平太さんと語ろう」が南伊豆役場湯けむりホールで開かれ、同日介護老人福祉施設みくらの里においても意見交換会が行われました。川勝平太静岡県知事は意見交換後施設内をご見学され、ご利用者様と共に歓談されました。

企業主導型保育事業「みくら保育園」

乳幼児を抱えた職員を支援する為、2017年（平成29年）4月に「みくら保育園」を開設しました。定員は19名で現在では地域枠も開放しています。0～6歳の未就学児が対象で時間は午前7時～午後8時、年中無休です。保育士は皆、経験豊かであり、細やかで目の行き届いた保育を受ける事ができます。特色は①積極的な園外保育②異年齢交流や法人施設ご利用者との多世代交流③一人一人に応じた保育計画です。

小さな保育園だからこそできる個々に寄り添う保育は、小さな子供を持つ子育て世代の強い支えになっています。

介護老人福祉施設「エクレシア南伊豆」

2018年（平成30年）3月、南伊豆町加納792番地に全国初の自治体間連携による介護老人福祉施設「エクレシア南伊豆」が開設されました。ユニット型個室100床を有し「人に優しく、経済的に優れた建物」をコンセプトに耐火木造3階建ての施設となり、熱伝導率が低い木材を使用し高断熱・高気密な構造の為、省エネ性が高く、CO_2排出量を削減できる点が大きな特徴です。広々とした中庭には河津桜が植えられ、春には花見が楽しめます。同施設は、静岡県・南伊豆町・杉並区の三者連携による自治体の枠を超えた特養整備事業となり、全国初の試みになります。杉並区の特養を南伊豆町にて開設することは、都市部と地方が互いにその地域の強みや魅力を活かし合い、それぞれの高齢者問題の解決を図る画期的な試みと言えます。

社会福祉法人梓友会30周年記念事業「日台福祉人材交流研修」

社会福祉法人梓友会は、法人30周年記念事業として、2018年（平成30年）9月4日～2018年（平成30年）9月10日の間、日台福祉人材交流研修を実施しました。

台湾より高雄医学大学生1名・真愛社會福利慈善事業基金會ホームヘルパー1名・奇美医療センター看護師1名の計3名の研修生を招待し、当法人施設の見学や梓友会連携医療機関「伊豆今井浜病院」の見学、福祉に関する講義を通して日本の介護について知識を深めていただき、当法人職員もこの交流を通して、台湾の福祉・介護の現状等を見聞きする事ができ、将来的には、台湾と日本の福祉活動を結ぶ一つの架け橋となりたいと考えております。

年表

社会福祉法人梓友会創設から30年。
始まりは静岡県下田市加増野に開設した「特別養護老人ホーム梓の里」、賀茂地区初の特別養護老人ホームです。介護や時事の流れとともに梓友会の歴史を振り返ります。

年	梓友会	介護	時事
1987年（昭和62年）		社会福祉士及び介護福祉士法制定	国鉄が分割・民営化される
1988年（昭和63年）	10月　社会福祉法人の認可を得る 11月　特別養護老人ホーム梓の里創設工事着工（下田市）	高齢者保健福祉推進十か年戦略（ゴールドプラン）策定	青森県と北海道を結ぶ青函トンネルが開業
1989年（平成元年）	7月　特別養護老人ホーム梓の里開設（定員50名） 老人短期入所（ショートステイ）事業を開始（定員4名）		「昭和」が終わり、「平成」が始まる ベルリンの壁崩壊、東西冷戦終結 消費税が導入（3%）
1990年（平成2年）		老人福祉法など福祉八法の改正	東西ドイツが統一される 長崎県の雲仙普賢岳が噴火
1991年（平成3年）			湾岸戦争勃発 ソビエト連邦が崩壊
1992年（平成4年）			ブラジルにて地球サミット（環境と開発に関する国際連合会議）が開催される
1993年（平成5年）		都道府県・市町村の「老人保健福祉計画」策定	記録的な冷夏により米騒動が起こる
1994年（平成6年）	11月　特別養護老人ホーム梓の里増築工事及びデイサービスセンター梓の里創設工事着工	新ゴールドプラン策定 21世紀福祉ビジョンの策定 公的介護保険の議論が本格化	シューメーカー・レヴィ第9彗星が木星に衝突 北海道東方沖地震発生
1995年（平成7年）	11月　特別養護老人ホーム梓の里増築（定員80名） 12月　デイサービスセンター梓の里（B型・1日15名）開設 老人短期入所事業（定員14名）増築	24時間対応巡回型ヘルパー制度創設	阪神・淡路大震災発生 オウム真理教による地下鉄サリン事件発生 マイクロソフトよりWindows 95が発売
1996年（平成8年）		「高齢社会対策大綱」閣議決定	バンダイより携帯ゲーム機「たまごっち」が発売
1997年（平成9年）	10月　在宅介護支援センター梓の里創設工事着工	「介護保険法」公布（平成12年施行）	香港がイギリスから中国に返還される 北海道拓殖銀行破綻 山一證券破綻 消費税率が5%に引き上げ
1998年（平成10年）	3月　在宅介護支援センター梓の里開設 7月　梓友会創設10周年記念式典・記念講演（小室豊允氏）開催 10月　ホームヘルプサービス梓の里を開始		長野オリンピック・パラリンピック開幕
1999年（平成11年）	1月　ホームヘルパー養成講座（2級課程）を開講 特別養護老人ホームみなとの園創設工事着工（南伊豆町） 10月　初代理事長永田雅夫氏が県知事表彰を受賞 12月　特別養護老人ホームみなとの園を開設（定員50名） 老人短期入所（ショートステイ）事業を開始（定員20名）	10月　介護保険に向けて介護認定審査など開始	NTTドコモよりiモードサービスが開始 ソニーより子犬型ペットロボット「AIBO」が発売
2000年（平成12年）	1月　デイサービスセンターみなとの園B型を創設（定員15名） 在宅介護支援センターみなとの園を開設 ホームヘルプサービスみなとの園を開始 ホームヘルパー養成講座（1級課程・県知事指定）を開講 2月　みなとの園居宅介護支援事業を開始（県知事指定） 7月　みなとの園緑化事業（グリーンバンク）による植栽完了 9月　みなとの園配食事業を開始（南伊豆町委託）	4月　介護保険法施行 5月　社会福祉事業法改正公布施行（社会福祉法）	2000年問題の発生 ソニー・コンピュータエンタテインメントより「PlayStation2」が発売 三宅島が噴火し、三宅島漁業関係者が下田市に避難 20世紀終了
2001年（平成13年）	1月　特別養護老人ホーム太陽の里創設工事着工（西伊豆町） 4月　デイサービスセンター太陽の里（西伊豆町福祉センター内）を開設（定員15名） 生きがいデイサービス事業・配食サービス事業を西伊豆町より受託 11月　特別養護老人ホーム太陽の里を開設（定員30名） 12月　老人短期入所（ショートステイ）事業を開始（定員5名）	老人保健法改正～定率1割負担制導入 高齢者の住居の安定確保に関する法律成立 高齢者対策大綱改正 10月　省庁再編により厚生省と労働省が厚生労働省となる。	21世紀開始 ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが大阪に開園 大阪で附属池田小事件が発生し多くの児童が犠牲になる アメリカ同時多発テロ発生 アメリカ軍によるアフガニスタン侵攻開始 アップルよりiPodが発売
2002年（平成14年）	6月　みなとの園外出支援サービス事業を開始（南伊豆町委託） 7月　UIゼンセン同盟梓友会ユニオンの結成大会が開催		ユーロ圏にて通貨ユーロの流通が開始 2002 FIFAワールドカップが日韓共同開催
2003年（平成15年）	9月　梓友会創設15周年記念講演（山崎史郎氏）及び記念シンポジウム開催		六本木ヒルズが開業 小惑星探査機「はやぶさ」打ち上げ
2004年（平成16年）	1月　特別養護老人ホームみくらの里創設工事着工（下田市） 3月　ISO9001を全施設全事業で取得 法人本部を加増野（梓の里）から吉佐美（みくらの里）に移転		新潟県中越地震が発生 鳥インフルエンザが流行
2005年（平成17年）	1月　拡大審査にて、みくらの里がISO9001を取得 2月　特別養護老人ホームみくらの里を開設（定員80名） 老人短期入所（ショートステイ）事業を開始（定員20名） デイサービスセンターみくらの里を開設（定員20名） 在宅介護支援センターみくらの里を開設 みくらの里緑化事業（グリーンバンク）による植栽完了	6月　介護保険法改正（予防事業重視と地域包括支援センター、ケアマネージャーへの支援など） 11月　介護給付費の一律一割の利用者負担を導入 高齢者虐待防止・介護者支援法成立	日本国際博覧会（愛知万博）「愛・地球博」が開幕 兵庫県尼崎市の福知山線で脱線事故が発生 競馬のディープインパクトがクラシック三冠達成

梓友会30年の軌跡

年	梓友会	介護	時事
2006年 （平成18年）	3月　制度改正に伴い三施設の在宅介護支援センターを廃止 6月　みくらの里が静岡県による第三者評価を受審 みくらの里で学習療法を開始 9月　みなとの園が静岡県による第三者評価を受審 10月　第1回みくらの里祭りを開催	1月　介護報酬改正案提示 4月　改正介護保険法施行 高齢者虐待防止・ 介護者支援法施行	第1回 ワールド・ベースボール・クラシックが開幕し、日本が優勝 伊豆半島東方沖地震が発生 伊豆半島にある自治体を対象に、伊豆ナンバーが導入 任天堂よりWiiが発売
2007年 （平成19年）	2月　全施設の介護サービス情報公表 3月　ISO9001更新審査を通過 （2010年3月まで有効） 11月　梓友会創設20周年記念講演 （中村秀一氏、田中滋氏）開催		アップルよりiPhoneが発売
2008年 （平成20年）	7月　職員必携作成		秋葉原通り魔事件発生 アメリカの大手投資銀行リーマン・ブラザーズが経営破綻 ノーベル賞3名受賞 物理学賞：小林誠・益川敏英 化学賞：下村脩
2009年 （平成21年）	2月　介護研修記念講演（永和良之助氏）開催 11月　EPA介護福祉士候補者の受け入れ 11月11日「介護の日」にフィリピン人 介護福祉士候補生が入職	5月　改正介護保険制度施行 介護サービス事業者の法令遵守等の業務管理体制の整備 休止・廃止の事前届出制など	インフルエンザが世界的に流行しパンデミック宣言される 政権交代　民主党が初の与党に 草食系男子が流行 ヤンキース松井秀喜がワールドシリーズMVP
2010年 （平成22年）	1月　下田・河津間駅伝競走大会へ『チーム梓友会』出場 3月　日本財団より寄附型自動販売機設置感謝状授与 6月　梓の里開設20周年・みなとの園開設10周年合同記念式典 記念講演会 開催 9月　濱田秀美様よりみくらの里へ絵画の寄贈 10月　南伊豆弓ヶ浜：アクアスロン大会 『チーム梓友会』2位入賞		日本年金機構が発足 高齢者所在不明問題が起こる バンクーバーオリンピック開催 東北新幹線八戸・新青森間開通
2011年 （平成23年）	4月　株式会社アサヒ緑健発行 『健やか倶楽部（日本一の老人ホームを訪ねて）』みくらの里記事掲載 5月　梓の里にて【東日本大地震災害義援金募金】募金箱設置 6月　太陽の里10周年記念講演会（加藤清隆氏）開催 伊豆下田病院との合同企画『親子遠足』開催	介護保険料・介護報酬が改定	東日本大震災が発生 福島第一原子力発電所事故が発生 アナログ放送終了 ＦＩＦＡ女子ワールドカップ優勝
2012年 （平成24年）	5月　太陽の里ショートステイ増床（定員10名） 7月　Twitter梓友会法人アカウント始動 10月　学校での出張福祉勉強会始動 12月　24時間テレビチャリティー委員会主催 福祉車両贈呈式開催 リフト付き車両：トヨタハイエース納車	4月　改正介護保険制度施行 地域包括ケアの推進	世界人口が70億人を突破 東京スカイツリーが開業 ロンドンオリンピック開催
2013年 （平成25年）	3月　稲生沢中学校より梓の里へ車椅子寄贈 認知症キッズサポーター養成講座開催 4月　みくらの里所属：EPA介護福祉士候補者2012年度介護福祉士国家試験合格 5月　梓友会25周年記念講演（藤井賢一郎氏）開催	訪問介護員養成研修が介護職員初任者研修へ移行	淡路島地震が発生 富士山が世界文化遺産に登録される 2020年オリンピックの開催地が東京に決定 和食が無形文化遺産に登録される
2014年 （平成26年）	3月　認知症啓発講演（鈴木康弘氏）開催 4月　小規模多機能型居宅介護みくらの里開設 日本検査キューエイ株式会社様より10年表彰授与 6月　「静岡県障害者就労応援団」登録 7月　静岡県主催第1回 『介護のおしごと体験バスツアー』 みくらの里にて開催 12月　梓の里 天皇陛下より御下賜金拝受	介護保険法改正（2015年施行）	消費税率が8%に引き上げ 御嶽山が噴火 ソフトバンクロボティクスよりPepperが発表 天野浩・赤崎勇・中村修二が青色LEDでノーベル物理学賞を受賞
2015年 （平成27年）	1月　日産プリンス静岡販売株式会社様よりみなとの園へ車椅子寄贈 4月　みくらの里開設10周年記念家族交流会開催 6月　みくらの里にて『移動知事室』開催 川勝平太県知事来訪 8月　杉並区・南伊豆町自治体間連携特養運営事業者に決定 10月　みくらの里開設10周年記念講演会（佐藤安弘氏）開催 12月　『介護男子スタディーズ』プロジェクト参加	予防給付（介護予防訪問介護・介護予防通所介護）の総合事業移行 特養の入居要件を要介護３以上とする	国産初のジェット旅客機MRJが初飛行 東京オリンピック・パラリンピックのエンブレム問題 マイナンバー（個人番号）の通知がはじまる 永良部島で噴火が発生
2016年 （平成28年）	1月　社会福祉法人梓友会、賀茂地区社会福祉協議会（1市5町）及び県社会福祉協議会との生活困窮者自立支援に係る連携・協働にかかる協定調印式開催 5月　梓の里家族交流会：綱川立彦夫妻コンサート開催 7月　みなとの園にて認知症カフェ『カフェみなと』開催 9月　みなとの園にて傾聴ボランティア入門講座開催		北海道新幹線が開通（新青森駅 - 新函館北斗駅間） 熊本地震 M6.5 最大震度7の地震 リオデジャネイロオリンピック －日本は金12個 銀8個 銅21個 アメリカ合衆国大統領選挙 ドナルド・トランプが当選 マイナンバー制度運用開始
2017年 （平成29年）	3月　稲生沢中学校より梓の里へ車椅子寄贈 4月　企業主導型保育事業みくら保育園開園 8月　梓友会ブログ始動 12月　梓友会クラウドファンディング企画成立 『伊豆の最南端にある老人ホームを人の集う拠点にしたい！』	介護保険法改正（2018年施行）	プレミアムフライデー開始 稀勢の里が横綱に昇進 桐生祥秀が100m走で日本初の9秒台（9.98秒）を達成 羽生善治が史上初の永世七冠
2018年 （平成30年）	3月　介護老人福祉施設エクレシア南伊豆開設（定員90名） 短期入所生活介護（ショートステイ）事業を開始（定員10名） 通所介護（デイサービス）事業を開始（定員20名） 4月　梓の里が30年度『安全運転管理推進事業所』に指定 9月　日台福祉人材交流研修実施 台湾人研修生3名来訪	自己負担限度額の増加（サービス利用料3割負担の導入） 福祉用具貸与価格の見直し 介護医療院の創設	アメリカと北朝鮮がシンガポールにて首脳会談を行った 西日本豪雨が発生 羽生善治（将棋）と井山裕太（囲碁）が国民栄誉賞を受賞する 北海道胆振東部地震が発生 冬季平昌オリンピック開催（韓国）

施設紹介

■特別養護老人ホーム梓の里
■特別養護老人ホームみなとの園
■特別養護老人ホーム太陽の里
■介護老人福祉施設みくらの里
■介護老人福祉施設エクレシア南伊豆
■小規模多機能型居宅介護みくらの里
■企業主導型保育事業みくら保育園

緑濃い閑静な安住の地

梓友会の原点

特別養護老人ホーム梓の里は、梓友会創設の翌年、1989年（平成元年）7月1日に開設された法人の原点ともいえる施設です。1995年（平成7年）にはデイサービス、1998年（平成10年）には在宅介護支援センターを創設しました。常に地域福祉のニーズを先導してきた当施設も、法人と共に歩み続け来年開設30周年を迎えます。施設所在地が増水被害を受けにくい立地であり、周辺住民の方々にとっても防災拠点となりえるため、下田市防災安全課防災係からの依頼を受け、2017年（平成29年）に施設の一部を災害備蓄品の備蓄場所として提供しております。今後も移ろい往く福祉的ニーズに応え、地域に根付いた施設であり続けられるよう邁進してまいります。

また、緑豊かで牧歌的雰囲気の中、四季の移ろいを感じ穏やかな生活をお送りいただける環境にあります。施設所在地の加増野から、下田の中心地を流れる稲生沢川（いのうざわがわ）には、アマゴやカワムツ、アユ釣りなどが人気を集めており、のどかな田園風景広がる里山と川のせせらぎは、入居者の心に安心と安らぎを与えてくれます。

■特別養護老人ホーム

ご利用者が健全でこころ安らかな生活、そして生きがいを持てるよう心がけたケアを提供する当施設は、1989年（平成元年）に入所定員50名からスタートしました。1995年（平成7年）7月に既存建物の上階を増築し定員を80名に増員。多床室と従来型個室を併せ持つ、法人の軌跡が濃く残る施設となっております。

『ご利用者の願いをかなえる』活動は、ご自宅訪問や買い物への同行等、明るく活力に満ちた長寿社会の実現を目指し、ご利用者の心に寄り添うサービスの提供や、その方の生きがいと尊厳を重視している点が、ご家族様からも高い評価を頂いております。

そのほか、施設を会場とした「梓の里納涼祭」はご利用者、ご家族、職員、地域住民とが交流を深める催しとして毎年開催され、夏の楽しいひと時をお過ごし頂いております。施設職員やボランティアによる劇や日本舞踊は一際盛り上がりをみせ、回を重ねるごとに地域でもイベントが浸透し、現在では「梓の里」の夏の風物詩となっております。

■ショートステイ

14名の定員で、主に下田市・松崎町の方にご利用いただいております。地域住民のご希望に沿えるよう、イベントの開催等サービスに工夫を凝らしています。また、利用者の残存機能を有効に活かせる作業提供等、その方に適した過ごし方のご提案をさせていただき、一人ひとりに寄り添うケアを実施しています。

■デイサービス

梓の里のデイサービスは利用定員30名。「利用したい方は必ず利用できるように最大限努めること」を志として掲げ、デイサービス職員一丸となって職務に努めています。

生活に必要な入浴や食事の提供の他、脳トレや日常生活動作の訓練等にも力を入れており、ご利用者の方に飽きがこないよう、その種類や内容を充実させています。

また、日本舞踊鑑賞、かるた大会、風車づくりなど豊富なイベントも魅力の一つであり、好評をいただいております。当デイサービスセンターを気に入り、長い期間通われる方も多くおり、そんなご利用者の「ここに来たい」というお気持ちが職員に大きな活力を与えてくださっています。

特別養護老人ホーム梓の里　概要

■所在地
〒413-0713　静岡県下田市加増野181-1
TEL 0558-28-1172
FAX 0558-28-1177

■事業内容
□介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
定員80名
□短期入所生活介護（ショートステイ）
定員14名
□通所介護（デイサービス）
定員30名

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・佐倉医院
・下田ヒフ科クリニック
・渡辺歯科医院

■開設日
1989年（平成元年）7月1日

■設計
有限会社秋澤設計事務所

■施工
株式会社 石井組

施設長の言葉 「梓友会30周年に寄せて」

当施設は、法人発足とともに、賀茂地区で最初の高齢者施設として、1989年（平成元年）に開設されました。まだ、高齢者介護という概念も緒につかなかった時代、開設時には、関係各方々の大変なご尽力があったことは想像に難くありません。爾来、介護保険制度の制定や超高齢化社会の到来など、環境の激変の中、当施設も30周年という大きな節目を迎えることができました。これも、時節を重ねても変わらぬ当地稲梓の瑞々しい田園風景と同じく、永きに渡り地域の皆様、関係者の方々よりご支援、ご協力を頂いた賜物と心より感謝申し上げる次第です。

設立以来の年数を重ね、設備については時代にそぐわない部分も出てきていますが、今後とも変わらず福祉施設としての使命を保ち、地域に頼られ、地域を支えるべく、時代の変化への感度を高め、そして次の世代へと襷が渡せるよう、職員一同、新たな心持にて精勤を心がけていく所存です。

施設長
鈴木　徹洋

梓の里スタッフ

梓の里の行事

4月	花見弁当
5月	スイーツバイキング
6月	映画鑑賞会
7月	七夕会
8月	加増野夏祭り
9月	敬老会
10月	かるた大会
11月	買い物ツアー
12月	クリスマス会
1月	初詣・おみくじ
2月	豆まき
3月	読み聞かせ

仲良くハイタッチ

ツツジ見学

ミニゲーム：ボーリング

フラワーアレンジメント

95歳のお祝い

Merry Christmas！

デイサービスご利用者様の作品

地域防災拠点機能の強化

梓の里の施設周辺は、土砂災害特別警戒地域が点在するものの、施設自体は増水被害を受けにくい立地にあり、周辺住民の方々にとっても防災拠点となりえることから、下田市防災安全課防災係からの依頼を受け、施設の一部を災害備蓄品の備蓄場所として提供することと致しました。2017年（平成29年）に2,000食の受入れを行い、防災訓練に参加頂いた加増野地区役員の方々に現物確認をして頂き、施設分の備蓄に加え、状況に応じて相互融通することも可能となりました。地域住民の生活の安全担保にも繋がるため、今後も施設の有効的な活用を継続していきます。

また、同年度に静岡ＤＣＡＴ1期生養成研修に職員を派遣、隊員登録を行い、ＤＣＡＴが推奨する災害時移送用具4点の保管拠点としての指定をうけ、貸与を頂きました。施設では、研修を受けた介護職員の指導のもと、他の職員にも浸透するよう訓練を行いました。

災害時を想定し、より多くの職員へ意識付けを行えるよう、防災へ力を入れていくと共に、今後は、地域の方々へも周知・啓発していけるよう取組みを続けていきます。

※DCAT…Disaster Care Assistance Teamの略

DCAT移送具訓練

防災訓練

梓の里納涼祭

利用者、住民200人交流
下田・梓の里で納涼祭

下田市加増野の特別養護老人ホーム梓の里（片山康施設長）はこのほど、同施設で納涼祭を開いた。住民との交流の場とし

子どもたちによる朝日太鼓を楽しむ利用者たち＝下田市加増野の特別養護老人ホーム梓の里

て毎年開いている。利用者や家族、住民など約200人が催しや飲食を楽しんだ。

オープニングは、同市吉佐美地区の子どもたちが朝日太鼓を披露。利用者たちは勇壮な響きに聴き入った。焼きそばやかき氷の販売や、職員によるソーラン節と花がさ音頭の披露もあり、夏の夜を来場者みんなで盛り上げた。

地域住民で賑わう納涼祭
今では地域になくてはならないイベントとなっております。

ご利用者の声

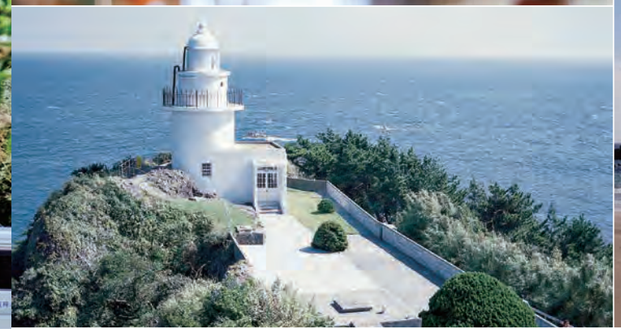
特養

ご利用者ご家族　富永隆明様

富永隆明様

母は、大腿骨骨折後車いすによる移動となり、梓友会の介護サービスを利用するようになりました。90歳から7年間デイサービス・ショートステイと段差の多い環境、送迎時スタッフ皆様には気遣いをしていただきました。この新年を迎えると、入所して1年を迎えます。加齢とともに変わっていく状況に、本人に寄り添い質の高いサービス提供をしていただいております。30年前梓友会は当地(加増野)に発足しました。今年度南伊豆には、都市と地方をつなぐ新たな介護事業も始まりました。梓友会の経営理念とコンプライアンスのもと、利用者本人はもとより地域で暮らす多くの方々が安心の老後を迎えられますよう、益々の充実を期待しております。

光と緑輝く楽園



一人ひとりの生活リズムにあわせたふれあいを

みなとの園は、1999年（平成11年）に南伊豆町で初めての特別養護老人ホームとしてオープンしました。施設のすぐそばには、日本の渚100選に選ばれ、ウミガメも産卵にやってくるほどの美しい砂浜が人気を集める「弓ヶ浜」があり、温暖で自然豊かな環境は、心穏やかに時を過ごすことができます。

当施設は介護保険サービスをはじめとした様々な福祉サービスを提供しており、その数は当法人内で随一を誇っています。それらの取り組みにより地域包括ケアを推進し、地域の高齢者の方々の生活をサポートしています。また、各種ボランティア団体の皆さんの活動拠点にもなっており、常日頃から地域の方々の交流の場にもなっています。地元自治体である南伊豆町とは、配食サービスや認知症カフェの共同開催など、日頃より緊密な連携を図っています。今後も少子高齢化が進む中、町づくりや地域づくりにも積極的に関わりながら、地域の社会資源の一つとしての役割を果たしてまいります。

■特別養護老人ホーム

入居定員は50名で、多床室（4名）を中心とした施設となっております。ご入居者様の個性や生活リズムに沿った個別ケアの実践に取り組み、その方らしさを大切にしたサービス提供を行っています。また、2016年（平成28年）には入浴設備の改修により個浴を導入致しました。常にケアの質の向上とプライバシーにも配慮したサービス提供に努めています。

■ショートステイ

利用定員は20名のショートステイとなっており、南伊豆町をはじめとした賀茂地域の方々にご利用いただいております。ご利用者様が安心し、楽しみをもって過ごしていただくために、様々なプログラムやイベントを用意し、工夫を凝らしたサービス提供を行っています。また、併設のデイサービスや訪問介護とも連携できることが当サービスの強みにもなっています。

■デイサービス

利用定員は30名で、南伊豆町の方々を中心に週5日間のサービス提供を行っています。

当サービスにはチェアイン浴も備えてあり、ご利用者様の身体状況にあわせた幅広い入浴サービスも提供可能となっております。また、理学療法士の指導のもと多彩なプログラムを用意し、個別機能訓練の提供も行っており、在宅高齢者の生活を支えています。

■配食サービス

当サービスは、南伊豆町の委託事業として、2000年（平成12年）から永きにわたり、南伊豆町の全域へ昼食と夕食をお届けしております。あわせて、このサービスではご利用者様の安否確認も重要な役割の一つとなっており、町とともに地域の在宅高齢者を見守っています。毎日食事を楽しみに待ってくれているご利用者様の笑顔を見ることが職員の一番のやりがいです。

特別養護老人ホームみなとの園　概要

■所在地
〒415-0152　静岡県賀茂郡南伊豆町湊638-1
TEL 0558-62-8111
FAX 0558-62-8112

■事業内容
□介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
定員50名
□短期入所生活介護（ショートステイ）
定員20名
□通所介護（デイサービス）
定員30名
□訪問介護（ホームヘルプサービス）
□配食サービス〈南伊豆町委託事業〉

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・伊豆下田診療所
・下田ヒフ科クリニック
・渡辺歯科医院

■開設日
1999年（平成11年）12月20日

■設計
株式会社西澤建築設計事務所

■施工
石井・河津 特定建設工事共同企業体

施設長の言葉 「梓友会三十年の思い出」

施設長
原田　昌志

私ども「みなとの園」は、伊豆最南端の南伊豆町の弓ヶ浜近くに位置し、1999年（平成11年）12月に当法人の2つ目の施設、また南伊豆町では初めての特養として、地域、行政の方々から期待されてオープンしたことを、開設当時の職員として記憶しております。

当時は、2000年（平成12年）4月に施行される「介護保険制度」の前年ということで、介護保険に移行するため、必死になって勉強をしていたことを懐かしく感じます。まさに当施設は介護保険と歩みを同じくして、歴史を重ねてきた施設と言えるでしょう。

実施事業は、特養、ショートスティ、デイサービス、および訪問介護の介護保険事業の他、南伊豆町からの受託事業として、町内の独居・高齢者世帯等の方々にお食事をお届けする配食サービス事業を実施しており、大変好評をいただいております。

今後も、ご利用者、ご家族様には安心で信頼されるサービスの提供を行い、また、地域の皆様には地域福祉の充実に貢献できるよう努力してまいりますので、これからも変わらぬご支援、ご指導を賜りたくお願い申し上げます。最後に、法人の40周年、50周年が輝かしい記念の年となるよう法人施設の一員とし尽力していきたいと思います。

法人30周年に寄せて

むさしの接骨院
管理柔道整復師
大滝　仁先生

このたびは創立30周年おめでとうございます。思い起こせば私が初めてみなとの園さんに伺いましたのは、2001年のことです。もう17年も経ってしまったのかと思うと感慨もひとしおです。

今回は今までの経験を基に、介護職の方に対して腰痛リハビリテーションの必要性について述べさせていただきます。

介護業務中はトランスをしたり、抱き起したりという前屈みの動作が多いので、それによって起こる筋膜性の腰痛が多いと思われます。前傾姿勢の時間が長いため起こっているのですから、空き時間等を利用して、逆に腰を反らせるストレッチが有効であると思います。

ご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、以前NHKの「ためしてガッテン」で介護施設の職員さん達に立ったまま腰を反らせるストレッチを毎日やってもらうという実験をやっていました。数週間続けた結果、全員が腰痛ベルトやコルセットをはずしてもよくなりました。腰痛で悩んでいる方は試してみる価値はあると思います。

最後に、最近は入居者様や利用者様以外にも職員さん方にも腰痛等に対するリハビリを行なっているのですが、それによって少しでも長く仕事を続けていただければ幸いと思っております。

腰痛等でお困りの方はお気軽にご相談下さい。

みなとの園スタッフ

みなとの園の行事

4月	春のお弁当
5月	黒船祭り見学
6月	バーベキュー
7月	流しソーメン大会
8月	弓ヶ浜花火大会見学
9月	敬老会：紅白餅つき大会
10月	フェスタ南伊豆見学
11月	マグロ解体・ミニライブショー
12月	クリスマス会
1月	鍋パーティー
2月	節分会
3月	ひな祭り会

海をバックに記念写真

まぐろ解体ショー

流しそうめん

黒船祭り見学

敬老の日：餅つき大会

ペッパーくん大人気！

ケーキバイキング

弓ヶ浜花火大会

みなとの園の目の前にある弓ヶ浜海岸では、毎年8月に「弓ヶ浜花火大会」が行われます。2018年（平成30年）は約700発の花火が上げられ、夏の夜の澄み切った夜空と白い砂浜の海岸に、迫力満点の海上スターマインやナイヤガラが打ち上げられます。

みなとの園の3階では、花火の前にスイカ割り大会、かき氷大会を開催。南伊豆の小中学生ボランティアさんの手もお借りし、花火を鑑賞しながら楽しい時間を過ごしました。

フェスタ南伊豆

町内の産業団体による地場産品の販売や、伊勢海老のみそ汁サービス、バザー、そして交流都市である杉並区の皆様による阿波踊りや御殿場市の太鼓の演奏も披露され、とても賑やかなイベントです。みなとの園は、今年も大好評の焼き鳥を販売。盛況のうちに完売し、フェスタを盛り上げました。

ご利用者の声

特養

伊藤さと子様 ご家族　正木美恵子様

伊藤さと子様

早いもので、母がみなとの園にお世話になり、もうすぐ2年になります。
入所を待っている間、私も仕事を持っており、火の始末が心配な為、夜も眠れずにいました。イライラした毎日を過ごし、母にもやさしい口調で一声が掛けられなくなり、私は一体どうなるのだろう、母は一体どうなるのだろうと、一日一日を過ごしていました。「入所が出来ますよ」と、電話を頂いた時のほっとした思いと同時に、親を預けることへの複雑な思いがあったことを、今でも覚えています。
週一か二日のペースでいつ会いに行っても、職員の方々の対応はやさしく、母もわがまま一杯過ごしている様です。
本当にありがたく思っています。
数ヶ月前とは比べものにならない程、このところ母は元気に明るくなり、そんな母を見るたび、皆様に感謝しております。
今後とも、宜しくお願い申し上げます。

ホームヘルプサービス みなとの園 思い出を振り返る

ホームヘルプサービス みなとの園

ホームヘルプサービスは訪問介護のことをいいます。居宅サービス計画に基づき、ホームヘルパーがご自宅に訪問し、日常生活の家事支援やお身体の状態に合わせた食事･排泄･入浴などの身体介護サービスを提供します。
【ホームヘルプサービス みなとの園】は、住み慣れた『家』で自分らしい生活を続けたい、そんな思いに寄り添うサービスを心がけています。

小林　みなとの園 ヘルパー事業の開設から早くも19年が経ちましたね。当時のことを覚えていますか?

山田　2000年（平成12年）1月に、ヘルパー2名から始まって、同年4月から介護保険制度が施行されました。介護保険制度開始前は、措置制度だったので今のようにサービス内容があまり厳しくなかったように覚えています。最初は他人のお宅に訪問する事の緊張を強く感じました。ですが、思い返してみれば、受け入れる側のご利用者様やご家族様も同じ気持ちだったんだろうな、と。それでも段々と私たちヘルパーに慣れて下さり、一緒に近所へ散歩に行ったり、ハウスで種蒔きをしたこともありました。ご家族様に「日中仕事で不在になってしまうから、用意してある昼食を食べさせて欲しい」と頼まれたときは、私もお弁当を持って行きご利用者様と一緒に食べた事もありました。ご家族様は安心して仕事に行けると喜んで下さいました。感謝の言葉を頂けた時が『この仕事をやって良かった』と思える瞬間でした。

小林　今よりも色々と“出来る時代”だったんですね。私は、介護保険制度施行と同時に入職したのですが、山奥にひとりで住んでいらっしゃるご利用者様のことをよく覚えています。その方は買い物とお掃除で関わらせていただいた方でした。初めての訪問時、家の中や庭、その家までの道がきれいに掃除されていて身だしなみを整えて待っていて下さいました。ある時、そのご利用者様が私に、「“敬老の日”の記念に2人で撮った写真を床の間に飾って、朝に晩に挨拶しているよおー」と、笑顔で話してくれました。生きるはりになっているとおっしゃってくださったことを鮮明に覚えています。とても、ありがたく感謝の気持ちでいっぱいになりましたね。本当にたくさんの思い出があります。山田さんは、今までを通して特に大変だと感じた事はありますか?

山田　そうですね…やはり、サービス提供責任者として介護保険制度が改正される度に情報を収集し、各ヘルパーに確実な情報を周知して、的確なサービス提供を行う事が大変だと感じました。

小林　あれは大変でしたよね。2005年（平成17年）（施行は翌年度）の介護保険制度改正は、私達もまだサービス提供責任者として未熟でしたから、2人で何回も打ち合わせをして、介護給付と予防給付になること、認定区分が6段階から7段階になることなど各ヘルパーに確実な情報を周知することに奔走しましたね。

山田　本当に色々なことがありましたよね。では逆に、サービス提供責任者として嬉しかった出来事はありますか?

小林　1日2回、毎日訪問をしなければならない方がおりました。ヘルパーの人員が少なくなってしまった時、私たちだけではこの先対応しきれなくなってしまうのではないか…と不安になり、他事業所さんへすべて引き継いだ方が良いのではないかとご利用者様に提案したことがあります。するとその方は、「どうしてもあんたたちがいい、変えたくない!」と頑なにおっしゃられました。最終的には他事業所さんが不足を補ってくれる形になりましたが、11年間訪問をさせていただきました。苦楽を共にした家族のようでした。忘れられませんね。

山田　訪問している間に満100歳の誕生日を一緒に迎える事ができた事、ご本人も内閣総理大臣･

静岡県知事・南伊豆町町長などからのお祝いの言葉や花束等、お祝いして頂いてとても喜んでいられました。（誕生日には県外から娘さん達も帰省）お元気で、何とか自分の家で過ごす事を希望されている『ご利用者さんの想い』…。様々な介護保険サービスを利用する中で、私たちヘルパーを選択いただき、遠方のご家族様に代わり毎日訪問させてもらう事で、ご利用者様の思いに寄り添えることが本当にうれしいです。介護保険制度ができ、今､サービスを利用する事が当たり前の時代になって来ていますが、ヘルパーの全国的な人材不足が今後の課題だと心配しています。

小林　そうですね。2025年はもうすぐそこですが、人材不足を少しでも解消できるように、自分達には何ができるかを考えていきたいですね。

対談者紹介

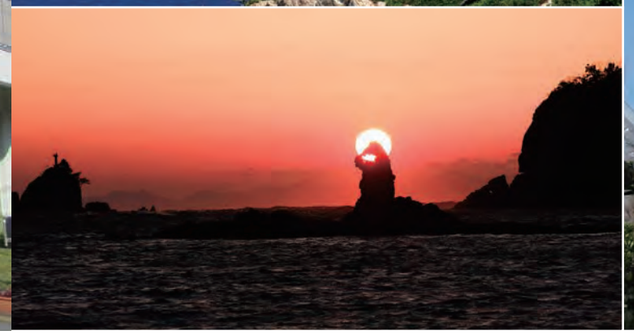
主任ヘルパー
小林　さゆり

所属　みなとの園
入職年　2000 年
出身地　静岡県下田市

副主任ヘルパー
山田　永子

所属　みなとの園
入職年　1999 年
出身地　静岡県賀茂郡南伊豆町

笑顔溢れるひだまりの家



「ふるさと」と言える場所

「ふるさと」と言いたくなる夕陽のまち 西伊豆町。自然が美しい風光明媚な町にたたずむ太陽の里は、2001年（平成13年）に町民待望の高齢者施設として、特別養護老人ホーム30床、ショートスティ5床の規模でスタートしました。その後、2012年（平成24年）に更なる地域の要望にお応えするためショートスティ定員を10床に増床しました。西伊豆町福祉センター内には定員30名に拡大したデイサービスを展開しており、また介護保険事業以外にも西伊豆町からの委託を受け、生きがいデイサービスを毎週火曜日に運営するなど、地域福祉に取り組んでおります。

現在、西伊豆町の高齢化率は静岡県下第1位の48.7%であり、太陽の里はまさに「地域になくてはならない施設」としての重責を担いつつ、小規模ながらアットホームな雰囲気で、ご利用者様をお迎えしています。

■特別養護老人ホーム

定員30名の特養であり、西伊豆町・松崎町のご利用者が多くご入居されております。職員も地元出身者が多いため、太陽の里の特色でもある“アットホーム”な雰囲気の中で地域に密着した介護を行っております。

施設では、残存機能を活用できる声掛けや支援を行い、最期までその人らしい生活が継続出来るよう努めています。また四季折々の行事や誕生会を開催するなど、季節や昔を懐かしんで頂けるような催しも行っております。

■ショートステイ

定員10名のショートステイですが、お互いに顔見知りのご利用者様も多く地元のお話しや昔話でいつも賑やかな雰囲気です。フロア内にはテーブル席とソファー席を用意しご利用者様の身体機能や気分に応じて自由に座って頂いております。また、ご本人の意向に沿ったレクリエーションやリハビリ体操など身体機能維持を目的としたメニューを日課に取り入れています。毎月ボランティアの来園もあり歌やゲームなど楽しみにしているご利用者様も多くいらっしゃいます。

■デイサービス

西伊豆町と松崎町のご利用者様が毎日30名集います。送迎・健康管理・温泉入浴・食事・個々に合った機能訓練といった基本的なサービスだけではなく、同じ地域で同じ年代を生きた、分り合える仲間が集う場所がデイサービスセンター太陽の里なのです。介護と看護の専門性を持って、何らかの障害を抱えてもなお、意欲を持ち楽しく暮らすお手伝いをします。ご利用者様に教えられ地域に支えられ経験を積み重ね進化し続けていきます。

■生きがいデイサービス

「太陽の里」では、西伊豆町の委託を受けて在宅高齢者の介護予防事業「生きがいデイサービス」を週1回開催しています。お達者度（65歳から自立して暮らせる期間）を高める重要なミッションです。高齢化率県下1位の西伊豆町において高齢者が元気なら怖い物はありません。幸福感を持ってこの町で暮らすお手伝いが出来ることは「太陽の里」の職員として誇りです。毎週、心も体も動かして大笑い、介護予防に励んでいます。

特別養護老人ホーム太陽の里　概要

■所在地
〒410-3514　静岡県賀茂郡西伊豆町仁科1134
TEL 0558-52-6200
FAX 0558-52-6600
※デイサービスと生きがいデイサービスは、西伊豆町の公共施設にて実施。所在地は以下の通り。
〒410-3514　静岡県賀茂郡西伊豆町仁科393
西伊豆福祉センター内
TEL 0558-52-6000
FAX 0558-52-6001

■事業内容
□介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
定員30名
□短期入所生活介護（ショートステイ）
定員10名
□通所介護（デイサービス）
定員30名
□生きがいデイサービス〈西伊豆町委託事業〉

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・西伊豆町田子診療所
・堀内歯科医院

■開設日
2001年（平成13年）11月12日

■設計
株式会社西澤建築設計事務所

■施工
株式会社 石井組

施設長の言葉 「法人創立30周年、地域になくてはならない施設･太陽の里」

施設長
渡辺　サチ子

社会福祉法人梓友会が創立30周年を迎える中、太陽の里は2001年（平成13年）4月に西伊豆町福祉センター内に「デイサービスセンター太陽の里」を開設しました。開設したこの日、同センターに生きがい支援事業の運営を西伊豆町から委託され今日に至っております。

また、同年11月には西伊豆町では初の特養として地域の方々から期待され、西伊豆町立仁科幼稚園・保育園跡地に特別養護老人ホーム太陽の里を開設し17年目になります。

伊豆半島の西海岸のほぼ中央に位置する西伊豆町。町が半島の西に位置しているため、駿河湾に沈む雄大で美しい夕陽は地域の方々の大きなエネルギーとして元気を与えてくれています。

西伊豆町の高齢化率は48.7%であり、県下で最も高齢化の進んだ地域であり、今後も一人暮らし世帯や高齢者のいる世帯が増加していくと考えられます。高齢者の方々が可能な限り住み慣れた地域やご自宅で生活できるように、施設サービスと在宅サービス（デイサービスやショートステイサービス）を提供しています。開設当初、定員5名だったショートステイは2012年（平成24年）5月より定員10名となり、多くのご利用希望の声に応えております。

要介護状態になっても地域の中で明るく生き生きと暮らせるように、地域になくてはならない施設として信頼を築くとともに、太陽のように明るい笑顔をもって、ご利用者・ご家族様の思いに心を傾け日々の暮らしの支援に努力してまいります。

太陽の里スタッフ

太陽の里の行事

- 4月 おやつ作り
- 5月 ところてん祭り
- 6月 あじさい見学
- 7月 七夕まつり
- 8月 すいか割り大会
- 9月 敬老会
- 10月 太陽の里まつり
- 11月 スイーツバイキング
- 12月 クリスマス会
- 1月 新年会
- 2月 節分
- 3月 ひな祭り

スイカを堪能

賑わうお祭り

猫の『ちゃんちゃん』

おもちでおやつ作り

玉入れゲーム

踊り披露！

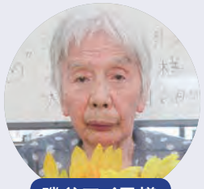
たまねぎ掘り

お鍋パーティー

ご利用者の声

特養

磯谷アイ子様 ご家族　松田行子様


磯谷アイ子様

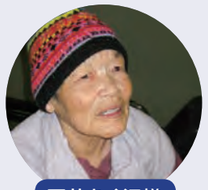
梓友会、30周年おめでとうございます。
母が、「太陽の里」に入所して早いもので、1年3ヶ月が過ぎようとしています。以前は、デイサービス、ショートステイを利用させて頂き、職員の皆様の笑顔や声かけに安心し、励まされてきました。
「入所するなら、太陽の里がいい」と本人の強い思いもあり、他の施設は全く考えていませんでした。
元気だった頃の母は良く働き、孫の子守りをしながら、朝から晩まで働き通しの毎日。そのような中で日本舞踊の練習に励み、師範免許を取得し、地域の人達に踊りを教えるなど精力的に日々過ごしてきました。
しかし、身体が不自由になり、今まで通りの生活が送れなくなった時、「家で最後まで過ごしたい」という思いをもちつつも、父の病気の進行の早さや高齢者三人の介護、二人の曾孫の子守りなど、子供・家族への負担の大変さを思い、入所を決めたようでした。
今はなかなか面会にも行けず、親不孝だなと思っていますが、太陽の里に入所し、母を大切に思ってくれる職員の皆様に出会い、日々の中で人としての関係を築いて下さっている事に頭の下がる思いです。
超高齢化社会を迎えた今、介護を巡る環境は、厳しさを増していると思います。そのような中、母を含め入所者皆様の生きる意欲を高めようと日々奮闘して下さっている職員の皆様、又、病気治療にすぐ対応して下さる診療所の先生には、心から感謝しております。
これからも職員の皆様には迷惑をお掛けする事があると思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

窪田節子様 ご家族　窪田一郎様

窪田ご夫婦

私は現在妻が入所している施設（太陽の里）へ毎日通っている。
妻は平成20年7月腰椎骨折以来、殆ど仕事はできなくなったので日常家事はすべて私がやって来た（嫁は53才で早逝）。しかし、自分の事はほぼ自分でして来た妻も、3年程前から認知症が出て、最近は下の始末まで私がしなければならない状態で老々介護も限界に達していた。
この4月、漸く施設への入所が叶ったが、当然家族で介護すべきなのに、施設に預ける自分に後ろめたさを感じて毎日通っているのだ。
そうした中で今身に染みてわかったのは、介護という仕事の重要性と、介護に携わる方々の人間性ということだった。
私が施設にいる時間は、毎日1時間程度だが、その間施設長はじめ職員は忙しそうなのは勿論だが、入所者に接する態度に人間性が窺える。入所者にもいろいろなタイプの方があるが、それぞれに応じた対応をし、それも機械的にではなく、温か味ある言語・態度で接していられるのを見ると、頭の下がる思いがする。
梓友会が賀茂地区で事業を始められてからもう30年。事業は隆盛の一途を辿っているが、一番の功績はこれらの事業に携わる多くの人材が育っているという事に尽きるのではないかと感じている。

石井きく江様 ご家族　斉藤伸也様


石井きく江様

私達の祖母が太陽の里に入所させて頂いてから、早7年が過ぎました。
入所当日は祖母を稲取の病院まで迎えに行き、天候も良かったのでゆっくりと車を走らせました。
祖母と親父が元気だった頃に皆で海に行って海苔がきをしたこと。夕方親父に呼ばれ弟と2人で祖母の家に行くと「伸とキーが食べたがっているから」と親父は、必ずと言っていい程にたっぷりのおかか・半熟卵が入ったサッポロ一番の醤油味かコーンポタージュを頼み、祖母は毎回嬉しそうに僕達に作ってくれたこと。でもそれは本当は親父の大好物だということを僕達も祖母も分かっていたこと、など、楽しく会話をしながら太陽の里へ向かいました。実は、その道中に東日本大震災が起きました。なので、祖母の入所当日のことは今でもはっきりと覚えております。
元々、俳句が好きだったり人と仲良く過ごすことが上手な祖母なので、入所後も優しいスタッフさんや、普段から面倒を見てくれている叔父夫婦の温かいサポートにより特に大きな不自由もなく、楽しく暮らせております。この場をお借りしまして、御礼を述べさせて頂きます。ありがとうございます。
そして梓友会創立30周年、おめでとうございます。今後の益々の御発展をお祈り申しあげ、御礼、御祝いの挨拶とさせて頂きます。

短期

芹沢博江様 ご家族　芹沢且彦様

芹沢博江様

いつも母がお世話になり感謝しております。母が病に倒れ十余年となりました。半年余りの病院からの帰宅後は、ケアマネの方の支援で、デイサービスを利用しながら、父と妻と私で在宅介護をしてきました。その間、家族の念願であった長子が生まれ、母もとても喜んでくれました。
しかし、仕事、子育て、介護をしっかりやろうとすると、家族それぞれの負担が増しました。そこで、娘が生まれた頃より、時々ショートステイで太陽の里さんを利用させていただいております。父をはじめ家族が一息つけ本当に助かっています。迎えに行く時には、母の表情から、皆様によくしていただいていることが伝わってきます。
今後も皆様が笑顔ある施設でありますよう願っております。

山本さと枝様　ご家族　山本敬一様

山本さと枝様

はじめに、社会福祉法人梓友会の創立30周年おめでとうございます。
母の加齢に伴う老いが年々進行してきましたが、何とか踏みとどまっていました。それは、私たち夫婦が仕事を抱えていたために、私が退職したら連れ添うと母を家に残していたからです。私が退職すると同時に、さまざまな地域貢献活動ボランティアの依頼が押し寄せてきたのが、当施設の介護サービスを利用するきっかけでした。私のライフワークには、できるだけ地域貢献活動に取り組むことを想定していたので、可能な限りお受けすることにしたのです。今年の四月から妻も退職し、現在は二人で母に寄り添いながら、デイとショートを有効活用しています。
利用当初の母は、新しい環境に慣れず、不安な気持ちで出かけていました。母の様子を見に行くと、「早く帰りたいよ。」と泣いたこともありましたが、今では、「どうだった?」と聞くと「楽しかったよ。」と元気で答えています。このところ、施設では、母の歌声が絶えない日々のようで、自宅でも同様です。家庭と施設を繋ぐ連絡記録ノートは、とても丁寧で分かりやすく記録してあり、ありがたいです。
家庭でできること、介護施設にお願いすることを明確にして連携し、分担しながら家庭と施設が車の両輪となって母の介護サービスに当たる日々です。今後も共に歩んでいきたいと思います。

通所

山下カツ子様 ご家族　菅村ゆかり様

山下カツ子様

30周年、おめでとうございます。
母がデイサービス太陽の里に、お世話になって4年がたち、連絡帳は11冊目に入りました。最初、週1回の利用でしたが、お友達もでき、毎日デイサービスに行きたいぐらい楽しくなり、週2回、3回と増えました。連絡帳を見返すと、4年前は名前を書き、計算、配色を考えた塗り絵などしていたんだと思い出します。今の母は、日常生活でも不安な事ばかり、きっと1分1秒と自分なりの確認をしているのでしょう。認知の世界で過ごしている母は、母親気分で私達を心配し、服の着方が理解できず、困ることしばしば。そんな毎日の中、デイサービスでも新しいお友達もでき、毎回会える事を楽しみにしています。デイの様子を一生懸命話しますが、内容・名前が出てこず、説明できないようです。でも楽しかった事はとても伝わってきます。職員の皆さんにも優しく大切にして頂き、家族として、とても安心しております。今後とも宜しくお願い致します。益々の御発展をお祈り致します。

日高荘介様

日高荘介様

私は、平成20年3月21日から太陽の里にお世話になっています。手術して3ヶ月後、70才になった時でした、毎日が不安でしょうがなかった。それは手術後、余命2年と言われたことです。太陽の里の介護士の方がみんな励ましてくれましたので、私も手術の事を忘れるようになりました。
23年7月、七夕の短冊に、「来年も元気でいられますように」と書いていましたら、「80才まで元気にいられますよう、がんばりましょう」と言ってくれました。私も病気に負けないように1日1日を大事にするようになりました。太陽の里の職員の方々のサポートのおかげで10年も通うことができました。
これからも、皆さんと仲良く元気で充実した日々を過ごしたいと思います。利用者と同じ目線で話している職員の方々を見ると、私たち利用者も安心して利用できます。みんな職員の方々を信頼しています。

福田萩野様

福田萩野様

長生きすると、仲良しのお友達が、どんどん居なくなり、何となく心淋しいです。太陽の里さんには、平成24年からお世話になり、お風呂に入れて頂き、みんなと楽しく遊ばせてもらって、心の栄養をたくさん頂いています。いつもやさしくしてくれてありがとう。うれしいです。

福田萩野様 ご家族　福田恵美子様

こんな事がありました。もうすぐ白寿を迎えようとしたある日、突然圧迫骨折で歩けなくなってしまい、正直「これで終わりかな?」と思いました。我家は、高台にあり、生活するにはどうしても20段の石段を、上り下りしなければなりません。とうとうデイも3ヶ月休んでしまいました。「どうしよう、このままでは刺激が無くなってしまう。」まだ80%の回復でしたが、相談してみました。「私たちに任せてください!」とばかり、あの石段を車イスごと運んでくれました。百才からの復活です。スタッフの活気と団結は素晴らしいです。百才を越えてからは、一年を生き延びる事は大変です。スタッフの暖かい応援により先日102才を迎える事が出来ました。
30周年おめでとうございます。太陽の里は皆様の活躍により、これからも元祖デイサービスとして愛されていくことでしょう。

豊かな自然と四季を楽しむ

自分らしい生活ができる場所

「みくらの里」は、梓友会の4番目の施設として2005年（平成17年）2月25日に開設されました。

春はウグイスが鳴き、夏は緑が映え、秋は涼しい風が吹き抜け、冬は美味しい魚が旬をむかえる、四季の変化を楽しめる豊かな自然が魅力です。

コンセプトは、「自分らしい生活ができる場所」。法人初の全室個室ユニットケアタイプを取り入れることで、プライバシーに配慮され、自分なりの生活リズムを作ることができるようになりました。居室は全室トイレ付で約18㎡、またリビング・キッチンは約150㎡と、ゆとりある空間も提供できるよう設計されています。また、下田駅から車で10分弱の距離にあり、面会にとても便利です。

「みくらの里」は地域交流が盛んな施設ということも大きな特徴の一つです。毎年10月に開催される「みくらの里まつり」は、地域の方々が多く訪れます。とても賑やかな催しで、小中高等学校の生徒や保育園の園児たちとの和やかな交流もあり、2017年（平成29年）で11回目を数えるまでになりました。

■特別養護老人ホーム

法人初の全室個室ユニットケアを取り入れた施設として、家庭的な雰囲気の中で、より質の高いサービスを提供していくことを目標としています。共同生活空間には、自然を感じられる吹き抜け構造の中庭を設けており、季節を感じさせる植物がご利用者の心を楽しませてくれます。

計算問題や文章の音読などの教材プリントを使用した「学習療法」を積極的にとりいれ、ご利用者と施設スタッフがコミュニケーションを取りながら学習しています。脳を活性化させ、記憶障害や見当識障害といった認知症を予防・改善させることにも力を入れています。

■ショートステイ

全室個室となっており、プライバシーを尊重し、過ごしやすい空間を提供できるよう心がけています。楽しく過ごしていただけるように、日々の生活の中でその方に合った作業等を提供し、生活動作能力を保つことを大切にしています。ケーキビュッフェや寿司バイキングなど、ご利用者に人気のイベントも定期的に開催し、「また利用したい」と言っていただけるサービス提供に努めております。

■デイサービス

季節毎のイベントは人気を集めており、書初め大会、節分祭、桜・菜の花見学、ひな祭り、家族交流会、風車見学等豊富なラインナップがあります。施設内で実施されるイベントでは、デイルームの外まで響くご利用者の笑い声と歓声が絶えません。

また、ご利用者の方に自立した生活を維持していただくため、生活動作能力を維持改善できるサービスを提供することにも力を入れています。階段昇降や平行棒歩行等、ご利用者一人ひとりのニーズに適したメニューを実施しております。

■ケアプランセンター

要介護認定を受けられた方やさまざまな困難を抱えた状況にあるご利用者に対して居宅介護支援をしています。ご利用者と家族が望む在宅での生活を安心かつスムーズに送ることができるよう、医療機関をはじめ各サービス事業所、地域包括支援センターや行政機関などとも連携することに力を入れています。ほのぼのこいのぼり会という地域に根差した小規模のお祭りイベントでも中心的役割を担うなど、職員と地域の方との心の触れ合いの場づくりにも貢献しています。

介護老人福祉施設みくらの里　概要

■所在地
〒415-0028　静岡県下田市吉佐美1086
TEL 0558-27-3000
FAX 0558-27-3001

■事業内容
□介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
定員80名
□短期入所生活介護（ショートステイ）
定員20名
□通所介護（デイサービス）
定員30名

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・佐倉医院
・ヒロ歯科クリニック
・下田皮膚科クリニック
・医療法人社団SEISEN
（嵩下敏文先生）

■開設日
2005年（平成17年）2月25日

■設計
株式会社西澤建築設計事務所

■施工
安藤・石井・河津 特定建設工事共同企業体

みくらの里スタッフ

ユニットリーダー研修実地研修施設認定

介護職リーダー会議等において、“自分たちは本当にユニットケアの提供ができているのか”という声が上がっていました。どうすれば解決の糸口が見つかるのか、検討を重ねた結果、満足できるケア提供を実現するためには“自分たちが手本となればいい”という発想に至りました。2012年（平成24年）には、全国個室ユニット型施設推進協議会主催のユニットリーダー研修実地研修施設選定調査に向け、『ケアの質の担保』と『ユニットケアの推進』を目的とし、施設一丸となり準備を進めました。2013年（平成25年）2月には調査に合格し、実習生の受入れに向けてさらなる現場の見直しを図りました。同年3月1日、みくらの里はユニットリーダー研修実地研修施設として認定され、同年7月には実習生の受け入れを開始し、現在受け入れた実習生の人数は50名を超えています。

スタッフの腰痛対策を通じて

腰痛は日本で最も多い職業病です。特に、介護の現場では、入浴や更衣などの介助が頻繁にあり、腰痛発症の原因を多く含んだ仕事だと言われています。少子高齢化と労働力人口の減少という大きな問題に対し、明るく、すこやかな毎日のケアを提供するためには、介護サービスを提供する側、つまりスタッフの方々が元気でなければなりません。介護分野では、スタッフの腰痛という問題に対して様々な取り組みがなされていますが、人によって性格が異なるのと同じで腰痛の性質も異なります。腰痛の対策は、組織全体でかつ個別的にも継続的にも取り組まなければ対処することが難しいのです。梓友会では福利厚生の一環として継続的に腰痛対策へ取り組まれており、そのお手伝いをさせて頂いています。スタッフの方々が、元気に、明るく、すこやかなケアを提供できるよう、その一助になれればと思います。

医療法人社団SEISEN
理学療法士
嵩下　敏文先生

みくらの里まつり

「みくらの里まつり」は2006年（平成18年）より、毎年10月に開催されています。来場者数は年々増加し、現在では1,000人を超える方々に訪れていただき、地域の注目イベントとなっています。

司会はタレントの久保ひとみさんです。久保さんは、静岡県で最も有名なローカルタレントの一人で“久保ちゃん”の愛称で親しまれています。いつも笑顔で誰とでも仲良くなれるキャラクターが最大の魅力です。久保さんの司会にまつり会場は大いに盛り上がり、来場者の皆様を楽しませてくださいます。

第10回（2016年）からは杉並区より高円寺阿波おどりの皆様に阿波踊りを披露していただき、会場は熱気と興奮で一つとなり、自治体間を越えた繋がりを感じさせます。

下田中学校や下田高校吹奏楽部等の演奏や朝日子ども太鼓の披露は、利用者・家族・地元住民の方々にとって親しみ深く、学生や子ども達にとっては、日頃の練習の成果を発揮する貴重な機会となっています。

下田ロータリークラブによるチャリティーバザーでは、ロータリー会員の皆様に集めていただいた日用雑貨などが販売され、毎年、早々に完売してしまうほどの人気です。

ご当地B級グルメ屋台や、飴細工、似顔絵コーナー、占いコーナーでは、毎年その道のプロの方にお越し頂いており、賑わいを見せています。

当法人職員による食べ物・飲み物屋台では、法人の管理栄養士を中心にして「安くてうまい！」をモットーにお祭り気分を味わえる食べ物を提供しています。健康コーナーでは、法人の看護職員による各種健康測定を実施し、コーナーのリピーターからは「昨年より数値が良くなった！」との声も聞こえてきます。

「体感型動物園iZoo」ご協力による“出張動物園”では、毎年異なる動物たちが集まり、子ども達に大人気で、毎年駆け足でコーナーに向かう微笑ましい姿を目にします。

今後も地域のイベントとして、1回でも多く開催していきたいと考えています。

2017年（平成29年）第11回【みくらの里まつり】
『バルーン☆パフォーマー→ ともちゃん』を
ゲストにお招きしました！

第11回みくらの里まつりを終えて

2006年（平成18年）に第1回【みくらの里まつり】を開催し、2017年（平成29年）で無事に第11回目を迎えることができました。近年になり、『今年も楽しみにしているよ』や『今年のメインイベントは何？』という声を数多く頂くようになりました。【みくらの里まつり】が地域の方々に支えられ、地域に根付いた催しとして成長してきたことを実感しています。入居者様とそのご家族様におかれましては、一緒の時間を過ごす貴重な機会として、【みくらの里まつり】が施設内イベントとしても重要な役割を担ってきました。

第11回【みくらの里まつり】当日は、あいにくの雨となり、初の雨天決行となりました。雨風が足元を悪くする中での開催となりましたが、地元の子供達や、学生、子供連れの親子、そしてお年寄りの方まで、幅広い年代の方々にご来場頂き、フードコーナーやイベントを楽しんで頂きました。第11回【みくらの里まつり】においても、恒例の目玉出展として、iZooの出張動物園、飴細工コーナー、似顔絵コーナー、占いコーナー、ガラポン抽選会、下田ロータリークラブバザー、健康測定コーナー等を実施しました。また、第10回【みくらの里まつり】からは、杉並区より東京高円寺阿波おどり活動団体をお招きし、東京高円寺阿波おどりを披露して頂いています。この演目は、老若男女問わず、多くの方々にとても好評で、今では【みくらの里まつり】を代表するイベントのひとつとなりました。

2017年実行委員長
長尾 穂高

【みくらの里まつり】は、今では法人で最も大きな催しであり、毎回1,000人近くの方にお越し頂いています。法人職員一同、入居者様とそのご家族、そしてご来場された方々に心の底から催しを楽しんで頂けるよう準備立案及び運営にあたっています。また、運営にあたっては、地域の方、ボランティアの方、関係業者の方の多大なご理解とご協力を頂くことにより成り立っています。ご協力頂いている皆さまへ、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

第12回目以降も地域に根付き、入居者様とご家族をつなぐ催しとして、多くの方々にみくらの里へお越し頂けるよう、法人職員一同、一丸となって取り組んで参ります。

みくらの里の行事

4月	風の花まつり見学
5月	ジャスミン見学
6月	あじさい見学
7月	すいか割り大会
8月	かき氷会
9月	敬老会　豪華刺身盛
10月	十五夜月見団子作り
11月	マグロ解体ショー
12月	クリスマス会　ハンドベル演奏
1月	お正月餅つき大会
2月	節分会　豆まき
3月	ユニット調理　パフェ作り

ジャスミン見学

お絵かきせんべい

豪華！刺身盛り

居酒屋みくら

マグロ解体！

ハンドベル演奏

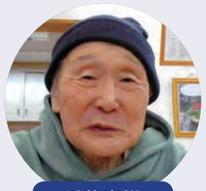
今日は楽しいクリスマス！

迫力！もちつき大会

ご利用者の声

特養

稲葉康様 ご家族　稲葉洋子様


稲葉康様

私は下田市に在住する50代後半の一人っ子（女）です。両親はこの風光明媚な下田の地で、47年間に渡り、元気に商売をさせて頂いてきました。温暖な気候と暖かい地域の人々に支えられ親子3人幸せだったと思います。
そのような中で80代を迎えた両親の衰えは、私にとって驚き、悲しみ、途方に暮れる気持ち、失望、絶望等、様々な感情が押し寄せて自分の中に次から次へ湧いてくるのでした。「頑張らなければいけない」と自分に言い聞かせつつも、本当に自分自身が情けないと感じる日々を送りました。そんな私にとって、みくらの里の皆様に会えた事が、私の心の中の大きな支えと人生の転機となりました。
父の入居から4年、今は安心、安堵の気持ち、安らぎと笑顔を両親と私に与えてくれており、私たちを取り巻く全ての方々に深く感謝しています。今は温厚な父の顔が本当に嬉しいです。毎日のんびり過ごさせて頂いて、私を育ててくれた両親に万歳、みくらの里に万歳、30周年おめでとうございます。

京谷澄子様 ご家族　村山正様

京谷澄子様

母がみくらの里に入居させていただき、今年の3月で丁度10年になります。母も当初は見舞客との応対等で気も紛れていたようでしたが時が経ち、私共娘夫婦との面会が唯一外部との触れ合いの機会となってしまいますと「こんな山の中で寂しい」と愚痴をこぼす事が多くなってきました。そんな中ユニットリーダーの方のご配慮で母の趣味の和歌を額に入れ作品を廊下の壁に展示していただくと、俄然母のヤル気に火がつき「ここは自然が豊かで眺めも良く時々猪が出たり、猿の親子が通ったりするよ」と評価も一変。嬉しそうに語るようになりました。この施設では四季折々に色々な催しがあり、入居している方々を飽きさせない工夫をされています。母からも「この間はお月見団子をみんなで作ったよ」とか「寿司バイキングが美味しかったよ」とか出来事を面会の度聞かせてくれます。中でも誕生日に気心の知れた職員の方と回転寿司を食べ、お買い物が出来る外出が何よりの楽しみのようです。

わたしの著書に『おじさん図鑑』というのがあって、それをおもしろがってくれた理事長さんから連絡をいただいた。所在地を見てびっくり。実家のすぐ近くじゃないか。こんな偶然あるのかしら。ただ、現在子育て中で本業は開店休業状態。まして、1歳児を連れての取材は無理だよなあと思っていたところ、隣に保育園があり取材中預かってもらえるという。そんなに助けてもらえるなら！と、子どもを抱えてやってきたのだ。

みくら保育園は本当にすぐ隣にあり、歩いて顔を見に行ける距離で預かってもらい、働けるのはとてもいいなあと思う。ジブリ映画の「ポニョ」もそんな設定だったなあ。

みくらの里は見慣れたもっこりとした伊豆の山を背負って、広い敷地にのびのびとした様子。建物までのアプローチがたっぷりとってあるのがきもちいい。主任の川島さんが迎えてくれた。入ってみると、地域交流ホールというカフェのような空間があって、とても明るい。こういう施設は、閉じられた感じがして、正直ちょっと足が遠のいてしまう印象があったのだけれど、これはいい。続いてデイサービスセンターがあり（ここも広い！）、みなさん色々なことをしていた。リハビリ、工作、カラオケなどなど。勝手に歌ったり聞いてなかったりするのがおもしろい。

廊下の椅子の一番陽当りのいい場所に、猫のように座っているおじいさんが。「ほしたにさんです」と、川島さん。スターバックスのキャップをかぶり（みんなに褒められたからお気に入りだそう。チャーミング！）にこにこして談笑していたのに、去り際に、真顔で「気をつけろよ」と。職員にもいつも言っているらしい、帰り道を気をつけろとか、車の運転に気をつけろとか、色々な意味があるみたいだけれど、わたしには何を気をつけたらいいのだろうか。ちゃんと聞いてくればよかったな。

その後、みくらの里のみなさんにお会いした。面倒見のよさそうな人が多い印象。看護の鈴木さんの「おだやかに」という言葉が印象に残った。老後の暮らし方はわたしはまだイメージできず、死に向かっていくというのも受け止めきれないものがあったけど、それだなあと思った。うん、それが一番。

お昼は施設の職員食をいただいたのだが、ごはんにおみそ汁、焼き魚に副菜2品と、料理上手な人のふだんのごはんという感じで、これがとてもおいしかった。たまには子どもを預けて、ホールで仕事して、お昼にこのご飯食べられたら楽ちんだなあ…なんて妄想してしまった。おしまい。

イラスト・文
なかむらるみ
東京新聞ほっとweb、七緒にてイラスト連載中。著書に『おじさん図鑑』（小学館）、『おじさん追跡日記』（文藝春秋）がある。

人生に彩りと安心を

地域の方々の在宅生活をサポートする

「小規模多機能型居宅介護みくらの里」は2014年（平成26年）4月1日にオープンしました。「介護老人福祉施設みくらの里」の隣の敷地に建っています。長い名前ですが、一目で施設の特徴を現しています。

高齢者が要介護状態になっても、できる限り住み慣れた地域（在宅）で生活が続けられるように「通い」「宿泊」「訪問」の3つのサービスを切れ目なく適時適切に受ける事ができます。どのサービスも同じ職員が対応するので安心してご利用いただけます。少人数登録制の為、家庭的な雰囲気の中で過ごすことができます。月額定額制なので介護利用限度額を超える心配がありません。

ご自宅を中心として、地域の一員として暮らし続けられる支援（地域包括ケアシステム）を24時間365日、ひとつの事業所で提供しています。

■地域貢献活動【健康プラザ】

地域の方々に健康で生きがいに満ちた生活を送っていただきたいという想いから、小規模多機能型居宅介護みくらの里では定期的に『健康プラザ』を開催しています。内容は、地域の皆さまや利用者からのご意見を抽出し、できる限りご希望に沿えるものを実施します。

参加者からは、心のこもった感謝のお言葉をいただき私たちもやりがいに満ちた日々を送っています。

フラワーアレンジメント教室

健康プラザ
ご利用者から
のお便り

所長の言葉 「法人創立30周年にあたり」

所長
平山　悦子

私達「小規模多機能型居宅介護みくらの里」は2014年（平成26年）4月に開設し、まだ歴史も浅く走り始めたばかりの施設です。どのような状態になっても、できる限り住み慣れた地域（在宅）で、自分らしい生活の実現を目的に2006年（平成18年）に創設されたサービスで、「通い」「泊り」「訪問」サービスを柔軟に組み合わせて利用いただく下田市で唯一の施設です。

賀茂地域でも数少ないサービスのため、開設当初は事業内容をご理解いただくことが難しく、軌道に乗るまでは広報活動に苦労しました。地域の皆様のご協力もいただき、現在ではご自身の意向とあっていると選んでいただけるようにもなってまいりました。

ご利用者様一人一人が大切にされてきた「今までの生活」「趣味の活動」「近所との付き合い」「行きつけの場所」等を私達スタッフも一緒に大切にしながら、いつまでも変わらない生活を続けていけるよう、小規模多機能型にしかできないサービス、小規模多機能だからできるサービスを提供しながら、ご利用者様・ご家族様・地域の皆様・スタッフと共にこれから先の歴史の軌跡を作っていきたいと思っております。

小規模多機能型居宅介護みくらの里　概要

■所在地
〒415-0028　静岡県下田市吉佐美1077-16
TEL 0558-36-4822
FAX 0558-36-4823

■事業内容
□小規模多機能型居宅介護
定員29名

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・伊豆下田診療所

■開設日
2014年（平成26年）4月1日

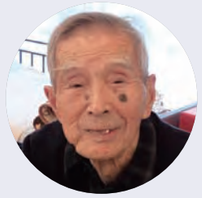
■設計
株式会社西澤建築設計事務所

■施工
株式会社 安藤・間 静岡支店

スタッフによるご利用者ご紹介

一部のご利用者様のみのご紹介となりましたが、本当に個性豊かな笑いの絶えない方ばかりです。
人生の先輩に対して失礼な言い方ではありますが、一番しっくりくる言い方ですので敬意をもってこう言わせていただきます。『小規模多機能型居宅介護みくらの里』ご利用者の皆様！「かわいい！」「楽しい！」「大好き！」
私達も皆様のように歳を重ねていきたいと思います。
皆様と一日一日を笑顔で過ごせることが何よりも幸せです。 小規模みくらの里スタッフより

渡邉　房夫様



知識も興味も豊富で、「いつまでも自分の足で歩きたいと思っているよ。だから、みんなを誘って歩く練習をしているよ。職員が推進している、できる活動は自ら行う体制作りを続けていってほしい。みんなで、やる気を出してがんばろー！」と、いつも他のご利用者を鼓舞してくださいます。

笹野　福子様

モダンな帽子とフワフワのスカーフに包まれて、太陽のように温かい笑顔いっぱいの福子様。80代まで民宿の名物女将。フラダンスに社交ダンス、大正琴と趣味も多彩。料理の腕前も天下一だったとか。車いすの生活になられた今も、身体を動かすのがお好きなため、毎日体操や洗濯物たたみ等大活躍されております。

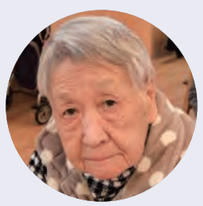
小針　直弘様

健脚王の異名を持つ小針様。「ちょっとやらせてくれよ～」と、自ら仕事を探して歩く。モップを持たせたら右に出るものはいません。いつも床がピカピカなのは、小針様のおかげです。

大門　さち江様

小規模みくらの里開設後、記念すべき第1号のご利用者様です。どなたとも仲良く過ごされ、みんなからも「さっちゃん、さっちゃん」と親しまれる愛されキャラです。

鈴木　喜佐代様

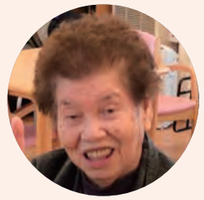


小規模みくらの歌姫。どんな歌も歌いこなせる歌唱力♪♪♪。併せて、「Hello, My name is KISAYO！ Thank you. Nice to meet you.」とバイリンガルな一面も。とてもFunkyでCuteな喜佐代様です。

外岡　清己様

見た目は一見怖そうなお父さんですが、実はとっても優しい方なんです！家にいるときは愛車（セニアカー）にまたがり、地域のパトロールだって行います。

土屋　都様

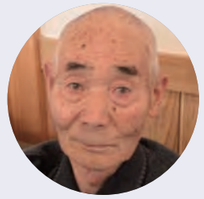


最愛の夫：喜雄様と仲良くご利用されています。喜雄様は将棋の名手。二人の馴れ染は喜雄様の一目ぼれとか。卵焼きがお得意で、近所の商店で卵2パック大人買いすることも。「ハイ、ドヤサ～！」と元気一杯、今日も合の手が響きます。

八田部　清子様

小学6年生の時に「看護師になる！」と決めてから40年余り、世のため人のため、医療の道をひたすら歩んでこられました。血圧測定値を瞬時に解析され、「いい血圧ですね。とってもお元気ですよ」と優しい笑顔がとっても魅力的な清子様です。

夫：渡邉　秋夫様



妻のためなら、家事もお世話も何でもします。愛妻家として右に出るものはいません！ストレス解消法は、ホッと一息 至福の一服(-。-)y-゜゜゜

妻：渡邉　秀子様

秋夫様より少し先輩の秀子様。皆と話していてもいたってGoing My Way。豪快で溌剌とした笑い声が周りを和ませます。笑顔もとっても素敵です♪

彦山　好江様

クルクル回る表情は、まるで女優のようです。コミカルな動きと天然な発言に笑いが絶えません。夏の暑さにも、冬の寒さにも負けずに朝いちばんで通ってくれます。

上村　美南子様

「赤とんぼ」の歌が大得意。愛と根性の特訓で少しずつ言葉が多くなってきています。一番伝えたいのは、孫への感謝の言葉。着実に増えていく言葉にお孫様と喜びの毎日です。

施設紹介 ｜ 企業主導型保育事業みくら保育園

宝物であるお子様を安心して預けていただける園でありたい

小さな保育園だからできる保育

　みくら保育園は小さな保育園ですが、だからこそ細やかな保育ができます。

　園児の自主性を尊重し、やりたい事・チャレンジしたい事が出来るようサポートしていきます。又、たくさんの自然に触れられるよう園外保育を実施しています。四季折々に田んぼに出掛けたり、草花にふれたり、バスに乗って電車を見に行ったり、楽しい事が一杯です。思いやりやルールを守る習慣を身に付ける為、異年齢保育とグループの介護施設を訪問して多世代交流を実施しています。一人ひとりの発達を把握し保育計画を立て、働く保護者の皆様が安心して預けられるように職員一同頑張っています。

■保育理念

その子らしさを大切にし、
“こころ”と “からだ”と “あたま”を育てる

■保育方針

1. 自主性を尊重し、
子ども一人ひとりと向き合う保育を目指します
2. 自然の中での体験、その子らしい感性に共感し、
豊かな想像力を育みます
3. 地域や多世代との関わりを通じて
優しい気持ちを育み、社会のルールを学びます
4. 様々な働き方に優しい、
安心と安全の保育を目指します

企業主導型保育事業みくら保育園 概要

■所在地
〒415-0028　下田市吉佐美1077-16
TEL 0558-36-3030
FAX 0558-36-3030

■事業内容
□企業主導型保育事業　定員 19名

■開設日
2017年（平成29年）4月1日

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院

リーダーの言葉

　みくら保育園は2017年（平成29年）4月に開園してまもなく3年目を迎えます。定員19名の家族的な雰囲気の中で、異年齢の交流ができる小規模保育です。子ども一人ひとりと向き合う保育と、四季を通し自然に触れて楽しむ園外保育や、地域に触れる機会を多く取り入れる活動に力をいれております。また、併設する介護施設との交流も行っております。

　当園が、子ども達にとって生き生きとして楽しむところ、保護者様にとっては、信頼し安心していただけるところでなくてはなりません。そして子どもの成長や感動を保護者様と共有しながら子育てを応援して、保護者様のそれぞれのお仕事をサポートしていきたいと思っております。また、職員間の連携やチームワークの良さを発揮して、私たち職員は、より良い保育ができるように保育の質の向上に努めていきたいと思っております。

みくら保育園リーダー
外岡　俊子

保育園内部設え

　みくら保育園スタッフで作成した可愛らしい設えの一部をご紹介。

1日の流れ

7：00	開園 随時登園
10：00	おやつ 朝の会
10：30	午前保育
12：00	昼食
13：00	午睡
15：00	おやつ
15：30	帰りの会
16：00	随時降園
17：00	自由保育
19：00	補食
20：00	閉園

天気のいい午前中は、みんなで一緒のお散歩へ

系列の介護施設を訪問することも！多世代交流でお子様の社会性を育みます。

朝の会♪

季節の製作活動

多世代交流

お給食

保育園の様子

桜とピース★

園外保育：ふるさと公園にて

明るく元気な先生達

みんなでひな祭り集会

ご利用者の声

鈴木 詩織ちゃん　お母さん 由加さん

開園した時から通わせて頂いています。みくら保育園は、少人数だからこそ先生方の目が行き届いていますし、ベテランの先生方ばかりで、子供達が毎日楽しんで過ごせるよう工夫して下さっているのが分かります。園での様子も送迎時や連絡帳を通して丁寧に教えてもらえます。娘も園で覚えた歌や踊り、遊びを披露してくれるようになり、成長を感じるとともに、楽しんで過ごしている様子を感じ、安心して毎日送り出すことができます。

杉本 美智瑠ちゃん　お母さん 澄代さん

みくら保育園オープンから娘がお世話になっています。職員の方々が温かく大切に保育して下さるので安心して娘を預けています。みくら保育園は家庭的な雰囲気で明るく楽しい空間だと感じています。また、年齢に応じた生活習慣も丁寧に指導して下さるのでありがたいです。土日祝祭日の日直も快く保育を引き受けて下さるので業務に専念できます。みくら保育園が出来て、仕事をしながらの子育ての環境がとても良くなったと感じています。

日本初の自治体間連携による特別養護老人ホーム

「エクレシア南伊豆」の提案から現在まで

美しい白い砂浜が緩やかな弧を描く弓ヶ浜海岸から内陸へ約4km。2018年（平成30年）3月に開設した「エクレシア南伊豆」は、周囲の木立に溶け込むように建つ。住民同士のつながりがあり、以前から自治体間連携が図られている静岡県と南伊豆町、そして東京都杉並区の三者連携によって開設された、日本初の特別養護老人ホームである。その開設までの経緯、「エクレシア南伊豆」ならではの取り組みについて紹介する。

開設まで

長い交流の上で提案された自治体間連携による特養

南伊豆町と杉並区の交流が始まったのは、1974年（昭和49年）。弓ヶ浜海岸を臨む土地に、「南伊豆健康学園」の前身である「南伊豆養護学園」を設立したことがきっかけだ。自然に恵まれた環境にあるこの学園は、転地療養のための全寮制の杉並区立小学校である。喘息改善などの健康上の目標を持つ児童が、健康回復に努めながら学んでいた。学園開設後、2012年（平成24年）両自治体は災害時の協力協定を結ぶなど、連携を進めていた。

学園は開設から38年経った2012年（平成24年）、児童の減少に伴い、廃園となる。そして、学園跡地の活用を検討する中で、杉並区の約2,000人（2010年（平成22年）当時）の入居申込者がその整備を待つ、特別養護老人ホームの建設が提案された。

しかし、当時、介護保険制度下では、保険者（市町村等）の圏域外に特別養護老人ホームを開設することは想定されていなかった。また、圏域外の特別養護老人ホームに、保険者が住民の入所を誘導することは、住み慣れた地域で暮らし続けることを推奨する「地域包括ケア」の理念と相容れないという意見もあった。計画の実現は困難と思われた。

突破口となったのは、2013年（平成25年）、厚生労働大臣の諮問機関として発足した「都市部の高齢化対策に関する検討会」（座長・大森彌東京大学名誉教授）だ。この検討会の報告書において、南伊豆町・杉並区による特別養護老人ホーム整備構想が取り上げられたのである。「地域コミュニティや自治体間のつながりが強い場合の事例」。そう報告されたことで整備構想は既定事実となり、実現への道が開かれた。

2つの大きな課題も解決し無事、着工、開設に至る

ただし、報告書では下記について配慮の必要性が明記された。

- 静岡県と東京都の介護保険事業支援計画において、杉並区から南伊豆町の特別養護老人ホームに入所するニーズを明記した上で調整を図る。
- 東日本大震災の教訓を踏まえて地震・津波等の災害への対応に万全を期す。
- 静岡県における当該地域の医療提供体制との整合性について検討する。
- 入所者本人の意思の尊重を大前提とし、本人の意思に関わらず、家族や地域から切り離して地方の施設に入所させることにならないよう十分配慮する。

介護老人福祉施設エクレシア南伊豆　概要

■所在地
〒415-0304　静岡県賀茂郡南伊豆町加納792
TEL 0558-36-3113
FAX 0558-36-3117

■事業内容
□介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
定員90名
□短期入所生活介護（ショートステイ）
定員10名
□通所介護（デイサービス）
定員20名

■協力医療機関
・伊豆今井浜病院
・飯島医院
・佐倉医院
・細川歯科医院

■開設日
2018年（平成30年）3月5日

■設計
株式会社松田平田設計

■施工
株式会社 石井組

報告書で示されたこれらの点を含め、整備構想には、この時点で解消すべきいくつかの課題があったが、特に大きな課題は以下の二点であった。

一つは、建設地である。

当初、建設地は、整備構想の出発点となった「南伊豆健康学園」跡地を予定していた。しかし、東日本大震災の発生により、被害が想定される区域の見直しが実施され、当該予定地が津波浸水区域に当たることが判明した。新たな建設地探しが必要になったのである。数カ所の候補地が提案され、その結果、南伊豆町が所有していた現在の土地が採択された。

特別養護老人ホームは、静岡県と杉並区が建設費を補助し、その隣接地には、南伊豆町が社会福祉協議会、地域包括支援センターなどを集約させた複合施設を併せて整備する方針が固まった。

もう一つは、後期高齢者医療制度の住所地特例の問題である。

当時、国民健康保険の被保険者には適用されている住所地特例は、後期高齢者医療制度では適用外となっていた。このため、杉並区民を受け入れることによる南伊豆町の負担増が、懸念されていた。そこで、静岡県、南伊豆町、杉並区の三者で厚生労働省に法改正を要望。2015年（平成27年）5月に法律が改正され、2018年（平成30年）4月から75歳以上も住所地特例が適用されることとなった。

こうして懸念材料だった課題は解決し、2016年（平成28年）11月に着工。2018年（平成30年）3月、全国初の自治体間連携による特別養護老人ホーム「エクレシア南伊豆」は無事、開設に至ったのである。

杉並区の公募に応じるか否か。梓友会として多面的に検討

一方、梓友会は2015年（平成27年）5月、南伊豆町からの運営法人の公募に対し、静岡県を通して応募の打診を受けた。

人口減と少子高齢化の進展が著しい賀茂地区で、特別養護老人ホームを運営するには、検討すべき数々の課題がある。打診を受けても、即答はできない状況にあった。

検討過程で最も大きな課題となったのは、人材確保の問題である。

特別養護老人ホームの運営を担えば、10年あるいは20年という長いスパンで、継続的に70名程度の職員の確保が求められる。介護職の求人難が続く中、これは、開設後も解決が難しい課題だとも言えた。

一方で、施設開設は、地元雇用への大きな貢献になる。ネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面からも検討が必要だった。

法人として、初期投資に見合うだけの事業運営上のメリットが、将来的に見込めるのか。これについても、多面的な検討が求められた。

1989年（平成元年）に開設した「梓の里」など、従来型の特別養護老人ホームは、いずれ建て替えの時期を迎える。その際、賀茂地区の人口減を考慮すれば、法人として事業規模をダウンサイジングする判断が必要になる可能性もある。しかし、ここで杉並区の公募に応じれば、今後、都市部で増え続ける高齢者を受け入れるチャネルが得られる。そのメリットは大きいと考えられた。

また、梓友会は長年、地域限定的に高齢者介護に取り組んできた法人である。南伊豆町に特別養護老人ホームが開発されるのであれば、ぜひとも担いたいという意欲もあった。

当時は、栃木県の「ゆいま～る」や石川県の「Share金沢」など、各地の日本版CCRC（継続的なケア付き高齢者コミュニティ）の取り組みがクローズアップされている時期でもあった。南伊豆町・杉並区の特別養護老人ホーム整備事業が、そうした日本版CCRCの先進事例につながっていく可能性も期待できた。

梓友会は、このような多面的な検討を経て、杉並区の公募に応じるという判断に至ったのである。

広報活動

家族、ケアマネジャー対象に現地見学ツアーを開催

「エクレシア南伊豆」の入居者募集については、開設前から現在に至るまで、杉並区内での広報は杉並区と共に行ってきた。

開設前の2017年（平成29年）、開設後の2018年（平成30年）には、杉並区の主催で杉並区のケアマネジャーを対象とした現地見学バスツアーを開催している。在宅限界点を迎えた利用者に対し、選択肢の一つとして紹介してもらうためである。

パンフレットの作成、杉並区役所での広報活動なども、当然行ってきた。しかし、現地を見学することが、より実感値を伴う利用者への施設紹介につながると考え、ツアーも並行して実施してきた。2017年、2018年共に、20名弱のケアマネジャーの参加があった。

同様に、要介護の杉並区民を持つ家族を対象とした見学ツアーも、2017年、2018年共に1泊2日にて開催している。2日目には自由に南伊豆町の観光を楽しんでもらう行程としており、1回につき15名前後が参加している。

こうした広報活動もあって、2019年（平成31年）1月30日現在、入所者86名中、杉並区からの入所者は39名となっている。

構造

全ての面に無垢の木を使用し優しさと経済性を実現

「エクレシア南伊豆」は、「人に優しく、経済的に優れた建物」というコンセプトに基づき、木造一部鉄筋コンクリート造・鉄骨造3階建てを採用している。熱伝導率が低い木材を、床、壁、天井の6面に使用。高断熱·高気密な空間を実現した。これにより、省エネルギー性が高く、CO_2の排出量も削減できる構造物となっている。また、無垢の木に囲まれた空間は、入居者、職員に温もりを感じられる環境を提供している。

1～3階の特別養護老人ホームは、全9ユニット（1ユニット10名）からなる。各居室毎に、洗面スペースとトイレを設置。ユニットごとに設けた浴室は個浴とし、フロアに1つずつ、特別浴室を設けた。また、エレベーターホールからつながる廊下幅を広く取り、「いずのえんがわ」と命名。入居者同士、あるいは、入居者と家族が触れあえる空間とした。

また、1階には、デイサービス、ショートステイを併設。あわせて、美しい木々が眺められるガラス張りの地域交流センターも設けた。ここでは、管理栄養士が考案したメニューを提供する食事会など、地域住民等を対象にした催しや、入居者向けの施設イベントを開催している。

特徴

住み慣れた土地を離れた杉並区からの入居者への配慮

賀茂地区·杉並区の双方から入居者を受け入れる「エクレシア南伊豆」では、他の施設にはない様々な対応を行っている。

開設前、まず考慮したのは、両者の生活習慣や文化的背景についてである。もし両者に違いがあるなら、その違いによって入居者が居心地の悪さを覚えることがあってはならない。そう考え、ひとまず両者のユニットを分けて入居受け入れを図ることとした。いずれ満床になり、入居者が入れ替わっていくうちに、融合が図られればよいと考えたのである。

また職員の中にも、杉並区からの入居者への対応にやや不安を覚える者もあった。“都会の人”に対して、言葉遣い、接し方など、今まで通りのサービス提供でよいのか、というものである。しかし、いざ開設してみると、賀茂地区、杉並区、それぞれの入居者の生活習慣や意識、職員に求める対応に大きな違いはなかった。

ただ、住み慣れた地域を離れた杉並区からの入居者に対しては、生活文化の継続性にできる限り配慮した。慣れない土地に来た寂しさを少しでも埋めてもらうため、地域のニュース番組をライブ配信するアプリ「ど・ろーかる」を搭載したiPadを無料で貸し出し、地域密着型のニュース番組を放送と同時に視聴できるほか、花火大会やお祭りなど、地域のイベントのライブ配信も楽しめるようにした。

また、iPadは、離れて暮らす家族と顔を見て話したい入居者にも貸し出すこととした。コミュニケーションアプリを用いた画面上で、顔を合わせてのやりとりに活用してもらうのである。入居者の中には、離れて住む家族と定期的にやりとりする方もおり、鮮明な画像で表情などを見ることができるため、家族にも喜ばれている。

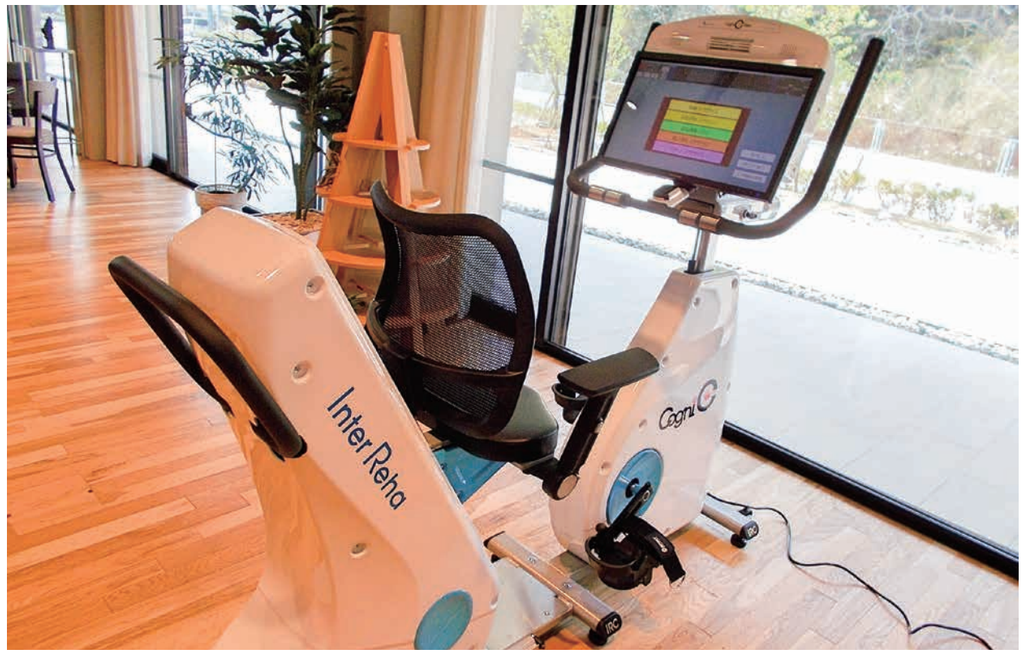
食に関しては、開設後、杉並区からの入居者から「地元の食材を食べたい」との要望が多く聞かれた。そこで、あえて地元食材を用いたメニューも提供している。一方、パン食を要望する声にも応え、地元パン店に週3日ほど出張販売を依頼し、おやつとして購入してもらい、好評を得ている。

このほか、杉並区からの入居に当たっては、移送のためのタクシー利用に杉並区から当法人への運営補助金を活用している。これにより、往復2万円程度の利用者負担での移送を可能にした。

また、主に杉並区からの入居者ご家族への配慮として、家族用宿泊室も2部屋用意した。1泊1人朝食代程度で宿泊でき、2018年（平成30年）12月現在、月に6家族（平均）ほどが利用している。

ロボット、ICT導入による認知症予防と業務効率化

「エクレシア南伊豆」ではiPadに加え、様々な介護ロボット、ICT機器を導入している。



一つは、既存の施設でも活用しているコミュニケーションロボット「Pepper」である。これに、ナレーションや字幕付きの昔懐かしい映像で思い出話を引き出す「ミッケルアート」や、体操、音楽療法などのプログラムを搭載。利用者に認知症予防やレクリエーションの提供を図りながら、職員の業務負担の軽減を図っている。

これに加え、認知症予防の機器としては、1階の地域交流センターに「コグニバイク」も設置した。これは、国立長寿医療研究センターが開発した、脳と体を同時に使うこと（デュアルタスク）で認知症を予防あるいは改善しようとするプログラムにより、脳の活動を活発化することから、認知症予防を図れるとされている。入居者の中には、散歩代わりに1階に下りてきて、「コグニバイク」でのトレーニングに取り組む方もいる。

また、業務負担の軽減やケアプランの改善などに役立つ、パラマウントベッド株式会社の見守り支援システム「眠りSCAN」も導入している。寝ている利用者の睡眠･覚醒や呼吸、心拍などを自動的に記録し、分析できるセンサーである。導入により、入居者の状態変化のリアルタイムでの確認、生活リズムに合わせたケアプランの立案や評価を可能にした。現在はテスト的に導入しているが、今後、導入台数を増やしていくことを検討している。

職員の業務負担軽減という点では、株式会社富士データシステムの介護システム「ケアカルテ」の前身である「ちょうじゅ」の導入がある。それまで当法人では、紙媒体に手書きで記録等を行ってきた。これを、タブレット端末を使用し、多職種がその場でバイタルデータやケアの記録を入力できるようにした。このシステムの導入により、よりスムーズに情報共有を図ることができ、業務の効率化も実現している。

施設長の言葉 「30周年を祝して」

施設長
高橋　安彦

私がこの法人に入職して10年が経ちました。法人創立30周年という節目の年を全国初の静岡県、南伊豆町、東京都杉並区の自治体間連携による特養施設で迎えることができ、法人の役職員はもとよりご利用者家族、地域の方々、関係行政機関･団体の皆様など大勢の皆様に支えられ、感謝の気持ちと大変うれしい思いでいっぱいです。

エクレシア南伊豆では、ユニットケアの理念である「暮らしの継続」を実現するため、ハード面においては、入居する前の生活と入居した後の生活が継続できるよう環境整備に配慮し、ソフト面については、入居者の潜在能力を活かして、入居者一人一人がワクワク、ドキドキするよう、生活意欲を引き出すケアを目指しております。

また、個別ケアを実現するため、ICTの導入や介護ロボットの活用、「凍結含浸食」の提供実践、多職種連携のもと「丁寧なケア」そして「適切なケア」の実現に向けて職員一同より一層努力を重ねてまいりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

施設設備経過報告・創設工事概要

エクレシア南伊豆　施設整備経過報告

平成27年 9月	平成28年度介護保険関連施設等施設整備協議書提出
平成28年 4月	静岡県健康福祉部福祉長寿局長より平成28年度介護保険関連施設等施設整備費補助金の内示通知（福介第２号）
平成28年10月	独立行政法人福祉医療機構借入申込書提出 建築工事に伴う入札執行９社　株式会社石井組　落札 南伊豆町と土地使用貸借契約締結
平成28年10月22日	着工
平成29年 3月	杉並区長より平成28年度杉並区特別養護老人ホーム等施設等整備費補助金の資金補助決定通知（28杉財歳出第75539号）
平成29年 4月	静岡県健康福祉部福祉長寿局長より平成29年度介護保険関連施設等施設整備費補助金の内示通知（福介第１号）
平成29年 4月	平成29年度介護サービス提供体制整備促進事業費補助金の事前協議書を静岡県に提出
平成29年 8月	静岡県健康福祉部福祉長寿局長より平成29年度介護サービス提供体制整備促進事業費補助金内示通知（福介第380号）
平成29年11月	杉並区長より平成29年度杉並区特別養護老人ホーム等施設等整備費補助金の資金補助決定通知（29杉財歳出第47337号）
平成30年 2月	杉並区介護施設等開設準備経費補助金交付助成申請書を杉並区へ提出 介護保険関連施設等施設整備事業（2か年整備）に伴う完成現場確認
平成30年 3月 5日	介護老人福祉施設エクレシア南伊豆（定員90名）事業開始予定 老人短期入所エクレシア南伊豆（定員10名） デイサービスセンターエクレシア南伊豆（定員20名） 地域交流センター

介護老人福祉施設エクレシア南伊豆創設工事概要

工 事 名：(仮称) 特別養護老人ホームエクレシア南伊豆　創設工事

(1) 施設の名称、所在地および設置主体
名　　称：介護老人福祉施設エクレシア南伊豆
所 在 地：静岡県賀茂郡南伊豆町加納７９２番地
設置主体：社会福祉法人梓友会
経営主体：社会福祉法人梓友会
理事長　川 島 優 幸

(2) 施設の定員
介護老人福祉施設　90名
ショートステイ　10名
デイサービス　20名
地域交流センター

(3) 建物の規模及び構造
建 物 構 造　木造　一部鉄筋コンクリート造・鉄骨造、３階建て
敷 地 面 積　6,619.64㎡　借地（南伊豆町が法人に50年間無償貸与）
建 築 面 積　2,724.84㎡
延べ床面積　5,968.06㎡

(4) 工　期
平成28年10月22日から平成30年1月31日

(5) 事業費等
建築工事については、平成28年10月18日に指名競争入札（9社）を行い、1,771,200千円で株式会社石井組に落札。事業費の詳細は下表のとおり。
(施設整備及び設備整備費)

（単位：円）

	合　計
静岡県補助金	433,724,000
杉並区補助金	624,666,000
借　入　金	908,500,000
設置者負担金	12,932,000
合　計	1,979,822,000

「エクレシア南伊豆」開設までの主な経緯

2011年（平成23年）　2月	平成23年度杉並区当初予算において、学園跡地を活用した特別養護老人ホーム整備の検討を発表
11月	国家戦略会議において、都市部の特養待機者と地方活性化についての議員発言あり
2012年（平成24年）　7月	日本再生戦略の改革工程表を閣議決定。都市部の介護施設不足解決に向け、圏域外の介護施設との連携事業等の研究が始まる
2013年（平成25年）　3月	「プラチナ･コミュニティ構想研究班会議」の報告書に、「杉並区と南伊豆町の取り組みが、先駆的な取り組みとして支援が望まれる」と記載される
5月	「産業競争力会議」での提案を受け、厚生労働省が「都市部の高齢化対策に関する検討会」を設置
9月	「都市部の高齢化対策に関する検討会」報告書に、南伊豆町･杉並区の特養整備構想が、「地域コミュニティや自治体間のつながりが強い場合の事例」として記載される
9月	南伊豆町、静岡県、杉並区で、厚生労働省に対し、後期高齢者医療制度の住所地特例適用に関する法改正及び、圏域外での介護施設整備に関する技術的支援を要望
2014年（平成26年）　8月	南伊豆町の町有地での健康福祉センターとの共同整備の方針決定
12月	南伊豆町、静岡県、杉並区の三者による基本合意書の締結
2015年（平成27年）　3月	南伊豆町、静岡県、杉並区の三者で、特養整備に関する覚書･確認書を締結。整備に関して新たな地元負担が発生しないよう必要な対策を講じることを確認
2016年（平成28年）11月	建設工事着工
2018年（平成30年）　1月	竣工
3月	「エクレシア南伊豆」開設

建設風景

エクレシア南伊豆の行事の様子

日本フィルハーモニー交響楽団出張コンサート

懐かしのレトロ居酒屋

本格！寿司屋開店！

バーベキュー

まるで普通食！凍結含浸食

カフェイベント

サンタと記念撮影

エクレシア南伊豆スタッフ

社会福祉法人梓友会 クラウドファンディング企画 ～桜が繋ぐプロジェクト～

クラウドファンディングとは

クラウドファンディングとは、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語で、さまざまな人が製品・サービスの開発、もしくはアイデアの実現など「ある目的」のために、インターネットを通じ、この想いに共感してくださった不特定多数の方から資金の出資や協力を募ることをいいます。

目　的

社会福祉法人梓友会は、静岡県、南伊豆町、杉並区の全国初の取組みである遠隔自治体間携による介護老人福祉施設エクレシア南伊豆の運営事業法人として選定されました。

当法人は、南伊豆町と杉並区のご利用者様が一つ屋根の下で暮らしていくことになるエクレシア南伊豆を『ご利用者・ご家族・地域を繋ぐ拠点』としたいと考えました。

また、私たちの法人を選んでくださった遠方からのご利用者様や、そのご家族様にも南伊豆町をより身近に感じてもらい『第二の故郷だと思っていただきたい』という強い願いもあります。

施設を囲むように桜（品種：カワヅザクラ）を植樹することで、ご利用者様の居室や通路の窓から見える景色には、人と人を繋ぐ拠点のシンボルとなる桜並木が広がります。そして、地域の方々や観光でこの地を訪れた方々にとっては、ここが新たな南伊豆町の花見名所の一つとなればと期待しています。

想いに共感いただける皆様とこの拠点をつくりあげたい、という想いから手段としてクラウドファンディングを活用することにしました。

東京大学名誉教授 大森 彌 氏より 応援メッセージ

『桜（はな）を愛でる心で「エクレシア南伊豆」を桜並木で囲もう』

私は、東京都杉並区と静岡県南伊豆町が全国初の取組みである遠隔自治体間連携による特別養護老人ホームの整備に果敢に乗り出すことを応援してきました。

特養の建設予定地を視察した時、この周りに桜を植えて新しいお花見の名所にしたらと提案しました。桜並木に囲まれた特養は、きっと利用者・家族・地域を繋ぐ素敵な拠点になると思いました。それが実現しようとしています。

事業運営に当たる「社会福祉法人梓友会」では、クラウドファンディングを通じて、この特養を地元早咲きの桜並木で囲む計画を立てています。この計画が一人でも多くの方々の「自由な志」で実現しますよう、このクラウドファンディングへのご参加を切に願っています。

エクレシア南伊豆の桜

クラウドファンディングサービス

Readyfor

クラウドファンディング ご支援金募集期間

2017年（平成29年）10月15日～ 12月1日

ご協力いただいた企業様

・株式会社松田平田設計　様
・有限会社三角屋水産　様
・JF伊豆漁業協同組合　様
・リフレッシュスポット風未来　様
・下田すぎのこ作業所　様

返戻品

食事に喜びが感じられる
三角屋水産セット

JF伊豆漁業協同組合
南伊豆の太陽を浴びた干物セット

リフレッシュスポット風未来
南伊豆の海鮮こだわり宿泊プラン

目標ご支援金額　500,000円

達成ご支援金額　1,290,000円

ご支援者数

53名（東京都、神奈川県、埼玉県、静岡県、青森県、大阪府 等　全国各地よりご支援）

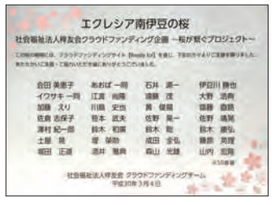
ご支援者様からの応援メッセージ

・南伊豆、桜でいっぱいにしたいですね。素敵な取り組み、是非成功させてください。
・一日も早く、目標額に達成するといいですね。早く綺麗な桜が見れますよう、お祈りしております。
・きれいな桜に囲まれた和みの施設になることを願っています。
・素晴らしい施設運営を期待してます。満開の桜がみられることを楽しみにしてます。

2018年（平成30年）2月9日に桜の植樹が完了。

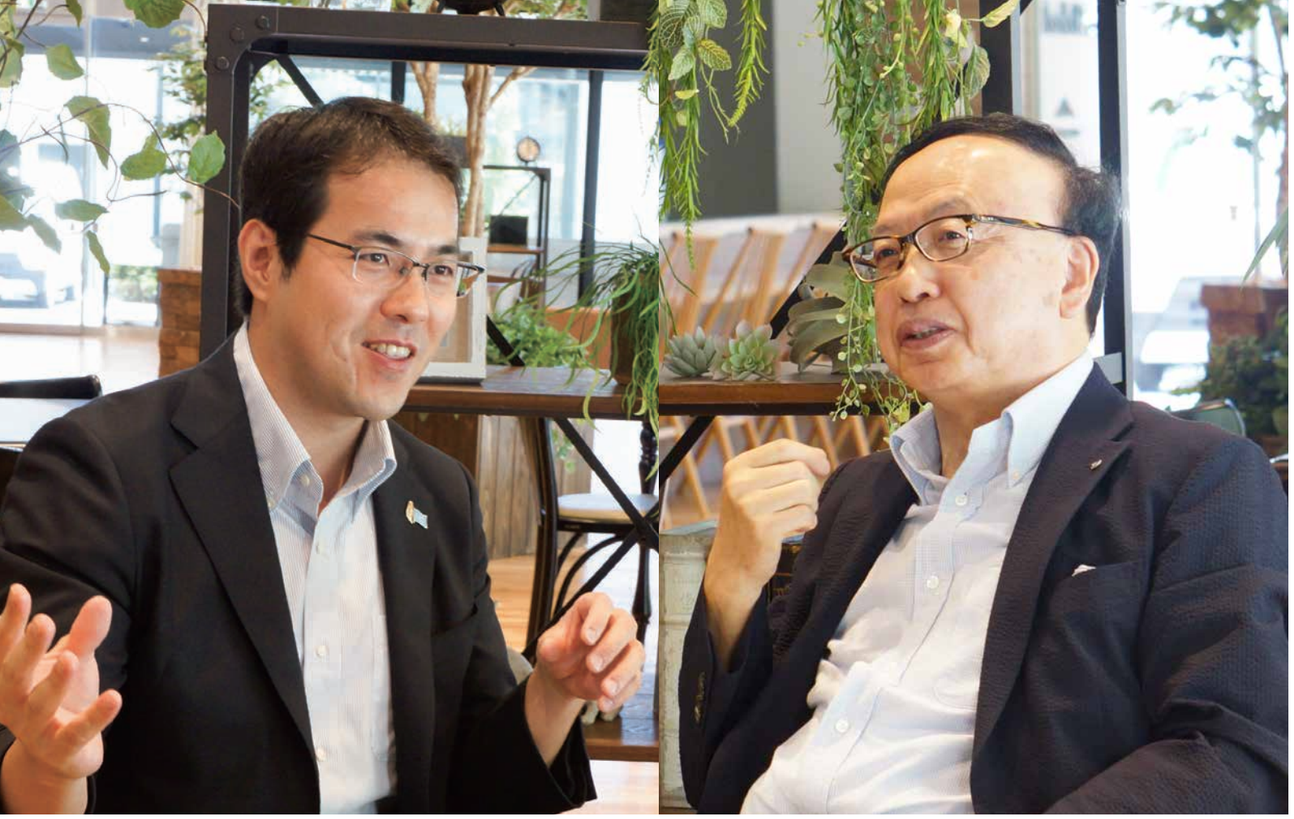
今後は桜にちなんだイベントをエクレシア南伊豆にて開催していく予定です。

桜植樹の様子



事業展開

時代の流れや社会の変動により、
社会福祉法人の在り方、目指すべき姿は、
年々大きく”かたち”を変えています。
地域住民の多様化するニーズにお応えし続けられるよう、
梓友会も成長を続けます。



高齢化。人口減少。地域格差。
課題解決に向けて学び合う台湾と日本

対談日：2018年（平成30年）7月9日

対談
人物紹介

公益財団法人笹川平和財団　研究員
黄　俊陽

生年月日 1984年
出身地 台湾台東市
公共経済学博士。幼少時より日本に深い興味を持ち、政策形成と分析を学ぶため、2009年（平成21年）に来日。アジア開発銀行研究所の勤務を経て、現在は公益財団法人笹川平和財団海洋政策研究所で研究員を務める。対談当時は政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策研究センターポストドクトラルフェロー。専門は国際経済学、ブルーエコノミー、一般均衡分析。日本経済学会、日本城郭協会メンバー。

社会福祉法人梓友会理事長
川島　優幸

生年月日 1956年
出身地 北海道札幌市
社会福祉法人梓友会設立準備室から当法人に関わる。1999年（平成11年）から当法人理事長に就任。ロータリークラブ会員として台湾新荘RCと国際交流があり、昨年は台中政府や台南RCとも福祉人材交流を実施。

人材の確保

高齢化の進展で、医療・介護も外国人労働者に頼る時代へ

川島　まず東日本大震災の際、たくさんの台湾の方々からいろいろなご支援、ご協力をいただいたことへの感謝を申し上げてから対談を始めたいと思っておりました。本日はよろしくお願い致します。

黄　台湾でも1999年（平成11年）にM7.6の921大地震が起きた時、日本から救援やいろいろな援助をいただきました。台湾も日本も自然災害大国です。お互いにいろいろ助け合って進むことが、両国の人にとっての幸せだと思っています。本日はよろしくお願い致します。

川島　今、先生から日本も台湾も、というお言葉がありましたが、両国に共通する点は、どちらも急速に高齢化が進んでいることです。日本では、2014年（平成26年）に「日本創成会議」があり、そこで、2040年までに存続できなくなる恐れが高い「消滅可能性都市」を公表し、多くの人に衝撃を与えました。ここ伊豆半島は、半島全体でも人口は7万人、南伊豆町は8,000人くらいです。それでも、医療や介護は、地域の人々が健康に働き、暮らしていくために、その地域で完結し生活を支えるために必須だと考えています。そのための人材の確保が大きな課題となっていますし、財政面から言うと、今後、統合も含め、基礎自治体がどうなっていくかも気になるところです。

黄　台湾も人口が6大都市に集中していて、他の地域は人口も財源も多くはありません。日本同様、地域格差もありますし、2018年（平成30年）3月には高齢人口が14％に達し、日本より早いスピードで高齢化が進んでいます。

川島　高齢化率でいうと、このあたりの1市5町はだいたいが40％以上です。日本では高齢化率が50％以上になると、町自体の維持が困難な「限界集落」と呼ばれます。一方で働き手である15歳から64歳の生産年齢人口は減少の一途をたどり、このまま進めばそう遅くない時期に、医療･介護も含め、外国人労働者に頼らざるを得なくなる時代が到来すると思っています。実際、下田あたりでは漁協にかなりの人数の外国人技能実習生が入っています。

外国人介護人材の受け入れが進む台湾が抱える課題とは

黄　そうすると、梓友会さんも今後、外国の介護人材の受け入れに積極的に取り組まれるのでしょうか。

川島　外国人材の受け入れは進めていきますが、例えば50名の介護職員の3割を外国人にするということは、ちょっと現実的ではないと思っています。まずは数％から積み上げていくようなイメージですね。3年前、ベトナムに行き、ダナン市の方とお話ししたとき、ベトナムから日本への人材派遣の仕組みはそれほど整備されていないと感じました。それをおろそかに見て、受け入れを進めるようなことはしない方がよいと考えています。台湾では、日本と比べるとはるかに海外の介護人材の受け入れが進んでいますね。

黄　おっしゃるとおり、特に高齢者の介護を担う外国籍の労働人材は「就業サービス法」による、ビザの最大在留期間は14年となっています。今はまだ、インドネシアやベトナムに比べると賃金が高いため、外国籍の介護人材が台湾に来てくれています。しかしながら、台湾の実質賃金はこの20年間成長していない。今後、仮に台湾の実質賃金がほかの開発途上国の賃金率を下回り、彼らが台湾に来る意欲を失った場合、台湾の介護労働はどう

なるのか。それが台湾の難しい問題とされています。

川島　確かに、外国人材を受け入れる場合、そうした懸念がありますね。当法人に長野県で技能実習をしたベトナム人の方が視察に来たことがありますが、母国に帰ったら給与水準が上がり、日本に来て学べたことはよかったと話していました。受け入れ体制を整えることで、技能実習生が3年、5年で帰国したとしても、次に来日して学ぼうという人に繋がっていきます。こうした継続的な“繋がり”について考えていくことが必要になるのかもしれません。

黄　外国籍の人材を確保する一方で、台湾ではいかにその方々に頼らず、自国で介護人材を獲得するのか、また、その発展方法も大きな課題となっています。それはビジネス的にも社会的にも、一つの大きなテーマですね。

川島　日本も外国人材を受け入れていく上で、そこはしっかり考えておかなくてはならないでしょうね。今、日本ではEPAなど、国と国との関わりの中で外国人材の受け入れが進んでいます。そうやって受け入れる人材をあてにするようになると、今後もし人材を送り出してくれている国々がその人数に抑制をかけたら、現場は立ち行かなくなるかもしれません。そういう懸念もあり、外国人技能実習生や留学生などを受け入れるにしても、まずは、潜在的な労働力を地域の中で確保することが必要だと考えています。

黄　自国の医療や介護を支える人材確保については、台湾も日本も重要な社会的テーマとなっているのですね。

川島　今後は、60歳以上の方を働き手として確保することも必要だと思います。そうした方たちを受け入れるために研修体制を整備したり、介護の中でも高度な専門性が必要な仕事と、そうでない仕事を色分けしながら、人材の確保を進めていくことになるのではないでしょうか。

イノベーション

介護現場の実践から得た知見は積極的に提言していきたい

黄　高齢化と共に、台湾と日本が同じく直面する問題として、人口減少があります。人は難しい問題を考える方が頭がよく働きますから、人口減少という難問に直面すると、実は科学技術が発展し、ICTがイノベーションとして実用され、生産性が上がるとともに、労働時間減少、生活の満足度が高められていきます。日本は優れた科学技術を海外に輸出するだけではなく、システムも輸出する、すなわちそのメンテナンスができる人材の教育·育成も益々重要になることでしょう。

川島　それは大変興味深いですね。日本では今、「働き方改革」で生産性の向上が求められています。それを介護施設に当てはめて考えていくと、現有の職員にとってより働きやすい環境を整備するために、日本独自の技術によるロボット開発やAIの活用が必要です。当法人でも、ヒューマノイドロボット“Pepper”をデイサービスに導入していますが、ご利用者も違和感なく触れ合っています。ただ、先生がおっしゃったように、現状ではメンテナンスをしたり、そばでご利用者との間を調整する人が必要なんですね。ですから、我々もロボットなどに明るい人材を育てていかなくてはならないと思っています。

黄　教育はこれから重要な課題ですね。では、介護や医療のイノベーションについては、何か注目していることはありますか。

川島　そうですね。政府が提唱する“ソサエティ5.0”には、やはり大きな期待をしています。いくつかのプラットフォームの構築が進められていくと思いますが、その中には地域包括ケアのプラットフォームもあります。具体的にはまだこれからだと思いますが、事業者の立場から、協力できるところは実証を積み、貢献できればと考えています。

黄　その場合、介護施設はどのような立場になるのでしょうか。

川島　実は地域包括ケアでも、特別養護老人ホームの立場は後方支援なんです。しかし、そこでできる役割と範囲を、業界として、あるいは事業体として明確に持つべきだと考えています。我々は介護保険制度の下で事業運営をしていきますが、現場での実践の結果、変えていく必要があると感じた事柄については、積極的に提言していくことが必要だと思います。

ロボットを活用できれば若手の人材不足でも対応可能に

黄　“ソサエティ5.0”のように技術革新が進んだ社会で起きる変化について、2017年（平成29年）に、政策研究大学院大学科学技術イノベーション政策研究センターの研究チーム、慶応大学名誉教授の黒田昌裕先生と一緒に論文を発表しました。その論文では、国がICTを導入してロボットによる生産性が向上し、それによって生まれた余剰労働力をライフサイエンスや介護に投入したら、どのような変化が起きるかについて取り上げました。

川島　どのような変化が起きるのですか。

黄　今後、高齢化が進んで労働者が減少すれば、介護従事者に非常に深刻な影響が及ぼされる。そこで、ロボットを導入すると、労働者の勤務時間は減少し、余暇の時間も増える一方、“労働時間あたりの実質賃金率”は上がる。その結果、人の生活の「質」が、より確保できる。これからの発展は、経済成長率を高めるということだけではなくて、限られた資源を有効に活用し、生活の質を向上させることを重視し、持続的で安定的な成長（Sustainable Growth）を目指すべきだと思っています。

川島　科学技術の進歩による省力化が進み、気持ちにゆとりが生まれ、介護の質が高まるということですね。

黄　そうなんです。また、今の20代の介護労働

者は、30年後、40年後は50代、60代になります。そのころには、壮年になった介護労働者に腕力がなくても、全てロボットに任せられる時代が来るかもしれません。ロボットの価格が下がれば、介護現場に多くのロボットを導入できます。体が大きく重い人の移動をロボットに任せられるようになれば、若い人の力がなくてもやっていける可能性もあるでしょう。これも一つの発見でした。

川島　ロボットの価格の問題は、日本でも導入の大きな障壁になっています。当法人では、ロボットスーツ“HAL”、前にお話しした“Pepper”、寝ている利用者の睡眠･覚醒や心拍数などを把握・データ化し、モバイル端末などで共有できるスマートベッドシステム“眠りSCAN”、自転車をこぎながら認知機能のトレーニングをする“コグニバイク”などを少しずつ導入しています。このうち、“HAL”を例に取れば、費用は、1台150万円以上ほどかかり､助成を受けたとしても負担は大きいです。また、操作については認定を受けた者でなければ担当できないという縛りもあります。

黄　なかなか簡単には導入できないですね。

川島　介護老人福祉施設の会合でロボットの話題が出ると､「まだまだ高くて、うちでは入れられない」という声が多いですね。しかし介護老人保健施設では、全てのベッドを“眠りSCAN”にしているところもありますし、“コグニバイク”を何十台も導入している医療機関もあります。“コグニバイク”は、当法人でも、団塊の世代など若い世代では利用する方が結構多いんです。

黄　人気があるのですね。

川島　ただ、それを目玉に集客しようとは考えていません。ある程度の安全性が確保されているロボットをテストしていくつもりで、積極的に取り入れてみる。そして、職員は新しいロボットに触れ、体験し、学んでもらう。そんな考え方で導入しています。

労力を軽減するためのロボットは介護現場でも受け入れやすい

黄　台湾では、台湾版の“Pepper”や“HAL”がつくられています。つまり、日本で発明されたロボットを台湾で半分のコストでつくっているんです（笑）。そういうスマート機器の工場があり、現場でもっと使える機器を多く開発しています。

川島　介護にロボットを導入することについては、台湾でも日本同様、まだ抵抗感があると聞きましたが、いかがですか。

黄　確かに、介護全てをロボットが行うことには、抵抗感がありますね。ただ、人がロボットの力を借りて労力を軽くする“補助機器”としては受け入れられています。飲食店などにもたくさんの“Pepper”が導入されていますから、ロボットとのやりとり自体はすぐに慣れると思います。ロボットの導入で省力化され、自分を介護する人が楽になることは、介護される方も望ましいと考えるでしょう。

川島　おっしゃるとおりですね。私は、ロボットの導入は業務の省力化にもメリットがありますが、それ以上に、職員の仕事の振り分け方に変化をもたらすのではないかと考えています。

黄　メリットがあるとわかっていても、現場での受け入れがスムーズにいかないこともあると聞きます。梓友会さんではいかがでしたか。

川島　介護職員は、最初は否定的でしたね。しかし今、2施設に導入していますが、徐々に慣れてきて違和感がなくなりました。おむつ交換をロボットがするのには介護職員も抵抗があると思いますが、今導入している“Pepper”などの機器はその前段階です。「エクレシア南伊豆」では、介護や看護の記録も全てモバイル端末での入力にしています。データ化することで、より正確な記録ができますし、自動的に統計も取れます。そうした事務作業が苦手だった職員には喜ばれていますね。

黄　やはり補助機器としてのロボットなら、受け入れやすいということですね。

川島　そうですね。我々は省力化による介護職員の半減など、そのようなことを求めているわけではありません。それより、今まで人力でやっていたことを、ICT機器を使うことで正確に行う。複数の職員で行っていたプログラムを、ロボットを活用し、1人で行い、それ以外の人には別の仕事にあたってもらう。そんなイメージです。省力化によってケアの質が下がっては本末転倒です。ロボットやICT機器の活用で、ケアの質を高めつつ省力化することは、決して否定すべきことではないと考えています。それに、我々世代は、ロボットにあまり抵抗感がないんですよ。“鉄腕アトム”とか“鉄人28号”を見て育っているので（笑）。もっと若いと、“ガンダム”が好きな人が多いかもしれません。

黄　次に介護を受ける世代は、そろそろ“ガンダム世代”が入ってくるのではないでしょうか。いわゆる、幼い頃ロボットを操縦できることに憧れていた世代の人なら、“HAL”を着けることにも抵抗がなさそうですね（笑）。

地域包括ケア

民間の要望をボトムアップでスムーズに助けている台湾

川島　冒頭で台湾も地域の格差があるとのお話がありましたが、その対応としてはどのようなことがありますか。

黄　そうですね、行政区の合併による変化が出てきましたね。例えば昔の台中市と台中県が合併して、大きな台中市になり、民間の高齢者施設が台中市からの支援を受けて移ってきています。今、台中市で進んでいるのは、100 ～ 150人規模のマンションで、高齢者と若者が一緒に暮らす地域を作るというプロジェクトです。自然があふれる環境の中で、優れたインターネット環境を整備し、いろいろなベンチャー企業が起業できる場を想定しています。

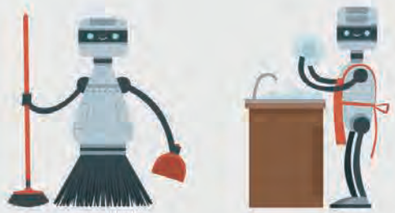
川島　それはどこが主体となっているプロジェクトですか。

黄　病院と近くの大学の産学連携ですね。台湾は交通も非常に便利ですから、綺麗な自然のある過疎地域と地方都市の連携も、徐々に発展するのではないでしょうか。

川島　日本では、「コンパクトシティ」という考え方がありますが、あまり進んでいません。しかし台湾の場合は国立大学が多く、日本でいう医療や介護のコンソーシアムがありますよね。そこである程度コンパクトシティ化したケアや疾病予防など、すべて含めたものをモデル化したものを、台中市などが手がけ始めていると聞きました。そこに可能性を感じますね。かつての台湾は大規模施設中心で、日本の小規模多機能型居宅介護のような事業所は少なかったと思います。それが、例えばマンションの1階にヘルパーを派遣する事業所が作られるなど、変わってきています。おそらく日本を訪

ICT

情報･通信に関する技術



介護ロボット

生活面で介護が必要な人を補助し
介護者側の負担を軽減するロボット機器

れた大学生、大学院生が見て学んだものを持ち帰り、“台湾バージョン”で考えて展開しているのではないでしょうか。

黄　おっしゃるとおり、そういう事業はすべて民間の発想です。政府が指定するトップダウンではなく、本当にこの地域が求めるサービスを作るという、ボトムアップからの力ですね。政府は、民間からの要望をスムーズにサポートするという形を取っています。

川島　台湾を訪れてみると、本当にそういう感じがしますね。

黄　特に台中では、住民からの相談に対応する社会福祉士を育てていて、集合住宅区という地域に一つ、「社会福祉コンサルティングスポット」があります。そこに来てお茶を飲んでもいいし、「私の家に高齢者がいるが、どうすればいいか」という相談に乗ってもらうこともできます。

川島　日本の地域包括支援センターのような形ですよね。私が台中で見たのは、ある一つのグループが示したモデルを、台中政府が「これはいい」と評価し、広めるためにどうするかを考える、というものです。台湾全土で地域包括ケアが進むのかどうかはわかりませんが、そうした新しい動き方をしている人たちの存在を感じました。

黄　台湾から見ると、日本は価値観が似ているけれど、台湾よりずっと丁寧に取り組みを進めている印象があります。日本の打ち出す政策はデータ整理やPDCAプロセスがしっかりしていて説得力があります。また、奉仕や思いやりの精神など、台湾が日本から学ぶべきことはまだまだたくさんあると思っています。

ICT

ICチップ入り健康保険証で医療データを集積する台湾

黄　台湾の高齢化社会の政策も、日本がいつもロールモデルとなっています。たとえば、2017年（平成29年）には東京大学大学院医学系研究科・国際保健政策学の野村周平先生と渋谷健司先生の研究チームが医学雑誌『The Lancet』で、平均寿命の都道府県格差が拡大しているという論文を発表しました。データの可視化によって、日本で最も長寿である都道府県は滋賀県であることがわかっています。一方、過疎でも寿命が長い地域の背景要因を、データの分析でエビデンスに基づいて深めることもでき、これによって医療改革が進みます。ここから学ぶことは多いですし、これは極めて重要だと感じますね。

川島　確かに、介護の分野でも介護予防や口腔ケアなどにもエビデンスを求める時代に入ってきています。そこは当然のこととして、取り組まなくてはいけないだろうと思います。また、ICTの活用という点では、すでにお話ししたように、これまで紙ベースで取っていた記録もタブレット端末でバイタルチェックぐらいはできるようになってきました。そしてそれを元にして、クラウドの中で分析をかけられる。そういう新しい時代に入ってきたことを、非常に強く感じています。

黄　2018年（平成30年）4月に、台湾の大学教授と日本にいる研修生が初めて「エクレシア南伊豆」を訪問した際には、梓友会さんのたくさんのICTの導入を見て非常に感心しました。

川島　ありがとうございます。しかしICTの導入は、むしろ、台湾の方が進んでいるのではないでしょうか。医療の分野では、いち早く健康保険証と身分証、運転免許証を一体化したカードにICチップを入れていますよね。しかも、わずか1年ぐらいでそのカードの普及率90％を達成し、情報共有ができるようになっている。そういうところは日本も学ばなくてはいけないのではないかと思っています。

黄　おっしゃっるとおり、台湾の「全民健康保険」というシステムは、1995年（平成7年）から実施され、台湾全国に導入されています。外国人も含めて発行しているICチップ内蔵の健康保険証によって、すべての医療データを集積しています。加入者は2千万人以上、それが20数年分蓄積されたビッグデータとなっています。

川島　そのデータは、行政も全て閲覧・加工できるようになっていますよね。だから、ある特定のクリニックで、例えばインフルエンザや癌など、特定の疾患が増えたとなると、行政側がそこに介入して評価分析をすると聞きました。事務コストや過剰な医療費を検出して削減し、それを予防医学に反映することができる。非常に合理的なやり方だと思います。

要介護状態も人生の一部という教育が必要になる時代に

黄　しかし、実は課題もあります。台湾ではよくデング熱が発生します。例えば2015年（平成27年）には数万人が感染し、218人が死亡したんですね。それなのに翌年は全く死亡病歴が出てこなかった。なぜこの年に大量の感染者が出たのか、原因の分析もできていないのです。

川島　台湾では分析を行うにも、医療データへのアクセスがとても厳しく制限されていると聞きました。

黄　そうですね。医療データが保存されている政府機関への閲覧アクセスは非常に制限されています。また、データアナリスト人材の不足も深刻な問題です。台湾やタイなどはビッグデータがあるのにアナリストがまだまだ足りていません。日本はアナリストはいるのに、有用な医療のビッグデータの使用は限られていますね。もし研究方法とデータの使用をうまく連携することができれば、アジア特有の季節性伝染病などの分析ができるかもしれません。

川島　医療分野ではデータ分析で、いろいろな新しい知見が生まれそうですね。介護の分野ではビッグデータの解析というと、介護報酬の無駄遣いが焦点になるなど、まだ本質的なデータの活用には取り組まれていないのが現状です。今後はもっと現場に密着したデータの分析が行われると良いのですが。

黄　どのような分析を期待されますか。

川島　たとえば、処方薬の服薬とご利用者の状態について、ある一定の見解が示せると良いかもしれません。特別養護老人ホームには薬剤師の配置はなく、看護師から嘱託医に報告し、処方の調

整をしていただいています。服薬状況と状態像についてもっと綿密に把握していくと、示せるものはあるように思います。ヨーロッパなどでは、高齢者には医療費をあまり掛けない方針です。日本も、今後75歳以上の方には、あまり医療費を掛けない方向に進むのではないかと思っています。

黄　日本では、要介護になってベッドで寝ている期間が平均で10年ほどあり、その間に膨大な医療費がかかっています。先にお話しした「健康寿命」という指標を提示しましたが、これを伸ばすことで医療費を抑えるようにしていく必要があります。一つには、食生活、まちづくりが健康に与える影響についても学ぶことが大切です。

川島　健康を維持するための要因を知っておくということですね。

黄　そのとおりです。しかし健康寿命を伸ばしても、高齢化の進展でどうしても要介護の人は増えていきます。だとすれば、今後は介護を受けることも介護をすることも、人生の一段階だと受け止めていく必要があります。子どもの頃から、自分の両親はいつか介護が必要になるのだという、人生のサイクルについての教育をすることも非常に重要ですね。

川島　日本においては、哲学者のアルフォンス・デーケンさんが“death education（死の教育）”を提唱していますが、デンマークなどでは、子どもの教科書に社会保障について学ぶ単元があるそうですね。日本はこれだけの長寿社会となり、健康寿命の先に病気を抱えて生きる期間が長くなるのであれば、病気、介護、死について学ぶ機会が必要かもしれません。

本日は、ありがとうございました。

2018年（平成30年）12月21日 再会記念に撮影

地域貢献

社会福祉法人梓友会は、地域の皆様に支えられ、ともに歩み続け早くも30年が経過しました。今後も地域住民の皆様の生活に彩りと安心、そして快適な暮らしに繋げられる取組みを続けていきたいと思います。

出張福祉勉強会

近年、小・中・高校生の福祉体験を受け入れることが多くなり、その中で「体験先で何をしたらいいのかわからず不安」との子供達の声や、先生達からも「体験前の授業でどういったことを伝えればよいのか」との声をいただき、様々な不安を少しでも減らして体験に来ていただきたいと考えました。また、「高齢者福祉」について子供の頃から触れてもらい、将来的に“介護の仕事”を目指してくれる子ども達が増えたら…という想いから『出張福祉勉強会』を始めました。

出張福祉勉強会ポスター

多くの皆様のご協力のもと、2012年（平成24年）10月4日に第1回目の勉強会を下田市立下田東中学校にて開催することが出来ました。現在では、この勉強会も20回を超え、福祉体験前の学習としてだけでなく、みんなで福祉を学ぶ機会として地域の学校へ伺っています。

出張福祉勉強会の様子

出張福祉勉強会を通じて

総務課係長 鈴木奈緒

「地域に向けて何かできないか…」そう考え、学校の授業で『福祉勉強会』をさせていただく活動を始め、あっという間に6年が過ぎました。初めての事でいろいろと悩みながら進めていましたが、子供達からのお手紙に「周りの人みんなに優しくしていきたい」「私も将来、介護の仕事がしたくなった」という言葉をもらい、この勉強会を続けてきて本当に良かったと心から思っています。

この先さらに、福祉分野では今の子供たちの手が必要になる時代がやってきます。その時に今、子供たちがどういう福祉・介護観を培うかで将来が変わってくるのではないでしょうか。この勉強会が子供達の心に何かしら残り、将来の夢の選択肢に「介護の仕事」が少しでも多く挙がってくれることを楽しみに、そして子供達のたくさんの笑顔を見るために、これからもこの活動を続けていきたいと思います。

介護のお仕事魅力発見セミナー
（静岡県社会福祉人材センター主催）

次世代を担う小学生、中学生や高校生等に対して、福祉の仕事について正しい理解を深め、今後の進路選択に新たな可能性を見出すため、職業としての福祉の魅力を伝えるセミナーが開催されています。

当法人職員も現場での経験を活かしセミナーでは講師を担うこともあります。

介護のおしごと体験バスツアー
（静岡県委託事業）

団塊の世代が75歳以上となる11年後の2025年には、介護人材の確保が全国的な社会課題となります。そのため、11年後に20歳を迎える小学生3、4年生を対象に、楽しみながら学ぶことができ、介護職に魅力を感じていただくことを目的としています。ツアー内容は、実際に施設を訪れることで介護の現場を感じてもらい、仕事としての介護をイメージしてもらえるように介護施設の見学・体験会と、レジャースポットでの娯楽を組み合わせることで気軽に参加申込みしていただけるような仕組みづくりもしています。

みくらの里ツアーの様子

みくらの里で2回、エクレシア南伊豆で1回、ツアーで訪れていただきました。

エクレシア南伊豆ツアーの様子

ふじのくにケアフェスタへの出展
（静岡県主催）

静岡県主催の『ふじのくにケアフェスタ』は、高校生や大学生、地域の方々等に介護に感心を持ってもらうため、“介護”のイメージアップに繋がる様々な催しが詰まったイベントで、2018年（平成30年）は来場者数6,000人を超えました。毎年秋に開催され、介護技術コンテストやケアごはんアイデアコンクール、介護男子総選挙−ケアDANコンテスト−、今話題の福祉と縁ある芸能人によるお笑い・歌・トークショー、介護の未来ナビゲーターブース、地元高校生の書道パフォーマンス等々介護の魅力満載の内容となっています。梓友会も例年出展させていただき、介護の魅力発信に努めております。2018年（平成30年）には、太陽の里ケアパートナーの和泉文俊が介護技術コンテスト入浴（重度）部門に参加し、最優秀賞を受賞しました。

介護技術コンテスト最優秀賞受賞

介護の未来ナビゲーター

静岡県障害者就労応援団登録

2014年（平成26年）6月20日、社会福祉法人梓友会は、静岡県障害者就労応援団に登録いたしました。（※2018年（平成30年）12月6日時点登録数205社）

静岡県障害者就労応援団登録証

応援内容は、以下の通りです。

◎職場見学を希望する事業所の受け入れ
◎障害者雇用を検討している事業所に対する助言
◎職場実習を希望する障害者就労支援機関の障害のある人の受け入れ
◎授産製品の事業所内等での展示・頒布会の開催

『介護男子スタディーズ』製作への参加

2015年（平成27年）9月1日発行の『介護男子スタディーズ』。発行元は『介護男子スタディーズプロジェクト』。本書は、これからの介護の現場を担うであろう「介護男子」に焦点を当てています。“介護”といえば女性の職場というイメージが色濃く残ります。実際、日本で介護に従事する人のうち、およそ8割が女性です。そんな中で、「介護の現場で快活に働く男性の姿を発信することが、読者一人ひとりの“介護”に対する既成概念や印象等を変えるきっかけとなるのではないか」そんな想いに共感し、当法人も『介護男子スタディーズ』製作へ参加しました。『介護男子スタディーズ』は、各メディアに取り上げられ大きな話題を呼び、その結果、当初の目論見通り、世間の抱く“介護”イメージ払拭へ一石を投じています。

介護男子スタディーズ

年々増加する介護ニーズに対応するには、人材を継続的に確保していくことが最も重要な課題の一つです。今回のような活動を通して、業界のイメージアップや新たな人材の獲得へ繋げていけるよう、引き続き様々な活動を行なっていきます。

介護男子

「生活困窮者自立支援に係る連携・協働協定」調印式

2016年（平成28年）1月21日、社会福祉法人梓友会、賀茂地区社会福祉協議会（1市5町）及び県社会福祉協議会との「生活困窮者自立支援に係る連携・協働協定」調印式を執り行いました。

2015年（平成27年）4月に施行された、生活困窮者自立支援法に基づく自立相談支援をより有機的に機能させるためです。自立相談支援とは、生

活に困りごとや不安を抱えている方の相談を受け、どのような支援が必要かを共に考えることで、具体的な支援プランを作成し、寄り添いながら自立に向けた支援を実施することです。

協定終了後には、研修を通し、改めて生活困窮者自立支援法の法人内理解を徹底しました。

※当時、社会福祉法人と自立相談支援機関の連携協定は県内初でした。

「生活困窮者自立支援に係る連携・協働協定」調印式

社会福祉法人梓友会 理事長　川島 優幸
社会福祉法人下田市社会福祉協議会 会長　髙橋 忍
社会福祉法人東伊豆町社会福祉協議会 会長　平井 正晴
社会福祉法人河津町社会福祉協議会 会長　菊池 利定
社会福祉法人南伊豆町社会福祉協議会 会長　渡邊 芳男
社会福祉法人松崎町社会福祉協議会　会長　堀谷 八千代
社会福祉法人西伊豆町社会福祉協議会 会長　柏木 昇
社会福祉法人静岡県社会福祉協議会 会長　神原 啓文
※2016年（平成28年）1月当時

協定書に署名する川島理事長（中央）＝下田市吉佐美のみくらの里

〈協定内容の主なポイント〉

1. 生活困窮者の早期把握や見守りに関する協働
福祉サービスを展開する中で把握した生活困窮者に関する情報について、社会福祉協議会が受託している自立相談機関への繋ぎを行う。

2. 社会福祉施設での就労体験・中間的就労の取組
直ちに一般就労を目指すことが困難な人に対して、支援付き就業機会の場の提供などを行う。

3. 就労にあたっての必要な資器材の貸与
就労もしくは就労活動に必要となる資機材等を提供できる場合において、一定期間貸与を行う。

4. 生活困窮者自立支援のために必要な事柄に関する協議・連絡会
自立相談支援機関と賀茂地区における生活困窮者支援のための協議・連絡会の場を定期的に開催する。

静岡県災害福祉広域支援ネットワーク設置経過

平成25年度

全国経営協「災害福祉支援ネットワーク構築モデル事業」を県経営協として申請
官民協働による「静岡県災害福祉支援ネットワーク会議（仮称）」の立ち上げについて検討開始
ネットワーク会議を開催し、参加団体の現状と課題を共有
平成26年2月：第1回災害福祉支援ネットワーク会議開催
事業実施主体の静岡県経営協より川島副会長（当法人理事長川島優幸）出席

平成26年度

ネットワーク会議の継続及び先進県視察の実施
平成26年12月：先進県視察（岩手県・福島県）
<視察内容>
○岩手県災害福祉広域支援推進機構
組織体制、チーム派遣システムについて
○福島県老人福祉施設協議会
協定に基づく広域避難訓練について
平成27年3月：第2回災害福祉支援ネットワーク会議開催

平成27年度

経営協モデルで検討経緯を得て、静岡県健康福祉部が本事業を重点施策として位置付け、ネットワーク構築と災害派遣福祉チーム設置に向けて、県が県社協に事業を委託
平成27年10月：第1回静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成27年12月：第2回静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成28年3月：第3回静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成28年3月：災害時要配慮者支援セミナー開催
川島副会長 事業説明「災害派遣福祉チーム（DCAT）構想について」
パネリスト登壇「災害に備えた社会福祉施設の相互支援体制の構築を考える」

平成28年度

活動マニュアル及び研修カリキュラムの作成
平成28年11月：静岡県災害福祉広域支援ネットワーク設置要綱及び運営要領を制定
平成28年12月：すべてのネットワーク構成団体から加入同意書が提出され、ネットワークが正式に設置
平成29年1月：第1回静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成29年3月：第2回静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成29年3月：静岡県とネットワークとの間で「災害時における福祉人材の派遣協力等に関する協定」締結式開催

平成29年度

登録員の養成開始
静岡DCAT紹介パンフレット作成
平成29年9月：第1回静岡DCAT登録員養成研修開催
47名養成
平成30年1月：平成29年度静岡県災害福祉広域支援ネットワーク会議開催
平成30年1月：県経営協が移送支援用具を静岡DCAT登録員が所属する県内10施設に無償貸与を実施。梓の里へ貸与
平成30年2月：第2回静岡DCAT登録員養成研修開催
49名養成

平成30年度

登録員の養成及び平常時の支援活動実施
岡山県倉敷市真備町へ派遣
平成30年8月：第1回静岡DCAT登録員養成研修開催
47名養成
平成30年9月：第2回静岡DCAT登録員養成研修開催
49名養成

静岡DCATへの参加

静岡DCATとは、静岡県災害福祉広域支援ネットワークの福祉関係団体に所属する福祉施設等の職員で、所定の研修を修了した者の中から、1チーム5名程度で編成する福祉専門職チームです。災害発生後、被災した市町から静岡県に派遣要請があると、ネットワーク事務局がチームを編成して被災地へ派遣します。被災した市町が指定する避難所や福祉避難所で支援活動を行います。

※静岡県災害福祉広域支援ネットワーク静岡DCAT作成パンフレットより

梓の里……1名（1期生）
みなとの園……1名（2期生）
太陽の里……1名（1期生）
みくらの里……1名（4期生）
エクレシア南伊豆……1名（2期生）
合計5名登録

移送訓練の様子

ISO9001の継続

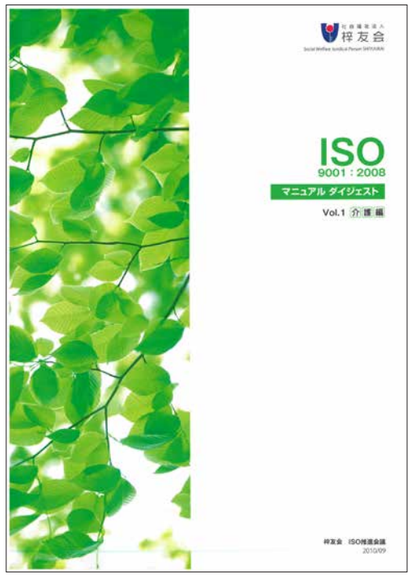
梓友会は2004年（平成16年）3月4日、ISO9001を取得しました。ISOとはスイスのジュネーブに本部を置く国際標準化機構（International=国際的な、Organization=組　織、for　Stand-ardization=標準化）のことで、その頭文字を並べたものです。なぜIOSではなく並びが変わってISOなのか。それはISOがギリシャ語の「均等」「均質」を意味する「ISOS」という言葉に起源を求めたからです。

ISO9001導入の目的としては「仕事の見える化による業務継承の円滑化」「個人ファイルの共通化」「ノウハウの資産化」「顧客満足の実現」「新人の即戦力化」「リスクマネジメント」などが挙げられます。梓友会は、ISO9001にて上記目的を実現するため導入を決意し、PDCAサイクルに準じた手順のマニュアル化を推進しました。ISO9001の継続的推進には、内部監査員の養成と新人教育を含めた全職員による参画、そして事務局の推進が必要不可欠です。

ISO9001の外部機関による審査は3年に1度の更新審査と1年に1度の定期審査しかありません。それを埋めるのは梓友会の職員が独自に行う内部監査であり、これもまたISO9001が有効に機能する仕組みの一つと言えます。

ISO9001に規格要求事項はありますが、正解はありません。ISO9001というツールを組織の特色に合わせて活用し、審査機関（日本検査キューエイ株式会社=JICQA）の審査を受け、時には議論を戦わせながら、管理責任者と現場スタッフが一致協力し、梓友会は常に一人でも多くの顧客満足を得られるように努めています。

※2019年（平成31年）1月30日～2月1日にかけて第5回更新審査兼変更審査実施



教育・研修

社会福祉法人のサービスに求められる要求レベルが時代とともに高まる中で、法人職員の教育と研修に力を入れています。福祉サービス、コミュニケーション、法律や制度への対応など様々な角度から、時代やニーズに適したカリキュラムを設定し実施しています。

新任職員研修

新卒職員に向け、社会人としての心構えやスキルの研修を実施

・内定者フォローアップ研修
・新任職員オリエンテーション
・新任職員技術研修
・OJT教育 ※各施設にて実施
・フォローアップ研修
・スキルチェック　他

新任職員研修の様子

新任職員技術研修

法人オリエンテーション

入職した職員に対し、在籍法人職員が講師を担い、各施設でのオリエンテーション以外に法人職員として理解していただきたい基礎講義を実施

『法人概要・理念について』、『安全管理について』、『情報管理』『衛生管理』　他

施設内研修

各施設にて研修委員を中心に、様々なテーマで研修会を企画・実施

以下、一部をご紹介

『基本方針と事業計画』、『倫理及び法令順守』、『感染症対策』、『認知症について』、『身体拘束防止について』

また、時には外部講師を招聘し、本部主催で“今”職員に学んでほしい講義・研修会を設定・開催

以下、一部をご紹介

『報酬改定について』、『コミュニケーションスキル向上による職場の活性化』、『ストレスケアについて』、『認知症ケアについて』、『コーチング研修』

・合同発表会

施設職員が働きながら感じた課題等について、研究あるいは検証し全施設合同の発表会を開催

発表テーマ

『ショートステイ利用のご利用者を施設で看取る』、『ロボットの導入について』、『お一人暮らしを支えるためにデイサービスでできること』、『電気代削減への取り組み』　他

合同発表会の様子

育成担当者研修の様子

その他にも、下記の研修等を開催

・リーダー研修　・管理職研修
・育成担当者研修
・介護福祉士受験対策講座（職員だけでなく外部の方々も受講可能）

外部研修としては、県内外での研修や海外研修への参加

海外研修

学習療法

学習療法：みくらの里

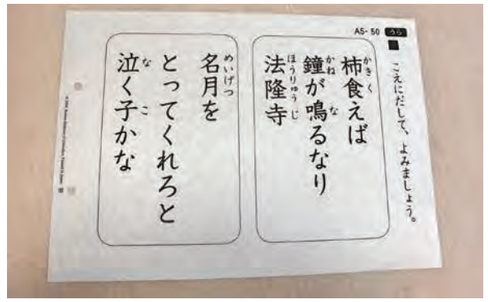
介護老人福祉施設みくらの里では、2006年（平成18年）11月より認知症の予防および維持・改善を目的とする「学習療法」を導入しております。学習療法は簡単な計算と音読を中心とした読み書きを、当施設の職員と無理なく短時間で実施する療法です。参加されているご利用者のご家族様からも「表情が明るくなった」など喜びの声をいただいております。

これまで認知症に伴う高齢者のコミュニケーション能力や身辺自立能力の衰えを改善させる療法が数多く提唱され、実践されてきました。しかし、いずれも経験則によるもので、残念ながら科学的、客観的に効果が証明されたものはありませんでした。

そのような中、日本における脳科学の第一人者である東北大学：川島隆太教授は、認知症の症状の多くが大脳の前頭前野と呼ばれる部分の働きと深い関係があることに着目しました。川島教授をリーダーとする共同研究チームによる実証研究の結果、読み書きや簡単な計算とコミュニケーションが最も前頭前野を活性化させることを発見しました。

実際の効果を科学的に確認するため、2001年（平成13年）から福岡県大川市の高齢者介護施設で認知症高齢者の方々に読み書き・計算の学習をしていただきました。さらに、2003年（平成15年）からは宮城県仙台市の施設でも同様の実証研究が行われました。

いずれの施設でも、表情が穏やかになった、



会話ができるようになった、オムツがいらなくなったなどの変化が多数見られ、そして、脳機能の改善を診る検査の結果からは、科学的に効果を証明するデータが得られました。

当施設が導入している「学習療法」は、川島教授の共同研究者である、くもん学習療法センターが開発した教材、支援法を用いるものです。同センターによる研修を受講した当施設の担当スタッフが正しい方法で実施させていただきますので、安心してご利用いただいております。

また、「学習療法」の時間は施設職員やご利用者同士の団欒の場でもあり、会話を楽しんでいらっしゃる方も多いです。その他、毎週木曜日にはお菓子の時間を設け、人気を集めています。会話がはずむことでご利用者の新たな一面を垣間見ることもでき、さらには、ご利用者の変化にも気づくきっかけにも繋がり、現在、みくらの里になくてはならない支援方法の一つとなっております。

みくらの里が目指すこと

「認知症の予防および維持・改善」だけでなく、「学習の時間を楽しく過ごしていただくことで、学習者の皆さまの笑顔をさらに引き出す」ことです。

今後は、実践モデル施設の集いで紹介された「学習療法を活かすためのサイクル」を活用

1）目標シートの導入
2）個別の学習支援方法の徹底
3）学習療法だよりの発行
4）学習コーナーの環境整備

以上の4つの活動に取り組むことで、個々に合わせた支援の質を高め、「学習療法を楽しんでもらえる状態」の実現を目指していきます。

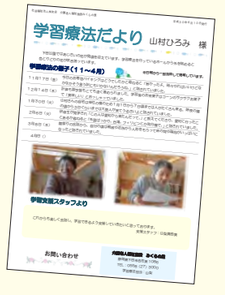
導入の効果

ユニットではあまりお話しされなかったご利用者A様について「教材の話題について話す」などの発語を促す目標を設定したところ、表情が明るくなり、大きな声で話されるようになりました。さらには、昔の話も聞かせていただくようになりました。

また、「折り紙」が好きなご利用者B様には折り紙をする時間を確保できるように「計算教材を速くやる」などの目標を設定。毎回折り紙を持参され、作品をスタッフにプレゼントしてくださり、学習以外のことにも意欲が出てくるようになりました。

学習療法だよりの発行

ご利用者ご家族向けに年2回学習療法だよりを発行しています。学習者ごとに内容が異なるもので、記事は日報から抜粋して学習療法の様子を掲載、最後には支援スタッフからのメッセージを記入しています。ご家族様に学習中の様子を見ていただく機会は稀です。施設の取り組みと学習者様の努力や変化が伝わることでご家族からの信頼を得ることに繋げています。



ミッケルアート

ミッケルアートとは

回想法に用いるコミュニケーションツールで、認知症予防や認知症の周辺症状の改善が期待できます。2010年(平成22年)に静岡大学発ベンチャー企業株式会社スプレーアートイグジン代表取締役橋口論氏が開発し、現在、映像版･絵画版･壁画版･キッズ版も誕生しています。

2012年（平成24年)には、東京医科歯科大学との共同研究を通して、脳機能の活性化、眼球運動の促進、発語数の増加、周辺症状の緩和効果が明らかとなり、これらの研究は、認知症ケアに貢献することが高く評価され、2013年（平成25年）に日本認知症ケア学会で石崎賞、2014年（平成26年)に日本認知症予防学会で浦上賞を受賞しております。

また、「ミッケルアート」には、「見つけるアート」という意味が込められており、昔懐かしい絵のなかに、馴染みある風景や生活品などが散りばめられており、それを見つけながら、施設職員と利用者間での会話をふくらますことができます。

ミッケルアートの裏面には、職員からの問いかけの例が記されているため、施設でもスムーズに導入することができ、現在ミッケルアートを利用している施設は200事業所以上となっています。

※ミッケルアートの絵は1,000人以上の高齢者にアンケートを取ることや、医師や看護師･作業療法士･介護士等への聞き取り調査をもとに作成されています。

梓友会ミッケルアート研修実施

2018年（平成30年)6月26日（火）に、介護老人福祉施設エクレシア南伊豆にて≪ミッケルアート研修≫を実施いたしました。

本研修は、ミッケルアートを開発された静岡大学発のベンチャー企業・株式会社スプレーアートイグジン代表取締役橋口論様へ、ミッケルアートの導入を検討している旨をご相談させていただいたことをきっかけに実現しました。講師は、AMOR FATI（アモールファティ)代表兼ミッケルアート認定講師の羽吹さゆり先生です。全国各地で介護技術、コミュニケーションや新人研修など介護に関して多岐に渡る研修実績のある方です。

2時間に及ぶ研修には、法人各施設から総勢およそ70名のスタッフが参加し、新たな認知症ケアの開拓と、導入に先駆けたロールプレイにより、参加スタッフはミッケルアートについて見識を深めることができました。中でもスタッフの興味を惹いたのは、改善されやすい認知症の周辺症状についてです。『無気力』『昼夜逆転』『介護拒否』など、自らのケア環境を振り返り、どのように活かすことができるのか、真剣に耳を傾けていました。

研修終了後、スタッフからは「自然と会話がうまれるのは魅力的」「自分自身で体験して会話がはずみ楽しかった」「利用者同士のコミュニケーションにつながり、良い刺激になりそう」「話題の共通性を見つけるきっかけが期待できる」などの前向きな意見が多く、ミッケルアート導入に向け実りある研修となりました。

利用者のコメント

ミッケルアートを始めるようになり、仲間同士の会話が弾むようになりました。

今までは、よく顔を合わせてはいますが、全く話さない方もいました。ですが、ミッケルアートを通して、同じ時代を過ごしてきた仲間と懐かしい絵を見ながら、「あの時はこうだったよね」「うちはこうだったよ」など思い出話をすることで、とても有意義な時間を過ごしています。

昔のことを思い出して、みんなが共通の懐かしい話しながら過ごすことが、今の楽しみです。

最近では拡大鏡を家から持ってきて参加しています。間違い探しのようにゲーム感覚でできるのがとても楽しいです。現代ではなかなか見ない光景だったり、物だったり、懐かしさがよみがえります。さらに、普段あまり話をしない人からもいろいろな話が聴けるので、とても楽しいです。

ミッケルアート：小規模多機能型居宅介護みくらの里

小規模多機能型居宅介護みくらの里では、ミッケルアート体験版を2018年（平成30年)7月14日から8月18日の1ヶ月間利用し、2018年（平成30年)9月からミッケルアートを導入しました。

現在、日々のアクティビティーや、学生の職場体験時にミッケルアートを活用し、利用者の数値的な評価を進めております。

30年の想いとともに これまでを振り返る

座談会：2018年（平成30年）8月6日

2018年（平成30年）8月、オープンして間もないエクレシア南伊豆に、創業時から法人を支える職員と法人の未来を担う若手職員が集まり、これまでの歩みを語り合う座談会が開催されました。皆様のおかげでここまで成長できた梓友会ですが、すべてが順風満帆ではなかったこと、今の環境を作り上げてきた先人の想いなど、たくさんの想いに触れることができました。

創業と「梓の里」オープン

川島　梓友会は1989年（平成元年）7月にオープンしましたね。
初代理事長は熊本出身の永田雅夫氏です。市内で病院経営をしていましたので、医療の色彩が強い法人というのがそもそもの成り立ちでした。
下田市の稲梓という地区にあったので、その一字をいただいて、「梓の友の会」から「梓友会」となりました。梓は弓の材料となる木で、将来的にしなやかで強い法人になってほしいという、当時の理事長の考えだったようですよ。
もともと地域医療に長年携わっていたドクターでしたから、地域に対する想いが強く、なにか地域に恩返しをしたいという志で、当時伊豆半島にはまだなかった特別養護老人ホームを建てようと社会福祉法人を作りました。
実は、私は立ち上げのために札幌から3年契約で来ていただけなんです。
長尾　そうだったんですね！
川島　いつの間にか30年経ってしまいましたね。では、立ち上げ時期の印象深い出来事があればどうぞ。
原田　私は自分の面接についてですね。7月オープンのための面接で、季節は春でした。福祉系の大学を出ましたが老人福祉については経験がなく、当時は実家の食堂を手伝っていました。介護に関しては全くの素人です。
結婚したばかりで、就職したいという思いだったところ、下田市民文化会館会議室で梓友会の面接を受けました。面接官は川島理事長で、私は面接などしたことがなかったので、とても緊張したのを覚えています。
川島　この地域では初めての介護施設の立ち上げということで、採用面接にも立ち合っていました。「介護からやりたい」と強く主張していた原田さんはとても印象に残っていますよ。
一方で、その後の教育研修が悩みでした。そもそも介護施設というものを知っている人間がいませんでしたから・・・。ただ、僕はもともと札幌の社会福祉法人にいたので、そちらのやりかたを梓友会で再現し、どうにか「梓の里」オープンに至ることができました。
経営や運営には「人」、「物」、「情報」、「資金」など色々と必要なものがありますが、オープン直後は何もかもが足りない状況でした。その中で当時20数名だった職員たちみんなで工夫を重ねました。また、設計に携わった先生が特養をあまり知らず、実際働くとなると色々な不都合が出てきましたね（笑
細田　私は、働きながら子育てする為に条件を考えなければいけないということを面接のときにお話ししましたよ。
専業主婦だったので、知識がないことが一番大変でした。当時は原田施設長と一緒に夜勤に入ったりしていましたよね。
原田　そうだね。
細田　それと当時施設長だった川島理事長が月に一度、介護福祉士の受験に向けて勉強会を開催していましたね。専門用語ばかりで、それを理解しながら学ぶことがとても難しかったです。
川島　先にオープンしていた「城ヶ崎いこいの里」の理事長にお願いして職員の事前研修をしていただいていました。職員は下田から伊東まで研修に通っていましたね。

座談会
登場人物紹介

理事長
川島　優幸
所属　法人本部
入職年　1989 年
出身地　北海道札幌市

施設長
原田　昌志
所属　みなとの園
入職年　1989 年
出身地　静岡県下田市

介護支援専門員
細田　千秋
所属　梓の里
入職年　1989 年
出身地　静岡県下田市

経理課主任
長尾　穂高
所属　法人本部
入職年　2011 年
出身地　愛知県安城市

介護ユニットリーダー
柏木　大行
所属　エクレシア南伊豆
入職年　2011 年
出身地　千葉県千葉市

原田　泊まり込みの人もいましたよね。一週間の泊まり込みとか。

細田　私も泊まり込みを経験させていただきました。

柏木　へえ〜！スゴイですね！

川島　一定期間研修を経験したなかで、今度はご利用者を迎え入れる段階に進んだのですが、それがまた難題で・・・。「そもそもこの圏域には、入居対象のご利用者が少ないのではないか」という疑問が湧き始めました。何か行動を起こさなければと、各行政機関や医療機関へ働きかけに回りましたよ。そのころはまだ、高齢者ケアを外部に委ねるという形が多くなかったですから。当時の民生委員の方々からは「そう簡単にはいかないよ」という厳しいご指摘もいただきました。老人ホームに入居することがまれな時代でしたからね。それでも我々は、ご利用者へ最善のケアを提供できる施設づくりを目標としてみんなで努力をしていきました。当時の理事長がドクターでしたので、夜間の非常時には理事長自ら稲梓地区まで足を運んでいただけるので、その点は非常に安心できましたよ。

柏木　それは安心ですね。

川島　そういえば、当時の職員は稲取、南伊豆、松崎、色々な地区から来ていましたね。

原田　職員は総勢22名ですかね。その内介護職員は15 〜 16名だったと思います。中には学校を出ている人も何人かいましたね。ただ、経験がないので、研修や実習をやっていただいたという記憶があります。

細田　大変な時はみんなで考えながら解決していったので、とてもチームワークはよかったと思います。思いやりもありましたし、人の動きを見て自分も学ぶという状況でしたよね。

長尾　当時は若い職員が多かったんですか？

細田　そうですね。一番上でも45歳ぐらいでしたよ。

川島　大学で関東圏域などの都会に出て行っても、戻れば梓友会で勤めてくれます。
下田市内にいる人たちはうちの施設を見て「若いですね、いいですね。」と言ってくれたのがとても嬉しかったですよ。

ターニングポイントは「梓の里」の増床

原田　私は梓友会のターニングポイントは「梓の里」増床だと思っています。「梓の里」開設当時は入居の方が集まるのかなぁと不安でしたが、世の中は高齢化が進むことで待機者が増え、増床してほしいという話がでてきました。
増床したのが1995年（平成7年）11月。特養は50床から30床増やし80床、ショートは4床から10床増やしました。これがとても大変でした。

川島　そうですね。
普通は他の土地に新たに建て替えるとか色々な選択肢があるのだけれど、財政的にもそういった方法が難しかったので、50床の建物に居ながら工事をしましたよ。

柏木　繋がっていますよね…。古い部分と新しい部分が。

川島　だから、50床の上に乗せていくという工事をしたんです。
それは私も経験したことがなく、当時の行政の方にもいろいろご心配をおかけしました。
入居スペースにまで工事の音が聞こえるわけで、当然、今では考えられませんよね。

長尾　行政は協力的だったんですか？

川島　協力的でしたよ。
今では騒音問題や安全性において、おそらく無理でしょうね。
あれが分岐点だというのは確かにそうです。そこを乗り越えると収支関係も余裕ができました。待機者も増えていましたので増床を終えて一段落しましたよ、本当に。

細田　2000年（平成12年）の介護保険制度が入るころに丁度デイサービスもできましたね。

川島　基本的に制度、政策的にもそういう方向にニーズがあれば、我々も展開しなくてはなりませんでしたね。

柏木　その頃は開設から数年経っていますが、職員数は十分だったんですか？

細田　足りないということはありませんでしたね。

川島　そうですね。世間的にも今ほど人材不足という時代ではなかったですからね。

柏木　今を考えると想像できないな〜。

長尾　そうだね。それからはどうなったんですか？

川島　松崎町と南伊豆町からの要請があって「みなとの園」を開設する運びとなって、今思えばそこから南伊豆町との関係が生まれたんですよね。

長尾　へぇ〜、じゃあ措置制度から介護保険制度に変わったときはどうだったんですか？

川島　請求事務は全て変わるし、うちがある程度変化に対応できたのは割と早めにWindows等を導入してきたからでしょうかね。ただ、措置費が今のように、請求書を個人にあげるのではなく、利用者1名に対して月額の単価が決まっていて、それを請求すれば良いだけでしたね。介護保険制度では非常に細かくなり、まず制度の理解をしなければいけないし、請求のいろいろな単価の理解も必要となったので、事務系の職員も増やし、色々なシステムも導入していかなければなりませんでした。新たな流れの変化を強く感じましたよ。節目節目で大きく制度は変わっていきますのでいかに対応できるか、という部分が求められますね。

原田　本当にそう思います。「みなとの園」ができたぐらいの時期から請求を含めやり方がすべて変わりましたし、ケアプランという言葉もそこから出てきましたね。

細田　そうですね。

原田　介護保険ができる前は、ワープロを導入していましたが、介護保険が始まるときにはもうパソコンでなければダメだということで、「全員がパソコンを使えるようになりなさい」という指示が理事長からでましたよね。でもみんなパソコンなんて使ったことがないわけですよ。（苦笑

長尾　教えてくれる先輩もいないわけですよね。

細田　ケアプランも全部手書きではいけないという事になりましたよ。理事長が「ケアマネはパソコンも出来なきゃだめ」っておっしゃった、それが印象深すぎで…。（笑

川島　Windowsを入れた時点でITは必ず進化していくって思ったんですよ、素人ながらですが。携帯が今のスマホに変わるなんてことはさすがに思っていませんでしたが、パソコンを使いはじめて、そういった兆しは非常に感じていました。我々の仕事のやり方も、10年後はまるっきり変わっているのだろうと思っていました。

長尾　理事長の予言は的中していますね。

川島　介護福祉士だとかケアマネージャーだとか、色々な資格制度が導入され、介護保険とIT化両方の流れの中で、変化する【働き方】の内容がどうなっていくのか、そのためには、時代の流れに敏感であり、常に新しいモノやコトを取り入れていくという決断が必要だと考えました。おそらく、賀茂圏域内で一番早く個人に一台ずつパソコンを渡した法人だろうと思っていますよ。

細田　理事長は先見の明があり、当時も介護保

険が始まる2～3年前から介護保険について講義をされていたんです。

川島　先を読み取り入れる。とにかく貪欲に学んでいくことがベターだと判断していたのは事実ですね。

原田　そのおかげで今があるということですね。当時理事長の言葉で強く印象に残っているのは「根拠のあるケアをしなさい。エビデンスのある科学的なケアをしなさい。」と言われたことですね。苦労しましたが、例えば「食事介助に何分かかる」とか「入浴に何分かかる」などを記録して、それによって効率的かつ良質なケアを追究していった記憶にあります。これは後に導入される介護保険と全く同じ考え方なんですよね。

川島　それはタイムスタディといわれるもので、いわゆる特別養護老人ホームって世間的には良いことをしていると評価が高いけれど、当時はそれを説明する術がなかったんですよね。質的・量的なものを計りエビデンスをとる事は、あまり重要視をされていませんでした。今でこそ資格制度があり、根拠のある介護エビデンスが必須ですが、当時は処遇という言葉で片付けられていましたよね。懐かしいです。

「みなとの園」の思い出

川島　世間では在宅福祉へのシフトが政策的にも行われていました。ですので、「みなとの園」では、ホームヘルパーや配食サービスを行いました。ですが、職員を採用して外に出すという事が、とても責任が伴うことだと思ったんです。施設の中で行われていることを外に出すだけなので簡単ではないか、などと言われましたが、違います。今度は一対一でケアをするサービスに繋がっていきますので、いい人はいいけれど、もちろん酷評されることだってありました。そういうことにならないように質を高めなくてはいけないと思いました。「みなとの園」開設からは、かなり職員研修に力を入れ始め、外部の講師を招くことも多くなっていきました。配食サービスには安否確認が必ずついて回るので、ある程度の介護知識がないとできないということもあり、その辺りはかなり苦労した覚えがありますね。

原田　確かにそうでしたね。それも印象深いですが、私にとっては建物のつくりが印象的でしたよ。たぶん自分たちは「梓の里」しか見ていなかったので、全く別のものに見えました。当時はお洒落な建物だなあと思ったものだよ。

川島　長尾君とか柏木君は「みなとの園」を見ても従来型の施設に見えるだろうね。なにも新しくないよって思うだろうけど、あの年代の施設としては、結構斬新な建物だっていう評価を得ていたんだよ。

原田　当時、駐車場から施設を見るととても迫力がありましたね。

建物で言えば、「梓の里」は、回廊式でしたね。

川島　今では、回廊式というのは取り入れないと思うけれど、あの当時はようやく認知症（その前の名称で痴呆性老人）というのが取り沙汰されて、ある現場実践もされている先生方が回廊式でぐるっと回ることが認知症に効果があるんだよなんて、そういう話があり、多く取り入れられた建物のつくりだったですよ。それが「梓の里」ですね。「みなとの園」に移ってからは、管理部門を全部下の階に移しました。どうしてかというと、「みなとの園」の土地の形状が二段に分かれていて、下は半地下になるんです。これはあまり利用者のためには使えないだろうということで、利用者は上、在宅のデイサービスと管理部門は一階という風に分けた作りになりました。機能的と言えば非常に機能的な作りでしたね。

太陽の里では圏域初の女性施設長就任

川島　その次に出来たのが「太陽の里」です。実はオープンしてすぐに配食サービスをやっていました。その時たまたま板前さんを採用しまして、そうしたらとても凝った料理が大変好評で、こんな美味しいものは食べたことがないって、地元の新聞にも出たほどですよ。その板前さんはもう年配になり辞められて、それ以降配食サービスは外部に委託するようになりました。外部委託のきっかけは、O-157など様々な食中毒が世間的にも話題になるような時代背景ですかね。やはりHACCPに乗っ取ったしっかりとした食事提供をするためにはプロに任せた方がいいだろうという法人の判断でしたね。

長尾　そんなことがあったんですね。・・・そういえば「太陽の里」では、初の女性の施設長が就任しましたよね。

川島　そうそう、細田さんが当時この圏域では初の女性施設長でしたね。当初周辺市町村でも女性の方が幹部に登用されるということは少なかった時期でしたから、素晴らしいと評価をいただきましたよ。今、うちも管理者5名～6名いるわけで、本当によく思うのは、就任した施設長のカラーが数年すると色濃く出てくるということですね。彼女が管理者を担っているときは、良く地域の方の写真展や絵画展を開催していました。それは今でも続いていて、西伊豆町出身ではない管理者でした

が、本当に地域に溶け込むのが上手だったなぁと思っていますよ。

原田　女性ならではの苦労した事とかあるんじゃないですか？

細田　それはもう・・・、理事長が初の女性施設長ということで気を遣ってくださり何回も「何かないか、なかったか」と連絡を下さいましたね。苦労は確かにありました。

原田　やっぱり色々ありますよね。

川島　私が今でも覚えているのは自治体から、「在宅サービスをやってほしい」と、「できることがあれば町の場所を貸すから」と言っていただいた事で、「太陽の里」のデイサービスは町の建物の中に入っているんです。それほど好意的であり、とても理解のある自治体でしたので、我々もやりやすかったです。

あとはやっぱり、人柄の良い細田さんが管理者になっていただいたおかげで、スムーズに西伊豆町の病院と連携が図れたのも良かったですね。施設長の細田さん自身が2級ヘルパー研修会や老人クラブの寄り合い所など色々なところへ赴き講演等をしてくださったのも印象的です。今ではなくてはならないと言われるぐらいの、小粒だけれども山椒のように効く、そういう施設に成長しましたから。やはり実践を積み重ねていき、地域の理解を得ていくという事が大切なんだと改めて実感させてもらった、そんな施設ですね。

「みくらの里」オープン

柏木　僕らの知っている、「みくらの里」がオープンするときはどうだったんですか？

川島　「みくらの里」オープン当時、従来型の施設からユニットケアへの転換を厚生労働省が政策で進めており、伊豆半島にはまだ一つもユニットケアを取り入れている施設がないという事でうちの法人でやりましょう、という運びになりましたね。木の材質を活かしたあたたかみのあるユニットケアの施設をつくりました。

特徴としては、100名ほどの人が入れる地域交流ホールを併設したことです。それにより、地域との交流イベントや、施設内行事、職員研修等もさらに実りあるものとなりました。

職員研修の観点からは、自分が行ったケアについて説明することができ、文章に記録を残す事を学ばせたいという想いがありましたので、ISOをJICQAから取得し、いまだに続いています。そう言った意味では、「みくらの里」は職員の記録類整備という事に関しても充実が図れた施設なのかなと思っています。

また、今となってはユニットケア推進協から研修施設の認定を受けたりと、10数年やってきた結果が実を結んできているのではないかと実感しています。

長尾　やってきたことが結果になるのは、とても嬉しいことですよね。

私は、もともと経済学を学んでいて、就職活動を通じて偶然「みくらの里」に来る運びとなりました。私自身が福祉施設と接するのはココが初めてでした。それまではもう亡くなってしまった祖母が介護状態になったとき、病院で看取ったことがある程度ですね。こういう福祉施設には入ったことがなくて、こんなに綺麗なところがあるのかという驚きが第一印象でした。

川島　清潔感があるとか、きれいだとよく言われます。とてもありがたいですね。

長尾　あと、このような施設には珍しく消毒液のアルコールの匂いがせず、なんて表現すればいいのか…普通の匂いなんです。

柏木君は福祉学系の大学を出て、学生の時からこういった福祉施設に関りがあったんですよね？

柏木　そうですね、ぼくは社会福祉士を目指して福祉学科を専攻していました。高齢分野に進もうと決めていたので、こういった福祉施設で働くことは決めていましたね。実際に梓友会に内定いただくまで色々と就職活動をしていました。もちろん内定をいただいた企業は他にもありましたが、たまたま東京青山のビルで実施していた梓友会の説明会に行ったんです。

川島　あぁ、ツインタワーの。

柏木　そうです。その時の川島理事長のお話に「挑戦」という言葉と、新しいことをやり始めましたとおっしゃっていて、当時【福祉=保守的】だという僕の固定概念があったんですよ。でもこの法人はすごいなって、常に業界の先に行こうとしているし、学生ながらおもしろそうだなあと強く想いましたね。実際に施設へ訪問した時に事務所と現場職員の方々が本当に距離感が近くて、建物ももちろんそうですが、梓友会の人たちがあったかいんだなと感じ、ここで僕もその一員になって一緒に働くと決断しました。

細田　私の孫が面接で施設に来た時も、施設に入った瞬間すごく雰囲気がよかったって言うんですよ。それで受付の職員達もみんなすごく明るかったって。孫と話したら、「じゃあ、おばあちゃんここに決めるね」って、「みくらの里」の職員がすごく明るくて話しやすい親しみ感があったみたいで、それで入職を決めたみたい。

柏木　そうなんですよね、今のボランティアルームで、お話をさせてもらった理事長と職員の掛け合いというか、お話がすごく面白くて、いいところだなあと漠然と思ったんです。

細田　私の入職時、理事長は雲の上の人で話したらいけない存在みたいなイメージでしたね。

柏木　そうです、そうです。

細田　今は全然、一緒になって話をしてくれるし、聞いてくれますよね。新しい人も外から来た人も理事長の親しみやすい雰囲気を見て、いいところだなと思ったのかもしれないですね。

原田　「みくらの里」開設時、法人としての経験が、17年経ってるわけですよね。それが自ずと、法人自体が理事長含め全職員で少しずつ成長しているんだなって思いますね。

でも「みくらの里」といえばやっぱり、「みくらの里まつり」ですかね！

川島　年にいっぺんの！開設して2年目くらいからかな。

長尾　毎年たくさんの方が来られていますよね。

原田　立地もいいし、下手すると下田の中では一大イベントみたいな。（笑

柏木　そうですね。チラシを配る時に、「ああ、今年もやってくれるんだねー」とか、「じゃあこの日は予定空けよう」とか言われるので、嬉しいですね。

川島　長尾君は実行委員長をやってみてどうだった？

長尾　何と言ってもみくらの里まつり初の雨天決行であったこと。私は、入職して7年経って、みくらの里まつりへの参加自体も7回目でした。今まで前日に雨が降ることは何回かありましたけど、当日になれば必ず晴れてくれてたんですよ。でも今回は、そうはならなかったんですよね。朝起きて雨が降っていた時には、言葉で言い表せない…ショックでしたね。どうしたらいいんだろうなあという思いでいっぱいでした。

川島　でも、結局700名くらい集客できたわけだから。寒かったけど、良かったよ。

長尾　職員の皆さん自分で考えて動いてくれる方ばかりで。反省会で、各ブースからこういうことがあったよ、こういうことがあったよと聞くのですけど、職員の皆さんは、その時に自分で考えたり、また周りと相談しながら、ご利用者の方や来られた方にご迷惑がかからない形で判断してやられていたんだなあと、すごいそれがありがたかったです。本当に私一人の力ではここまでのお祭りはできなかったし、皆さんあっての【みくらの里まつり】だったと思っています。

原田　職員みんなが各施設の祭りなどの経験や実績を積み重ねてできた結果ですね。

長尾　前日に準備をしていても、私が指示を出す前に、これどうするの？とかどんどん声が上がってきて、もう私より皆さんの方がよく知っていて、自分で判断されて動かれるんです。経験の重要性を実感しました。

全国初の自治体間連携特養「エクレシア南伊豆」のオープン逸話

川島　「エクレシア南伊豆」は前年度の3月5日にオープンしましたね。運営が始まったばかりですので、これから職員みんなで新しい提案の具現化を図り、杉並区の方からも賀茂圏域の方からも利用して良かったと言われるような施設に繋がっていってほしいのが、私の希望です。

柏木　スペースの取り方が広々としていて、すれ違

いとかご入居者の事を考えて作られているなあと率直に思いました。
あと、今まで接することのなかった杉並区のご入居者や、そのご家族との会話や接し方について、今後もより良い信頼関係や距離を保ちつつ関わって行けたらいいなあ、と思いますね。

川島　今座って話しているこの場所は、「いずのえんがわ」というところですが、ここが玄関前広場と考えてくれればいいと思っています。ここで柏木君が記録を入力したり、色々なことをしてもらい、多様な使い方を新しく提案してみてほしいですね。もちろん利用者の方々がここで行事を行うという事も一つですし、ご家族の方が面会で使ってもいいし、いろいろな使い方を是非試し、新たな可能性を探ってほしいと思っています。

入職30年の二人から、若い二人へ

原田　柏木君は介護専門、長尾君は経理部門という事もあり、これからもう少し梓友会の法人としての幅や、職種として幅を広げてもらい、施設全体、法人全体を見られるような人に育っていただきたいですね。次の次の世代の梓友会を担うような、二人ともそんな人材になっていただきたい。

川島　いつでもあなたと変われるように。（笑

原田　そうです、そうです。（笑

細田　私が30年間努めたことは、いつでも明るくいようっていうことです。よく言っているのは、女優さんは喜怒哀楽をすごく上手に表現しますよね。その中でやはり、一回施設の玄関に足を踏み入れたら、どんなに辛いことがあっても、笑顔に変えていかないとご利用者に不安を与えるという事になります。常に笑顔は絶やさないでほしいですね。これからもっともっと努力を重ね、何事も諦めないで進んでいってほしいです。ご利用者に対しても歩行がダメ、車椅子だからダメ、ではなく、どうすれば少しでも自立ができるのかな、と考えること。そして自分もチャンスがあれば活かす、そして努力をすること。いつも明るく頭を使って諦めないということを30年間私がやってきたことなので、これをあとの方にも伝えていきたいですね。

川島　私の方からは、先ず柏木君と長尾君、この二人っていうのは、私にとって非常に印象深い採用の記憶があります。非常にやる気が全面に出た二人が、その年度、二人とも採用になったということ、これは長く色々な説明会、面接をやっていて珍しいことなんです。それがあったからこそ、30年周年記念誌の職員対談の中に彼ら二人が入っているんでしょう。
この圏域はこれから先、人口減少と少子化、大きな問題を抱えながら走っていかなくてはいけません。そのエリアに他県から入ってきて、もうすでにこちらで結婚もされ、是非ともこの圏域で長きに渡って定住、そして、移住の良い先行事例として、その後の若手に繋がっていくような働きかけをしてほしいなと思っています。
それは地域を知ることも一つ、地域の集いに参加する事も一つ。その中でこの圏域の人たちが、どんなことに悩み、どんなことに想いを馳せ、この地域を作ってきて今に至るのか。簡単な言葉で言ってしまうと歴史を知るということですが、それよりもあなた方の仕事は、人を支える仕事ですので、ぜひ繋がりを大切にしつつ、地域の人たちと福祉や介護を通じ、繋がり、地域全体を支えてほしい、そう思います。
それから、柏木君は介護男子という、全国的にも極めてユニークな企画に参加していますね。おそらく介護や福祉も形を変えていきます。そういった流れに適応し歩んでいってください。今は介護福祉士という専門職ですが、その中で何ができるのか自分の中で考え、行動をしてほしい。それから長尾君。なかなか現場から距離のある仕事をしていますけれど、社会福祉法人の施設事務は、今も昔も無くてはならない仕事です。福祉の運営に対し、どうやってあなたの仕事を活かせるのかという事を掘り下げていってほしいと思います。今までの流れを見つつ、時代の先を見通すような考え方、それから知識を、じっくりと蓄えていってほしいですね。二人のこれからの梓友会への関わりが、各々の生活の幸せに繋がることを期待しています。頑張ってください。

柏木　ありがとうございます。10年後は40周年、40周年となると、その時ぼくは40歳になっているので、自分が入職してから先輩や上司の方に教えてもらったことをそのまま指導するのではなく、その時々に合った、時代に合わせた指導法、それに合わせて自分たちの法人だけではなく、先ほど理事長がおっしゃっていた地域の人達に何ができるかということを自分自身で考えながら作っていく必要性を感じます。残念ながら、今そういう構想、考えが乏しいので、その10年後に向けて少しずつ、自分の引き出しを広げていきたいです。

長尾　10年後、第三者から見たらもう中堅職員と見られてもおかしくないですが、10年後は中堅の職員ではなく中心の職員になりたいです。では、そのためには何ができるのかと考えたら、細田さんや原田施設長がおっしゃったみたいに、今後この激動していく社会の中でしっかりと将来を見通し、人口減少に伴い一人にかかっていく負担が増していく中で、視野を狭めず、様々なことに興味を持ち、幅広く知識や経験を積んでいきたいし、また、それだけではなく今後はより一層外に目を向けて、アンテナを張り、地域との交流を積極的に行いたいですね。10年後、中心職員になり、先輩方がこいつには任せられる、と思ってもらえるよう、積極的に自発的な行動をしたいなと。いろんな人を巻き込みながらやっていけたらいいのかなと、思っています。

川島　あなた方のこれからの10年というのはおそらく劇的に変わっていきます。それに耐えうる力を、この法人でしっかりと養ってほしいと思います。
本日はどうもありがとうございました。

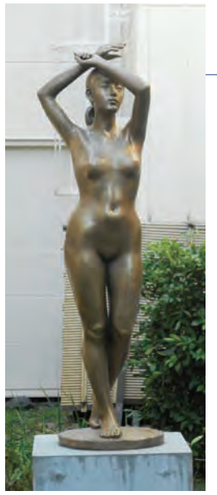
資料編

■寄贈
■表彰
■理事長・理事・監事・評議員・会計監査人任期一覧
■理事長・理事・監事・評議員・会計監査人名簿

寄　贈

社会福祉法人梓友会にていただきましたあたたかい寄贈品を一部ご紹介いたします。

梓の里



2017年（平成29年）10月

松崎町の彫刻家：髙橋忠様より塑像

施設の中庭に設置

第42回 日展入選作品「浮雲」
※2010年（平成22年）10月27日付の伊豆新聞に掲載

2018年（平成30年）3月

下田市立稲生沢中学校様より車椅子

20年以上に渡り、車椅子の寄付をいただいています。

みなとの園

2012年（平成24年）12月

24時間テレビチャリティー委員会様より
24時間テレビ福祉車両（ハイエース）

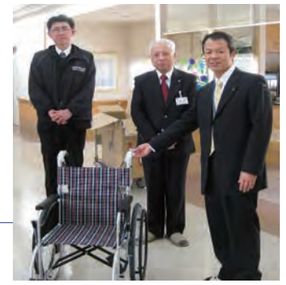
2015年（平成27年）1月

日産プリンス静岡販売株式会社様より
介助用制動ブレーキ付車椅子

太陽の里

2014～2016年（平成26～28年）

松江年恭様より
各種折り紙細工



2015年（平成27年）1月

日産プリンス静岡
販売株式会社様より車椅子

2015年（平成27年）6月

富樫雪江様（ボランティアひばりクラブ）雛人形

2017年（平成29年）9月

鈴木文子様より手作りのかご

みくらの里

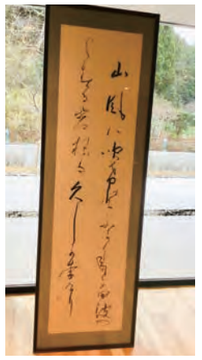
2010年（平成22年）9月

日本清興美術協会
会長 濱田秀美様より
絵画『新緑』

2018年（平成30年）10月

医療法人社団松栄会
ヒロ歯科クリニック様より
車椅子

エクレシア南伊豆

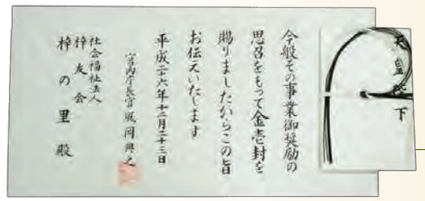


2018年（平成30年）10月

日本書峯会 主宰
木村松峯様より　書

表 彰

社会福祉法人梓友会の施設や職員の活動、研究内容が高い評価をいただいております。
よりよいケアの提供に向け、努めさせていただきます。



梓の里

2014年（平成26年）12月24日
天皇陛下より御下賜金
特別養護老人ホーム梓の里

みくらの里

2014年（平成26年）3月11日
東日本大震災被災地ボランティア派遣
社会福祉法人 梓友会

みなとの園

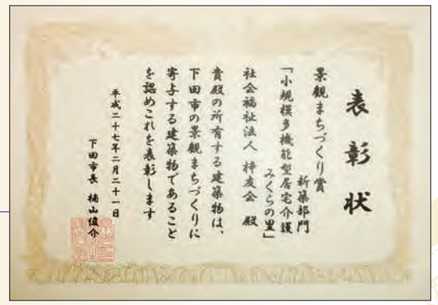
2011年（平成23年）11月22日
第三回静岡県高齢者福祉研究大会
『下剤ゼロを目指して！！』
特別養護老人ホーム みなとの園
管理栄養士：鈴木永実子（当時）
看護師：白鳥明子（当時）
介護福祉士：渡邉美帆（当時）

みくらの里

2011年（平成23年）11月22日
第五回静岡県高齢者福祉研究大会
『記録書式の変更による
ご利用者の水分摂取量の増加』
介護老人福祉施設 みくらの里
ユニットリーダー：高橋将（当時）
ユニットリーダー：柏木大行（当時）

太陽の里

2018年（平成30年）9月16日
ふじのくにケアフェスタ２０１８
ケアコンテスト　入浴（重度）部門　最優秀賞
特別養護老人ホーム太陽の里
ケアパートナー：和泉文俊



小規模みくらの里

2015年（平成27年）2月21日
下田市景観まちづくり賞　新築部門
小規模多機能型居宅介護みくらの里

社会福祉法人梓友会
理事長・理事・監事・評議員・会計監査人任期一覧

※敬称略

平成29年4月1日から施行された社会福祉法人制度改革にて経営組織のガバナンス強化が改正されました。

凡例：理事長　理事　評議員　監事　会計監査人

氏　名	役員種別	S63年	H元年	H2年	H3年	H4年	H5年	H6年	H7年	H8年	H9年	H10年
永田　雅夫	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長
川島　優幸	理事・理事長・評議員							理事	理事	理事	理事	理事
村山恭之助	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事				
永田　雅一	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事					
富永　静枝	理事・評議員	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
石井　　基	理事	理事	理事	理事								
小林　初雄	理事	理事	理事	理事	理事							
石井　重信	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
西山　藤夫	理事・監事・評議員	監事	監事	監事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
鈴木　忠雄	監事	監事	監事									
秋澤　収一	理事		理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事		
土屋　　弘	監事			監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事
井出　　要	監事				監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事
村山　素六	理事				理事	理事	理事	理事				
中村　忠次	理事・評議員								理事	理事	理事	理事
中島　　豊	理事・評議員								理事	理事	理事	理事
土屋　　晃	理事・評議員										理事	理事
土屋都紀夫	理事・評議員											
永田　友子	理事・評議員											
酒井　雅典	理事・評議員											
片山　　康	理事・評議員											
遠藤　　茂	評議員											
堀田　正道	評議員											
永田　雅次	評議員											
稲津　隆夫	評議員											
細田　千秋	評議員											
松田　敏博	評議員											
川島　浩子	理事・評議員											
佐倉　健人	評議員											
山田　尚志	評議員											
佐野　晃一	監事											
高松　　登	評議員											
原田　昌志	評議員											
大滝　康哉	理事・評議員											
山田　政良	理事・評議員											
高橋　安彦	理事・評議員											
佐倉志保子	監事・評議員											
村山　　正	評議員											
笹本　邦廣	評議員											
渡辺サチ子	評議員											
外岡　澄子	監事											
小山　秀夫	評議員											
粗　　信仁	評議員											
齋藤　文彦	評議員											
成田　全弘	評議員											
江渡　　隆	理事											
米田光一朗	会計監査人											

氏　名	H11年	H12年	H13年	H14年	H15年	H16年	H17年	H18年	H19年	H20年	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	H29年	H30年
永田　雅夫																				
川島　優幸	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長	理事長
村山恭之助																				
永田　雅一																				
富永　静枝	理事	理事	評議員																	
石井　　基																				
小林　初雄																				
石井　重信	理事	理事																		
西山　藤夫	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事												
鈴木　忠雄																				
秋澤　収一																				
土屋　　弘	監事	監事	監事	監事	監事	監事														
井出　　要	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事							
村山　素六																				
中村　忠次	理事	理事	評議員	評議員																
中島　　豊	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	評議員	評議員
土屋　　晃	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
土屋都紀夫	理事	理事	理事	理事	理事	理事														
永田　友子	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員							
酒井　雅典	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
片山　　康			評議員	評議員	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事		
遠藤　　茂			評議員	評議員	評議員	評議員														
堀田　正道			評議員	評議員																
永田　雅次			評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員		
稲津　隆夫			評議員	評議員																
細田　千秋			評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員		
松田　敏博				評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員		
川島　浩子					評議員	評議員	評議員	評議員	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事
佐倉　健人					評議員	評議員	評議員	評議員	評議員											
山田　尚志					評議員	評議員	評議員	評議員												
佐野　晃一							監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事	監事
高松　　登							評議員	評議員	評議員											
原田　昌志							評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員		
大滝　康哉									理事	理事	理事									
山田　政良									評議員	評議員	評議員	理事	理事	理事	理事	理事	理事	理事	評議員	評議員
高橋　安彦										評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	理事	理事
佐倉志保子										評議員	評議員	評議員	評議員	監事	監事	評議員	評議員	評議員		
村山　　正											評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員	評議員
笹本　邦廣														評議員	評議員	評議員	評議員	評議員		
渡辺サチ子														評議員	評議員					
外岡　澄子																監事	監事	監事	監事	監事
小山　秀夫																			評議員	評議員
粗　　信仁																			評議員	評議員
齋藤　文彦																			評議員	評議員
成田　全弘																			評議員	評議員
江渡　　隆																			理事	理事
米田光一朗																			会計監査人	会計監査人

社会福祉法人梓友会
理事長・理事・監事・評議員・会計監査人名簿

※敬称略
2019年（平成31年）1月現在

氏　名	役　職	経　歴・現　職
カワシマ　マサユキ 川島　優幸	理　事　長	社会福祉法人梓友会　理事長
ツチヤ　アキラ 土屋　晃	理　　事	土屋晃司法書士事務所　司法書士
サカイ　マサノリ 酒井　雅典	理　　事	有限会社下田調剤センター　代表取締役
カワシマ　ヒロ コ 川島　浩子	理　　事	元　社会福祉法人梓友会　評議員
タカハシ　ヤスヒコ 高橋　安彦	理　　事	社会福祉法人梓友会　エクレシア南伊豆　施設長
エト　タカシ 江渡　隆	理　　事	社会福祉法人梓友会　法人本部事務局長
サノ　コウイチ 佐野　晃一	監　　事	佐野会計事務所　公認会計士
トノオカ　スミ コ 外岡　澄子	監　　事	元　下田市福祉事務所　所長
コヤマ　ヒデオ 小山　秀夫	評　議　員	兵庫県立大学経営研究科 経営専門職専攻　特命教授
ホボ　ノブヒト 粗　信仁	評　議　員	元　スリランカ日本国特命全権大使 政策研究大学院大学　特任教授　政策研究院　参与
サイトウ　フミヒコ 齋藤　文彦	評　議　員	全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会　理事 特別養護老人ホーム高原荘　本部長
ナリタ　マサヒロ 成田　全弘	評　議　員	青森県藤崎町社会福祉協議会　事務局長
ナカジマ　ユタカ 中島　豊	評　議　員	有限会社三角屋水産　代表取締役会長
ヤマダ　マサヨシ 山田　政良	評　議　員	元　静岡県伊豆健康福祉センター　所長 元　社会福祉法人伊豆つくし会　理事長
ムラヤマ　タダシ 村山　正	評　議　員	元　社会福祉法人梓友会　職員
ヨネダ　コウイチロウ 米田光一朗	会計監査人	米田光一朗公認会計士・税理士事務所　代表

編集後記

『梓友会30周年記念誌』をご覧いただきありがとうございます。

平成30年をもって社会福祉法人梓友会は、創立30周年を迎えました。

今こうして皆さまのお手元に記念誌が届いていることを大変嬉しく思います。

今回記念誌の編集を通し、法人の歴史や様々なご利用者の想いに触れました。その一つひとつが、私たちの知らない“梓友会”との出会いとなり、改めて仕事に向き合うきっかけにもなりました。

この記念誌で、一人でも多くの方に地域とともに歩み続けた『社会福法人梓友会』の軌跡を辿っていただければ幸いです。

各委員が不慣れなため不十分なところが多々ございますが、ご尽力いただきました多くの皆様のおかげで本記念誌は、無事に発刊することができました。編集にあたり、ご多用にも関わらず快く原稿やお写真をお寄せいただきましたご利用者、ご家族、地域、法人関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

これからも社会福祉法人梓友会は“地域とともに”歩み続けます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2019年（平成31年）2月
梓友会30周年記念誌編集委員
法人本部　川島さや加
法人本部　内山　美奈
法人本部　鈴木由美子

梓友会30周年記念誌

発　行　日　2019年3月1日

編　　集　梓友会30周年記念誌編集委員会
発　行　者　社会福祉法人梓友会　理事長　川島優幸
制作・印刷　株式会社プリプレス・センター

発　　行　社会福祉法人梓友会
〒415-0028 静岡県下田市吉佐美1086